
真恋姫無双～黒衣の断罪者～

HIKO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真恋姫無双〜黒衣の断罪者〜

【Nコード】

N5588Q

【作者名】

H I K O

【あらすじ】

なんでも屋「凛々の明星」を営む青年遊梨が友のため、愛する人のため三国の乱世の中を駆け抜ける！！「正義」を貫き通す恋姫無双※この話の主人公は恋姫の世界観のTOVのユーリです、まだまだ至らないところがある作者なので感想やアドバイスなどくださるととても嬉しいです。

プロローグ（前書き）

始めまして、HIKOといいます。
初心者で、初投稿で、駄文しか書けません、
完結目指しががんばります。

プロローグ

ある村で1番大きい屋敷にて

夜の闇とまったく同じ色の髪を持つ青年が歩いている。

青年はある部屋の前で止まった。

その部屋から声が聞こえる

「下民どもめおとなしく言うことを聞いていればいいものを」

「そうですねえ 旦那」

手下らしき男が、杯に酒をつぐ

「それにしても娘を連れて行った時の奴等の顔は傑作だったな」

男は笑いながら杯を傾ける

その時、黒い髪の青年がなかに入ってきた

「なんだ貴様」

手下が青年に向かって行っただが、

一瞬青年が動いたと思うと、手下は血を流して倒れていた

青年の手には剣が握られていた

「ななんだ貴様は何が目的だ」

青年は男に近づく

「や、やめてくれ金はやるし欲しい物はなんでもくれてやるから、な、な」

「俺が望む物はただひとつ」

「な、なんだ言ってみろ」

「お前の命だ」

男は部屋の壁際まで追い込まれた

「や、やめろ助けてくれ」

「お前はその言葉を何度聞いてきた」

「ひっだ、誰か、誰かいらないのか」

男は叫んだが誰も来る気配はない

そして、青年は男に向かってを振り下ろした

翌日男の死体が屋敷の中で見つかった。

プロローグ（後書き）

感想をくれるとうれしいです。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

世界観の問題で当て字を使っているので注意してください

主人公設定

遊梨

洛陽でなんでも屋「凜々の明星」を営んでいる青年。

とある理由から遊梨という名だけで生きてきた

私利私欲のため民を虐げる役人を嫌い、「黒衣の断罪者」として暗殺を繰り返している

皮肉屋で嫌いな相手には容赦ないが、普段は人情に厚く兄貴分的な存在

容姿はTOVのユーリそのまんま

武に優れていて、一対一で負ける事はないが、戦場では一対一の時ほどの力が出せないため、主に護衛などを得意とする。

戦闘スタイルは、愛刀「二番星」をジャグリングする型破りな剣術を使う

「黒衣の断罪者」について

遊梨の着る黒い服からついた名前

正体を知っている人は今のところいないが、噂は洛陽をはじめ様々な場所に広まっている

「凜々の明星」について

遊梨が始めたなんでも屋

「義を持って事を成せ、不義には罰を」を信条にしており、民からの信頼は厚い

働いているのは遊梨だけだが、近所の子供が手伝うこともある

主人公設定（後書き）

後で追加するかもしれません

第1話 凛々の明星（前書き）

本編の始まりです

第1話 凛々の明星

都洛陽にて大量の荷物を持っている青年がいた

「じいさんあんま無理しない方がいいぜ、もう年なんだから」

「すまんのう依頼してもないのに」

隣で歩く老人がすまなそうに言うと、
青年は笑って

「いって、でも今度からは依頼してくれよ。荷物運びなら肉まん1個ぶんでいいからつと、ここだろじいさんの家」

「本当にすまんのう、遊梨」

「だからいって、んじゃまたなじいさん」

そういうと、遊梨と呼ばれた青年は歩いて行った
遊梨はここ洛陽でなんでも屋をしている青年だ。

side 遊梨

ふう、またただ働きしちまった。

依頼人のところに行く途中だったのに、
困った性格してるよな俺も
お、今日の依頼人発見！！

「今日はどうしたんだ？ おばちゃん」

「ああ、遊梨…… 実はこちらの子が昨日から帰ってこないんだよ」

「なるほど、どこいったか心当たりはあるか？」

「確か昨日森に行くと言ってたよ」

「了解、任せときな」

「お願いね」

んじゃまあ、飛ばしていきますか

く森く

さて、誰かいないか

「ヒック　ぐす　お母さん」

つどこだ

「どこだ誰かいるのか」

「ここだよ」

ん　上から声が…
木の上か！

「大丈夫か」

「怖いよく遊梨」

「受け止めるから、飛び降りろ」

「無理だよ」

「俺を信じろ」

「うゝ絶対だよ」

よし、って馬鹿どこに落ちてんだよ！
くそ 間に合うか
俺は滑り込んだ

「ふう、あぶねえ あぶねえ」

「うわーん 遊梨怖かったよゝ」

「ああ、よく頑張ったな。さあ母ちゃんのところいくぞ」

ゝ洛陽ゝ

「お母さん」

「陽、心配したのよ」

「ごめんなさい」

「でも、無事でよかった」

ここで報酬の話なんて野暮な話できねえな
はあ、結局今日は全部ただ働きか

これが遊梨の「凛々の明星」としての日常である

第1話 凛々の明星（後書き）

次回からは恋姫達と絡ませたいと思います

第2話 董卓軍との出会い（前書き）

初めて感想をいただきました
とてもうれしいです

今回から恋姫達が出るのですが、
口調が違いかもしれません注意してください

第2話 董卓軍との出会い

これは遊梨が「凛々の明星」をはじめて民達の間で話題になった時のこと

side 遊梨

俺は今日の依頼を終えて、報酬でもらった肉まんを食べながら家へむかっていた。

「なかなかうまいなこの肉まん」

「・・・・・・・・・・」

「うわっ」

気がついたら赤い髪の子がもの欲しそうにこちらを見ていた。

「欲しいのか？」

「……………コクッ」

「ほら」

とりあえず肉まんをあげてみた
すると彼女はモキュモキュ食べ始めた
なんか和むな……

「ん、もっと欲しいのか？」

「…………コクッ」

「んじゃ全部やるよ」

「……………」ありがとう

彼女は無表情だがどこから嬉しそうだった
つい頭を撫でてしまった
するとどこからか

「ちんきゅーきいーっく」

「きかねえなっ」と

俺はとっさにかわした
なんなんだいったい

「貴様、恋殿に近づくなです」

「…………ちんきゅだめ」

「しかし、恋殿」

「…………だめ」

「うゝわかったのです」

意味が分からない、とりあえず帰ろう
俺はその場を後にしようと歩き出したが、

ガシッ

腕を掴まれた、振り返ると赤い髪の少女だった

「……………一緒にくる」

「はあ？ちよつとまてよ」

「……………いいから」

少女の力が強く俺は引きずられていった

く城く

おいおい、ここ城じゃねえか

なにもんだこいつ

すると紫色の髪のサラシを巻き羽織を羽織った女性が歩いてきた

「おお、恋と誰や？」

「……………知らない」

「はあなんで知らん奴連れて来たんや」

「……………強い」

「ほお恋にそこまで言わせるか、ええやろ」

そこまで言うのと、一緒に歩いて行った

全然状況が掴めないんだが

しばらく歩いて行くと、ある部屋の前で止まり

「詠、入るで」

「どうしたの、霞」

「恋が強い奴連れて来たんや」

「へえ、それは助かるわ」

紫色の髪的女性と緑色の髪の少女がはなしている
と思ったら、こっちに来て

「貴方ね、まず実力を試させてもらいわ。そうね、相手は「はいはい、ウチがやる」じゃあ霞お願いね、中庭に行きましょう」

なんか勝手に話すすんでねえか
まだ引きずられてるし

〽中庭〽

「じゃあ、準備はええか？」

はあしゃあねえやってやるか
久しぶりだな、こいつでやりあうの
飛ばしていきますか

「ああ、いいぜ来な」

「ほんなら、行かせてもらうで」

女性が偃月刀を振って来た

速いな、だが

俺は持ち歩いている剣「二番星」で捌く

「へえ、やるやないか」

「そりゃどうも」

俺は剣を回しながら答える

「なんやそれ、曲芸か？」

「おあいにくさま、これが俺のやり方でねっ」

言うと同時に、偃月刀をはじく

そして、相手の首に剣をつきつけた

「勝負アリだな」

「そのようやな」

「すごい、霞にかつなんて」

「……………やっぱ強い」

みなさん口々に感想を言う
ちよっとやり過ぎたか

「合格よ、自己紹介がまだだったわね、あなた名前は？」

「遊梨だ」

「それだけ？」

「ああ、ちょっと訳ありでな」

「そうか、ウチは張遼、字は文遠、真名は霞や」

「真名までいいのか？」

「ええねん、ええねん」

何かノリが軽いな、あいつみたいだ

「…………恋は呂布奉先、真名は恋」

「恋殿！こんな奴に真名まで教えなくても」

「…………遊梨いい奴」

「うゝわかったのです、ねねは陳宮、真名は音々音なのです」

この二人はよくわからない

「わたしは、賈駆文和、真名は詠よ、次に董卓様の所に案内するわ」

そういうと、玉座の間に案内された

そこには、儚い雰囲気を持つ少女が居た

「あっ詠ちゃん、この人は？」

「この人は遊梨今日から仕える武将よ」

ん？今なんか聞こえなかったか

「そうでしたか、私は董卓、真名は月です」

「ああなんか言いずれえけど、俺士官する気なんてないぞ」

「はあ！どういことよ」

「いや、俺呂布いや、恋に連れてこられただけだし」

「そうなの、恋」

「……コクッ」

「そうだったの、ごめんなさい、勘違いして」

「あんま気にすんなよ、それと俺なんでも屋やってっから、依頼くればいい仕事するぜ」

「そう、わかったわ店の名前は？」

「『凛々の明星』だ」

「『凛々の明星』やって!!」

「知っているの霞？」

「知ってるもなにも、今民の中で、かなり人気のあるところやで」

へえ、そこまで有名になっててんだな

「それじゃ用がある時に依頼させて貰うわ」

「まいど」

「あの、遊梨さん私も依頼してもいいですか？」

「ああ、もちろんいいぜ」

おどおどしながら言う月が可愛らしく
つい頭を撫でてしまった

「へう」

「んじゃおれは帰るぜ」

そういうと、おれは帰った

side 月

遊梨さんかっこよかったなあ

何か依頼してみようかなあ

「詠ちゃん、何か依頼することないかなあ」

「月がして欲しいことを依頼したらいいよ」

して欲しいことかあ、遊梨さんとお話したいなあ
お話相手になってってという依頼はいいのかなあ

今度、お休みの時依頼してみよう

第2話 董卓軍との出会い（後書き）

第2話なのに苦戦しました
キャラの口調は難しいですね
次回はあの猪さんが出ます

第3話 賊討伐（前書き）

2日連続投稿です
前回出なかったあの人がでます

第3話 賊討伐

side 遊梨

月達と初めて会ってから数日
今日は詠から依頼があるといわれ、俺は城に来た
そして、玉座の間に通された
中に入ると、詠と銀髪の女性がいた
あの女どこかで・・・

「ああ、来たわね」

「詠よ、誰だこの男は？」

「紹介がまだだったわね、彼は遊梨なんでも屋よ、そして、彼女は
華雄うちの將軍よ」

ああ、華雄か・・・って華雄！！
まずい、俺の素性が

「お前どこかであつた事ないか？」

「ん、気のせいじゃねえの俺は知らないぜ」

「そうか・・・」

ふう、あぶねえ

とりあえず話題を変えよう

「ところで、依頼の内容は？」

「そうだったわね、依頼は賊討伐よ」

「ちょっと待てこんな奴に任せるのか」

「そうよ、さっき行ったじゃない腕は確かだって」

「納得いくか！貴様、私と勝負しろ」

はあまたか

せっかくの依頼を駄目にする訳にはいかねえしな

「わかった、勝ちやいいんだろ？」

「ちょっと遊梨」

「大丈夫、準備運動代わりだ」

「貴様、私が準備運動代わりだと！表に出ろ」

（中庭）

俺は二番星を、華雄は戦斧を構えている

「2人ともほどほどにね、はじめ！！」

「うおおお」

あの時と同じで猪なんだな

「喰らうかよ」

俺は軽々避ける

「貴様、避けてばかりいないで攻撃したらどうだ」

「そんじぁ、遠慮なく幻狼斬」

俺は切りながら相手の背後に回る技、幻狼斬を使った
そして、首に剣を突きつけた

「なっ」

「はい、俺の勝ち」

「まっまで、貴様今の技は・・・」

あゝ気付いちまったか

「これでいいかな、華雄將軍？」

「それより、貴様何故ここにいる」

「まあいいじゃねえか、それとあまり人に話さないでくれよ」

「わかった、いいだろう」

さて、そろそろ本題に入りますか
詠が近づいてきて

「もういいわね、依頼の話だけど・・・」

「ああ、いいぜ」

「洛陽のすぐ近くの町に賊が来たらしいの、数は10人程度、受けてくれるかしら？」

「わかった、依頼を受けよう」

「そう、頼んだわ」

そして、俺はさっそく行こうと思ったのだが、
華雄に引き止められ

「待て、貴様には話がある」

「ああ、後でな」

そういうと、俺はその場を後にした

（町）

ここか

とりあえず、村長に話を聞くか

「あんたが村長か？」

「はい、そうですが、あなたは」

「俺は遊梨城から来たもんだ、賊の事について教えてくれ」

「おお、貴方が、賊は1日1回ここにきては、食糧を奪っていくのです」

「それで、奴等は今どこに」

「はい、根城にしている洞窟にいると」

「了解、行ってくるわ」

うしろで村長が何か言ってるが、俺は無視して行く事にした

く洞窟く

「はっはっは、あの町の連中俺らが行っただけでもう、怯えてるもんな」

「最初に少し殺しちまったら、もう誰も抵抗しねえんだもんな」

「次からは女も連れてきちまうか？」

「いいなそりあ」

胸くそ悪りい

俺はこの会話を聞いていた

久しぶりにあれになるとするかな

俺は口元に布を巻き、

奴等の前に出て行った

「なんだてめえ」

「貴様らには必要ない」

「何言ってるん」

ザシュ

俺は容赦なく切り捨てた

「なにしゃがんだ」

「おい、この黒い服まさか「黒衣の断罪者」なんじゃ」

「だからどうした全員でやっちゃえば」

俺はもう、他の賊を切り捨てていた

「お、おい頼む見逃してくれ」

俺は無言で近づき最後の1人を殺した
終わった

俺は村に帰って報告し洛陽へと帰って行った

第3話 賊討伐（後書き）

今回は華雄との出会いと黒衣の断罪者としての一面でした
華雄との関係は、そのうち遊梨の幼少時代から洛陽にくるまでの過
去編をする予定なので、そちらで明らかにしたいです。では

第4話 月、霞の依頼（前書き）

拠点フェイズ的な話です

ゝの依頼という形でいきたいと思います

第4話 月、霞の依頼

side 遊梨

今日は、月から依頼があり俺は城に来ていた
依頼内容は話し相手になってほしいとのこと
何ともかわいらしい依頼だ
俺は月の部屋の前に立つと

「月、いるか」

と、聞くと中から

「入っていいですよ」

月が返事をした

「そんじゃ失礼して」

俺が中に入ると

月が中で書を読んでいた

「今日はありがとうございます」

「まあ、仕事だからな、でどうすればいいんだ？」

「あの、遊梨さんの話が聞きたいんです」

「俺の？」

「はい、駄目ですか？」

「いいや、いいぜ、そうだな俺は店を始める前は旅をしててな・・・」

side 月

それからいろんな事を聞きました

旅の事、最近の出来事、凛々の明星の事

全てが私にとって新鮮で、もっと聞きたいと思いました
でも、時間は過ぎていき

「暗くなってきたな、そろそろお開きにしないか」

「そう、ですね・・・」

正直な所まだお話していたいと思っていました
そんな気持ちを察してか遊梨さんは

「今日は楽しかったな、また依頼してくれよ」

と、いって頭をなでてくれました

「へう・・・」

私は恥ずかしくて返事もできませんでした

その後遊梨さんは帰って行きました

私はまた依頼しようと心にきめ

寢床につきました

次の機会が楽しみでなかなか寝れませんでした

side 遊梨

ふう、今日の依頼終了つと

にしてもたまにはこんな依頼もいいかもな
でも生まれを聞かれた時は焦ったぜ

いつか話すときが来るのかねえ

「ただいま」

誰もいない家に言ってしまう
つい言っちゃうんだよな
しかし、誰もないはずの家から

「お帰り」

と、声がした
俺が中をのぞいてみると・・・

霞がいた、片手には酒瓶を持っている

「待ちくたびれたで」

「いや、なんでいるんだ」

「一緒に飲も思うてな、うちの兵から場所聞いたんや」

この感じあいつにそっくりだな
元気だろうか

「どうしたんや急に、もしかして嫌やった？」

「いや、そんなことないぜこっちも美人と飲めて役得だしな」

「／／／もう、うまいこと言うてもなにも出えへんで」

とりあえず、飲むことにした

side 霞

もう、遊梨があんなこと言うから
照れてもうたやないかい

「お、うまいなこの酒」

「そうやろ、そうやろ、うちのいきつけの酒屋のおっちゃんからも
ろうたんやで」

「へえ、今度俺にも教えてくれよ」

たわいもない、話をしてると

ウチは疑問に思っとった事を聞いてみた

「なあ、遊梨って何者なん」

「どうしたんだ、突然」

「いいから答えてえな」

「俺は、なんでも屋のゆ」

「そういう事ちゃうねん、お前のような武をもった奴はそうおらん
お前はどっかの回しもんとちゃうか」

「・・・」

「どうなんや」

「はあ、わかったよ、俺は黒衣の断罪者と呼ばれている」

「なんやて!!!!」

黒衣の断罪者、

黒い服を身にまとい、賊や暴政をしている太守などを次々と暗殺していることから、

民たちからは英雄、賊や太守からは恐怖の象徴とされている

「それはホンマか」

「ああ」

「月を殺すつもりか」

「あいつが民を苦しめるようならな」

静寂がこの場を包む

「なんてな、月が民を苦しめるわけないだろ」

「そうやな、それにしても遊梨が黒衣の断罪者やったなんてな、道理で強いはずや」

それに遊梨やったらウチ等の力になってくれる
そんな気がするわ

「そんなじゃ、ウチは帰るわ」

「そうか、また誘ってくれよ」

「もちろんや、んじゃまたな」

「ああ」

後日、凛々の明星に霞が入り浸っていたことが董卓軍の將軍や軍師
たちにバレ、全員のたまり場のようになってしまったのは別のお話

第4話 月、霞の依頼（後書き）

主人公言っちゃいましたね

でも、出生についてはまだ秘密です
次回は、恋、ねねの依頼です

第5話 恋、音々音の依頼（前書き）

今回はこの二人です

下手な戦闘描写があります

第5話 恋、音々音の依頼

side 遊梨

俺は今自分の剣持ちたたずんでいる

ここは城の中庭、俺の向かいには恋が武器を構えて立っている

何故こうなったかという、数刻前に遡る

俺は月の依頼のついでに、月、詠、恋、ねねとお茶をしていた
すると、詠が

「あんた達ってどっちが強いの」

「それは、恋殿に決まってるのです」

と、ねねはいう

そこで俺は

「さあ、どうだろうな」

わざと挑発するように言う
すると恋が、

「……やる？」

まさかのつてくるとは

まあいいや、俺もいっぺんやってみたかったしな

「じゃ、やりますか」

そして、冒頭からはじまる

「んじゃいくぜ恋」

「……いく」

周りからは

「恋殿ゝそんな奴ぶつとばすのです」

「ほどほどにしなさいよ」

「お、お二人供気を付けて」

上からねね、詠、月である

俺は目の前の恋に集中する

おそらく恋は今までの誰よりも強い

しばらくの静寂の後、俺たちは同時に走り出した
お互いの得物がぶつかり合う

「蒼破！」

「っ！！」

俺は剣から気弾を出す技、蒼破塵を使う
少しひるんだが、恋が向かって来る
まずいな押されてきた、しゃあないあれ使うか

俺は一旦距離をとる

side 恋

遊梨が少し離れた
そして、

「いくぜ恋」

遊梨の感じが変わった
また打ち合うけど、さっきより速いし、強い

「天狼滅牙!!」

今までで一番強い
武器が弾かれてしまった
恋が負けた

「俺の勝ちだな」

「……コクッ」

やっぱり遊梨は強かった
本気でやって初めて負けた

side ねね

今日の前でありえない事が起こった
恋殿が負けた

「そんなはずないです、もう一回勝負するです」

「……恋の負け」

そんな～恋殿が負けるなんて

side 遊梨

いや～危なかった

まさかあそこまで強いとはな

お、そろそろ飯の時間かな

「そろそろ飯でも食うか」

「あ、私と月は仕事があるから」

「んじゃ3人でいくか」

「……コクッ」

「ふん、しょうがないからいつてやるのです」

「ああ、べつに来たくなきゃこなくていいぞ、行こうぜ恋」

「あ、待ってねねも行くのです」

ああ、食った食った
にしても恋食い過ぎだろ、でもなんか憎めないんだよな

「これからどうするよ」

「……恋の家来る？」

「いいのか？」

「……コクッ」

「んじゃ行くか」

しばらく歩いて恋の家に着いた
割と大きいな

「お邪魔しますっておわ!!」

なんだこの動物屋敷は

「……恋の家族」

「動物好きなのか」

「……遊梨は嫌い？」

「まあ、嫌いではないかな」

すると一匹の犬がよって来た

「ん、どうしたんだ？」

「……遊梨懷かれてる」

「懷かれてるねえ」

「……遊梨いい人だから」

「いい人か」

俺はいい人ではないのにな

「……遊梨？」

「なんでもねえよ」

この後しばらく動物と戯れてから帰った

この時洛陽の外で、董卓が暴政をしているという噂が流れているとは思っても見なかった

第5話 恋、音々音の依頼（後書き）

戦闘がカスですね

しかもねねあんまでてないし、作者の力不足です

次回は、華雄、詠の依頼、そして反董卓連合導入まで行きます

そのうち遊梨の技の説明を載せたいと思います

あと今回遊梨が使ったのテイルズでいうオーバールIMITSみたいなもんです。わかんない人はググってください

第6話 華雄、詠の依頼、そして…（前書き）

今日で三日連続投稿です

このペースがいつまでもつか・・・

今回の話では少し過去の話と主人公の秘密が一つあばかれます

第6話 華雄、詠の依頼、そして…

side 遊梨

今日も俺は城に向かっていた

なんか最近こればっかじゃね？

俺は疑問を持ちつつ、歩いて行った

だが、今日は依頼ではなく華雄に呼び出されていた

おそらく、あの話だろう

あんま、言いたくねえけどなあ

城門まで来ると、華雄が待っていた

「ようやく来たか」

「おお、悪りい、悪りい、道に迷ってな」

「そうか、それじゃしょうがないな・・・って迷う訳無いだろうが
！！！！」

「まあ冗談は、置いといて・・・話があるんだろう？」

急に真面目な声で言った

華雄も真剣な表情になり

「そうだな、部屋で話すぞ」

俺は華雄の後について中に入っていた

「さあ、話して貰うぞ、なんでお前がこんなところにいるんだ」程普
”孫呉の黒狼とよばれていたお前が”

「やめろ、その名は捨てたんだ」

「しかも、お前は死んだと聞いたが」

「そこは、秘密って事で」

side 華雄

程普徳謀

そいつと出会ったのは

以前、私の軍と孫堅軍が戦っていた時のことだ

「どうした、私に敵うものはいないのか」

私は前線に立ち武を奮っていた
そこで現れたのがあいつだった

「ちょっと待ちな華雄さんよ」

「む、なんだ貴様は？」

「俺の名は程普、俺と一騎打ちしようや」

「一騎打ちだと、貴様のような奴が私に敵うものか」

「そんなもんは、やってみなきゃわかんねえだろ、それとも、負け

るのが怖いのか？」

「なんだと、その言葉後悔させてやる」

「決まりだな、んじゃ俺が勝ったら、軍を引けよ」

「ふん、勝つのは私だな」

最初は生意気な小僧だと思っていた

一騎打ちをしてもただ受け流すだけでやる気が感じられなかった

「貴様、やる気があるのか！！」

「ああ、あるぜ」

そのときだった、奴の纏っている空気が変わったのは
気がついたら私の首筋に剣が突きつけられていた

「はい、俺の勝ちっ」と

「ま、待て今のは・・・」

「あれゝ天下の華雄將軍がいい訳なんかするのかなゝ」

「くっ」

「それに、俺が勝ったら、軍を引くって言ったよな」

「くそっ全軍引くぞ」

完敗だった

その後で孫呉の黒狼というのがあの小僧だというのは知った
そして、劉表との戦で死んだとも

だがこいつは目の前にいる

もしこいつが月様に危害を加えるようなら・・・

side 遊梨

久しぶりにあの名前を聞いた
もう捨てたはずなのに

「お前は月様に危害を加えるつもりか？」

「なんでそう思うんだ」

「貴様は孫呉の人間だろう」

「もう昔の話だし今はただの遊梨だ、それに月のような優しい奴に
危害なんか加えねえよ」

しばしの沈黙

「ふっその目は、本当のようだな」

「もし俺が月を傷つけるようなら、殺して貰って構わねえぜ」

「だが、そのつもりはないのだろうか？」

「まあ、そうだけどな」

俺たちは小さく笑った

「んで、話は終わりか？」

「ああ、今度は私も依頼させて貰うよ」

「そりあどうも」

「そういえば、詠が用があるって言っていたぞ」

「詠が？わかった、帰りに寄ってみるよ」

俺は華雄の部屋を後にして詠を探す事にした
詠は自分の部屋にいるようだ

「詠、俺だ」

「遊梨？いいわよ」

俺が中にはいると詠は仕事をしていたようだ

「悪い、仕事中だったか？」

「別にいいわよ、用があるって言ったのはこっちだしね」

「で、用ってなんだ？」

「あんたは、董卓が暴政をしている、という噂してる？」

「ああ、噂程度だがな、でもそんな事は無いだろ」

「そうなんだけど、それを理由に袁紹が反董卓連合を作ろうとしているのよ」

「面白くねえ冗談だな」

あの月が暴政なんてするはずねえじゃねえか

「冗談だったら、どんなにいい事か」

「で、俺になんのようにだ？」

「あんたには、月を連れて逃げて欲しいのよ」

「そしたら、お前らどうするんだ」

「反董卓連合を迎え撃つわよ」

「勝てるのか」

「無理ね」

「即答かよ」

「だって兵力差がありすぎるもの、時間稼ぎぐらいにしかならないわ」

「その間に俺たちは逃げればいいわけだ」

「そういう事受けてくれるかしら」

この依頼は受けるべきだろうな
そんな奴等に月を殺させる訳にはいかないしな
だが、一つ気になる事がある

「武将達は降伏すれば命までは取られないだろうが、お前はどうかするんだ」

「・・・・・・」

「身代わりか」

「どうしてわかったの」

「そんなもん、目をみたらわかるぜ」

「そうよ、私が董卓となって連合に降伏するつもりよ」

「どうなるのか、わかってんだだろうな」

「おそらく、死刑でしょうね」

「そういう事じゃねえ、月がどう思うと思ってるんだ」

「っ！」

「自分の所為で、大切な人が死ぬと思うだろうな」

「だってしょうがないじゃない、これしか月が助かる方法はないんだから！！」

「方法がない？本当にそう思うのか」

「なにが言いたいなのよ」

「まだ時間はあるだろう、もっと考えたらいいじゃないか、俺だって協力する、二人が助かる方法を探そうぜ」

「遊梨・・・」

「まだ、諦めんなよ」

「そうね、やってやるわ」

「それでこそ、詠だな」

俺は頭を撫でた

「／／／／／ちよ、ちよっとなにすんのよ」

「ははっついな」

「ついてなによ・・・でも、ありがと」

「まあ、大事なお得意様だからな」

反董卓連合結成まであとわずか

第6話 華雄、詠の依頼、そして…（後書き）

主人公は程普でした！

その辺の話は反董卓連合編が終わってから詳しくやります

あと、前から自覚していたのですが、情景描写が下手すぎですね、そこは初心者なので、大目に見てやってください

第7話 義を持って事を成せ（前書き）

軍議の話です

義を持って事を成せ、は一番好きな言葉です
他にもいろんなセリフを使っていきたいです
では、本編をどうぞ

第7話 義を持って事を成せ

城の玉座の間にて、

董卓軍の將軍と軍師が集まっていた

「みんなよく集まってくれたわね」

詠が声をかける

「今日集まってもらったのは、反董卓連合の事よ」

「ああ、それでどうするんや？」

霞が詠に尋ねる

「私たちはこれを迎え撃つつもりよ」

「「「!!!」」」

霞、華雄、ねねの三人が驚く

恋はいまいち理解していないようだが

「無理にとは言わないわ、今ここで抜けて貰っても構わない」

詠の言葉に四人は黙る

最初に発言したのは霞だった

「抜ける訳ないやろ、月がそんな事する訳ないっちゅーのは、ウチ

らが良く知ってるやろ」

「霞…」

次に華雄が前へ出て

「ふん、そんな連合など私が蹴散らしてくれる」

「華雄…」

最後に、恋とねねが

「……恋が、月守る」

「恋殿がそういうのなら、ねねだってやってやるのです」

「ありがとう、みんな……」

「で、どうするんだ？」

「そうね、全軍を？水関、虎牢関に置き連合を止めるわ」

「ちょっと、待ちいそれやったら、月の守りはどないするんや」

「それなら心配ないわ、彼に頼んだから、入っていいわよ」

「ふう、待ちくたびれたぜ」

「」「」「遊梨」「」

「おう、いかにも遊梨だけど」

「協力してくれるんか」

「ああ、もちろんだ、義を持って事を成せ、不義には罰を、が凛々の明星の信条だからな、ここで依頼を受けなきゃ義に反すると思うぜ」

「と、いう訳だから」

「わかった、頼むで遊梨」

「任しとけ」

「じゃあ、私は月を連れてくるから」

詠はそう言って出て行った

しばらく待っていると詠と月が入ってきた
月はやはり元気がないようだ

「みなさん、ごめんなさい私の所為で…」

「気にすんなや、月は悪くない」

「でも、私の所為でみなさんが大変な目に……そうなるんだったら、私…死んだって」

そこまで言うと、後方からものすごい音がした
みんなが後ろを振り向くと

壁に拳でヒビを入れている遊梨がいた

side 遊梨

死んだっていい

「ふざけてんのか」

冷たく俺は言う

なにもわかつちゃいねえ

「お前が死んだらどうなるってんだ」

「遊…梨さん」

「確かに連合は収まるかもしれねえ、でもな残されたこいつらはどうなる、こいつらは覚悟を決めてここにいるんだ、お前が死んだらこいつらはどうなる、みんなお前が好きだから残ったんだろうが、その覚悟をお前は台無しにするのか、それに月自身の気持ちは、どうなんだこいつらといたいんじゃないのか」

「それは……」

「一緒にいたいんだろ」

「はい……」

「生きたいんだろ」

「は……い……」

「じゃあ、俺に依頼しろ、月の護衛を、俺が守るから」

「グスッ、ゆური…さ、ん、私を…私を守ってください!!!!」

「了解だ、なにがあっても、俺が月を守る」

やっとわかったようだな
おっと、時間とらしたな

「悪いな、待ってもらって」

「いいわよ、ありがとう」

ちょっと熱くなりすぎたな
でも、言ったからには守らねえとな

「ほう、遊梨もやるやないか」

「そんな事よりも月の事は、俺に任せてお前たちも頑張れよ」

「おう、任しとき」

「当然だ」

「……恋、頑張る」

「お前に言われるまでもないのです」

「ふっ言うまでもなかったな」

「じぁあ、軍議を続けるわよ」

その後も軍議は続き、

終わってから宴をする事になった

俺は断ったんだが、月がどうしても言うから参加する事にしたんだが、

かなり後悔する事になった

「遊梨もっと飲もうや」

「遊梨、私と勝負だ」

この二人は、酔って俺に絡んでくるし、

「パクパクパクパクパクパク」

恋はひたすら食ってるし

「恋殿ねねは、ねねは」

ねねは、柱に向かって嘆いてるし

「スースースー」

月と詠は寝てしまった

「遊梨、聞いとるんか」

「遊梨、とつとと得物を抜け」

「パクパクパクパク」

「恋殿」

よし、外に行こう

〵中庭〵

お、星が見えるな

凛々の明星も輝いている

星はどこで見ても綺麗だ

俺は軍議の最後に聞いたことを思い出していた

「そういえば、連合には誰が参加するんだ？」

「まずは、袁紹、曹操、袁術、公孫讃あたりが有名ね、後は義勇軍から名を挙げて来た劉備、ここには天の御使いがいるという噂よ、後は袁術の客将をしている孫策は気を付けたほうがいいわね」

「っ！！」

「どうかしたの？」

「いや、なんでもない」

そうか、あいつが来るのか、そろそろ時が来るかな

「遊梨？」

「ん？ああ、気にすんな続けようぜ」

月を連れて逃げる時は、俺も……

「遊梨さん」

side 月

あ、途中でねちゃってたんだ
辺りを見渡すとみんな寝ていた

でも、遊梨さんがいなかったの、私は探す事にした

遊梨さんはすぐ見つかった

中庭で星を眺めているようだった

私は声をかける事にした

「遊梨さん」

「ん？月か」

「遊梨さん、さっきはありがとうございました」

「ああ、その事か」

「おかげで大切な事を知る事ができました」

「そうか……」

「はい」

「じゃあ、明日から月も頑張らねえとな」

「私も？」

「たとえ戦えなくても、無事を祈る事は出来るだろ、みんなの無事を祈ってやろうぜ」

「はい！」

遊梨さんの言う通りだ、私も頑張らなきゃ

「その前に宴の片付けをしねえとな」

「そうですね」

私は小さく笑った

この後、部屋に戻ったけど私じゃあ運べなくてみんな遊梨さんに運んでもらった

s
i
d
e ? ? ? ?

「ふふふっせいぜい、足掻いて下さいよ、黒衣の断罪者さん」

第7話 義を持って事を成せ（後書き）

次回から反董卓連合との戦が始まります
といっても、舞台はほとんど洛陽です、
主人公には、あの方達と闘ってもらいます
皆さんわかると思います

第8話 白装束（前書き）

昨日はテイルズの新作の発売日でした
もちろん買ってプレイしていますが
更新の方もしっかりしていきたいです

第8話 白装束

side 遊梨

俺は城の中を走っていた

くそ、俺が油断しなけりあ

宴の翌日、霞たち武将は兵を連れて出発した

見送りは俺だけで、月の姿はなかった

昨日の疲れが出たのだろうと思い、特に気にしなかったのが間違いだった

見送りの後、俺は城の中に戻るが、違和感を感じた

人が誰一人いないのだ

やな予感がして俺は月の部屋へと行った

「月！いるか」

予感が当たり月は部屋にいなかった

その瞬間後ろから殺気がして俺はとっさに剣を抜いた

後ろには生気の感じられない白装束の奴が数人いた

俺が様子を伺っていると、奴らが襲いかかってきた

「なんなんだ、いったい」

俺は剣を振るいながら走り出した

一人、また一人と倒して行くがどんどん湧いて出てくる

「くそ、きりがねえなつと、蒼破！」

気弾で道を開く

「その力は明星!!」

明星? なんの事だ

「明星を寄こせ!」

奴らはまだ襲って来る

その最中でも、俺は月の居場所を考えていた
そして、俺はある場所で止まった

玉座の間……

ここから嫌な感じがする

奴らも近づいてこない

扉を開けると、そこには

「月!!」

月と

「おっと、それ以上近づかないで下さい」

眼鏡の男がいた

「何もんだ、あんた」

「私は于吉、外史の管理者です」

外史？管理者？なんのことだ

「んで、その于吉さんはこんなことして何がしたいんだ？」

「あなたの命とその剣ですよ」

「俺とこの剣？」

「あなたは異端者の中でも特別だ、まさか私たちの予想もつかない動きをしてくれるとはね」

「何を言っている」

「そして、孫堅も下手な事をしてくれた」

なに！！いまこいつ何だった

「殺して、剣だけ奪うつもりだったのに、まさかあなたにあげてしまうとはね」

ころした？誰が？誰を？

「そして、あなたが黒衣の断罪者としてその剣で力をつけていかなければ、この様な事をせずにすんだのですがねえ」

「おい、お前があの人を殺したのか」

「あの人？ああ、孫堅ですか、ええ私が殺したのですよ、そしてあなたが言う通りにしないと、董卓も同じ事になりますよ」

月！！

キレそうだった俺は冷静さを取り戻していた
そうだ、俺は月を守らなきゃなんねえ

「おい、」

「なんですか？」

「月返してぶっ倒されんのと、ぶっ倒されて月返すの、どっちか選
びな」

「どちらもお断りしたいですねえ」

「じゃあ、俺が決めてやるよ」

「まあ、私としてはあなたとその剣が手に入ればいいですから、董
卓はもう用済みですからねえ」

「用がねえなら、返してくれねえかな」

刹那

俺は幻狼斬を使い、奴の後ろに回り斬りつけた

「なに！」

「これで形勢逆転だな」

これで月の安全は確保した

「さあ、どうする？」

「これは不味いですねえ、ここは一時引きますか」

「逃がすと思ってるのか」

「では、後は任せましたよ、左慈」

と言うと、奴は消えて行ってしまった

「待てっ」

俺は後を追ったが

違う殺気を感じ、振り向くと

蹴りが飛んで来た

俺は剣で受けとめる

「今度は何だ」

「貴様か、明星を使いこなしている奴は」

「何の事だ」

「貴様が知る必要はない」

く、こいつできるな

俺は月を静かに寝かせる

こいつあ久しぶりに

「飛ばしていきますか」

俺は闘気を解放する

「行くぜ、爪竜連牙斬」

「くっ」

踏み込みながら連撃を繰り出す

「喰らいな、牙狼撃」

「がはっ」

奴の腹に拳を叩き込む

「どうだ」

「ふふふ、ははははははは」

「なにがおかしい」

「いいな、いいぞ遊梨だったか、おれをここまで楽しませてくれたのはお前が初めてだ、もっと楽しませろ」

急に奴の動きが良くなった

「なっ速い」

「どうした、その程度か」

このままじゃあ不味い

「さっきまでの威勢はどうした」

勝負は一瞬決めるぜ……今だ!!

「戦迅狼破」

狼の形をした闘気をぶつける

すると、奴は吹っ飛び壁に叩きつけられた

「がはっ」

「くたばったか」

「いいぞ遊梨もつとだ」

まだ、くるかどんだけだよ

「と、言いたいところだが、時間のようだ北郷一刀が間もなく来るらしい、貴様との決着はまた今度だ」

そこまで言うと、于吉同様消えていった

なんなんだいったい

この剣に一体何が……

でも、月が無事で良かった

にしても疲れたなあ

その数日後、？水関が落ちたと伝令があり

詠が洛陽に戻って来た

なんでも霞に月の近くにいるよう言われたらしい

そして、虎牢関が落ちたと伝令が来るまでそう掛からなかった

霞は曹操に降り、恋と華雄は行方知れずらしい

ついに連合が洛陽にくる

俺は詠に話があり探していた

「詠、話があるんだがいいか」

「ええ、いいわよ」

「ついに連合がくるな」

「そうね…」

「逃げる先は決まっているのか？」

「はつきりとは」

「俺に提案があるんだが……」

この提案が俺たちの今後を左右することになる

第8話 白装束（後書き）

左慈をザギっぽしてしまいました、不快に思う方がいたら、申し訳
ありません

知らない人の為に

ザギとはTOVでユーリを狙う殺し屋で戦闘狂で頭がイっちゃって
る人です

そして、感想をくださったリンクスさんありがとうございました

次回から他の恋姫たちも出る予定です

もちろん、呉が中心になる予定です

三連休中にもう一回更新したいです

第9話 大芝居と再会（前書き）

ついに呉のターンが来ました

メインヒロインのあの人も出ます

後半おいてけぼりの展開があると思います。そこについては、あとがきで、

第9話 大芝居と再会

洛陽の前で連合軍が集結している

それを城から眺めている人物がいた

黒衣の断罪者の格好をしている遊梨である

side 遊梨

おうおう、ずいぶん集まってきたな

俺が詠にした提案はこうだ

「提案？なによ」

「その前に一つ言っておくことがある、俺は黒衣の断罪者だ」

「えっ、それは本当なの」

「ああ」

「あんた、まさか月を」

「それはねえよ、そのつもりだったらここまでしねえよ」

「それもそうね、それで」

「ああ、俺が董卓を殺したといい、奴らを足止めし撤退させる。お前らは凜々の明星で隠れてろ」

「待つて、それじゃああんたはどうなるのよ」

「俺は大丈夫だ、こんくらい余裕だって」

「でも…」

「安心しな、必ず戻るからよ」

「わかったわ、絶対よ、来なかったら月が悲しむわ」

「わかったよ、月の泣き顔なんてみたくなえしな」

あんな事言った以上ちゃんと戻らねえとな
そろそろ行くか

俺は連合に向けて走り出した

く洛陽前の荒野く

よし、一世一代の大芝居行きますか

「ちょっといいかい、連合の皆さんよ」

ああ、のどいてえ

「よく聞け、俺は黒衣の断罪者だ」

『!?!!』

お、驚いてる、驚いてる
俺の知名度もなかなかだな

「洛陽で悪政を敷いていた董卓は俺が殺した!」

ざわざわ

「おい、まじかよ黒衣の断罪者っていやあの」

「それに董卓を殺したって」

兵達が騒いでいる

「首はここにある、これは連合の総大将殿に渡したいと思うが」

「それは本当ですよ!」

こいつが袁紹だな、なるほど馬鹿だ
ここで、殺してやりたいが、さすがにこの数はな

「ああ、ほらよ」

中身はもちろん偽物だ、馬鹿だから気付かないだろう

「んじゃ、俺は帰らせてもらうぜ」

「待ちなさい、貴方うちに仕える気はなくて」

「断る」

「なっ名門袁家の誘いを断るとはどういう事かわかっていますの！」

「ああ、全然わからねえし、わかれうとも思わねえが、いい事教えてやる」

「何ですの」

「どっかの袁家の人が治める土地では、重税をかけていて、民が苦しんでいると聞いてな、俺はそんな奴が一番嫌いだな、次の暗殺の対象にしようと思うんだが、どう思う？」

俺は二つの袁旗があるほうに向かって殺気をだした
すると、袁紹は気絶し、袁術の方でもなにか動きがあったらしい

「ほら、とつとつそこの馬鹿連れて帰んな」

そこまで言うと、両軍は引いていった
ちよろいもんだぜ

「ほらほら、他の皆さんもとつと帰んな」

これで済んだら、楽なんだがな

「待ちなさい」

そうは問屋が降ろさないってね

「ん、なんだ」

「貴方、私の物になりなさい」

「・・・」

「おい、貴様華琳様に失礼だぞ」

「へえ、自分から名乗らずいきなり勧誘するのは、失礼じゃねえのか、いやゝ勉強になったわ」

「なんだと」

話しかけてきた奴の隣にいる奴が今にも斬りかかってきそうな勢いで睨んで来る

「待ちなさい春蘭、そうね私が悪かったわ、私は曹操よこれでいいかしら」

へえ、この嬢ちゃんがあゝの曹操だったとはね

「あんたが曹操か」

「ええ、それで答えを聞かせてくれるかしら」

「悪いが、断らせてもらうわ」

「貴様、華琳様の誘いを」

「春蘭、やめなさい、理由を聞かせて貰おうかしら」

「俺は誰の命令も聞くつもりはない、今までだって自分の意志でやってきた、これからも誰かの下へ行くつもりはねえよ」

「そう…じああ今は諦めておくわ」

「今は、ねえ」

「そう、私は手に入れると言った物は必ず手に入れるのよ、それじゃあね、黒衣の断罪者、全軍引くわよ」

ふうとんでもないお嬢さんだったな

Side 曹操軍

「よろしかったのですか、華琳様」

「何の事かしら、秋蘭」

「黒衣の断罪者の事です」

「確かに惜しいとはおもったわ、でも本人にそのつもりがないならしょうがないわ」

「華琳様！私は反対ですあんな男」

「まあ、噂程度にしか思ってなかったけど、彼は本物よ」

「しかし」

「なあなあ、黒衣の断罪者がいたってホンマか」

「ええ、そうだけどそれがどうかしたの霞」

「いいや、なんでもあらへん（ちゃんと月を守ってくれたんやな遊梨）」

side 遊梨

曹操軍も退却し、そろそろもどろうかと言う時に

「あゝ」

はあ、今度は誰だ

「何だ」

「私は劉備と言います、そして」

「私は関羽だ」

「俺は北郷一刀、天の御使いを名乗っている」

「あんたが、天の御使いか、それで何の用だ」

「あの、私たちの仲間になって欲しいんです」

またか、

「悪りいんだけどさっき言ったとおりだから」

「私たちは命令とかしないですし、力を貸して欲しいだけなんです、ダメですか」

「ああ、もう行くところきまってんだわ」

「そう、ですか」

「ちょっと待ってくれ、俺からも一ついいか」

「なんだ、御使いさま」

「あんたは、何者なんだ」

なにいつてんだこいつ

「それはどういう事だ」

「あ、いや、やっぱいいや」

「そうか」

なんだったんだ

「あの、最後に一つだけいいですか」

劉備が尋ねてくる

「なんだ？」

「貴方は、何故自分だけでこんな事をするんですか、どこかに仕官したりして、世の中を変えようと思わなかったんですか」

なるほど、世間知らずなお嬢さんってところか

「あんたは、それでなにか変わると思のか」

「はい、その為に義勇軍を作ってここまで来て、みんなが笑って暮らせる世の中を目指しているんです」

みんなが笑って暮らせる世の中ねえ

「それは、本気で出来ると思ってるのか」

「えっ」

「貴様、桃香様に向かって！」

「黙れ、俺は劉備に聞いてんだ聞いてんだ、どうなんだ」

「た、確かに難しいかもしれないけど、みんなが手を取り合っていけば」

「俺から言わせれば、それは無理だ」

「っ！何ですか」

「あんたの言うみんなとは誰だ」

「それは、私たちや民のみんな…」

「その中に、例えば董卓は入っていないのか」

「えっ」

「あんたの言うみんなはそう言うことじゃないのか」

「・・・」

「答えられないか、所詮その程度だってことだ」

「貴様！！黙って聞いていれば、貴様に桃香様の何がわかる」

関羽が斬りかかってきた

俺はそれを軽く流しながら答える

「何もわからねえよ、わかりたくもない」

俺は関羽に牙狼撃を叩き込む

「がはっ」

「愛紗！！」

御使いが声をあげる

「安心しな、気絶してるだけだ」

すると、劉備が

「貴方は、なんで暗殺なんてするようになったんですか」

震える声で聞いてきた

「いるんだよ、世の中には死ぬまで人を苦しめる悪党が、そんな連中に弱い人間は一方的に虐げられるだけだ、そんな連中があんたの想像もつかないほど多くいる、だから俺は自分でやってきたんだ、確かにあんたの理想は魅力的に聞こえる、だが、甘すぎるんだ、このままじゃいつか潰れちまう、そこんとこ良く考えな」

「わかり、ました」

「ほら、今日のところは帰んな」

「はい…」

side 劉備軍

「ねえ、ご主人様私間違ってたのかな」

「確かにあの人の言う事も正しかった、でも桃香は桃香だ、これから考えていったらいいさ」

「そうだね、まずは前に進まないと」

「（それにしても、あの人は誰なんだ、桃香達の話では黒衣の断罪者はかなり有名らしいけど、俺の知ってる歴史では、あんな人出て来なかった、やっぱりパラレルワールドなんだな）」

side 遊梨

言い過ぎたか

ほとんど引いていったようだな

一箇所以外、

あの様子だと気付いているようだな

「ちょっと待っててくれ、忘れ物あっから」

ちゃんと気付いているよな

おれは凛々の明星へと足を進めた

side 孫策

私達は洛陽の前で陣取っていた

だが、前方で何かあったようだ、しばらく様子を見てみると、どうやら黒衣の断罪者がいるらしい

私達は後方にいるので、姿が見えない

どんな奴なのかしら？

すると、前方にいた軍がどんどん下がって行く

すると、黒衣の断罪者の姿が見えた

私はあ然とした、なぜなら“彼”が居たからだ、正確には彼に似た人物がいた

私は隣にいる冥琳に尋ねてみた

「ねえ、冥琳あれって」

「確かに彼に似ているな、だが現状では判断できないな」

「そうね」

「行くのか」

「ええ、黒衣の断罪者なら私達の力になってくれるだろうし、それに」

「勘か？」

「まあ、そうね」

「ふっでは行こうか」

私達が行こうとした矢先

「ちょっと待っててくれ、忘れ物あったから」

懐かしい“彼”のこえがした

「ねえ、冥琳やっぱり」

「ふっどうやらその様だな」

ふふふっ再会が楽しみね

side 遊梨

俺は誰もいない街並みを歩いていた
そして、凛々の明星へと行くと

「おーい、大丈夫か」

声をかけると、奥から足音がして

「遊梨さん!!」

月が飛びついてきた

「おっと」

俺は勢いを殺しながら抱きとめる

「遊梨さん! 遊梨さんですよね! ちゃんと生きてますよね!？」

「大丈夫だ、この通り」

そういえば、詠にしか説明してなかったな

「悪かったな、心配かけて」

「本当よ」

「詠…」

奥から詠が出てきた

「月ったら説明したら、私も行くなって聞かなかったもの」

「そうか、本当に悪かったな」

「それで、これからどうするのよ」

「ああ、まず二人には、俺の様に真名だけで生きてもらう、それはいいか？」

「ええ、それはしょうがないからね」

「そしてあくまで案だが、俺の凛々の明星で働かないか？」

「「！！！」」

二人は驚いているようだ、

「もちろん、強制ではないし、二人の自由にすればいいさ」

「月はどうしたい？」

「私は……」

「どうする？」

「私は遊梨さんに行きたいです」

「洛陽にはいられないけどいいのか？」

「構いません」

いい覚悟だ

「そうか、詠はどうする？」

「言うまでもないでしょ」

「ふっそうだな、じゃ行きますか」

「行くって、どこへ？」

「俺の元主の所さ」

さて、久しぶりの再会といきますか

く孫策軍の陣く

「孫策はいるか？」

俺はその辺に居た兵に尋ねる

「あ、貴方は！！どうぞ孫策様は奥の天幕にいらっしゃいます」

「おう、あんがとさん」

俺の事知ってる奴で良かった

「あんた何者なのよ」

「まあ、普通の兵じゃなかったのは確かだな」

そうこうしているうちに、着いたらしい

「こちらです」

「悪いねえ」

ふういつぶりだろうか

「入るぞ」

と言いながら、中へ入ると

何かが飛びついてきた

ふっこういうところは変わってねえな

「おかえり」

「ただいま」

side 孫策

私達は天幕で彼が来るのを待っていた

「ふふふっ、早く来ないかしら」

「いったい何をするつもりだ、雪蓮」

「まあ、再会の挨拶かしらねえ」

なんて言っているうちに、天幕の外から彼の声が聞こえた
そして、

「入るぞ」

彼が入ってくると同時に、彼に抱きついて

一言

「おかえり」

と言うと、彼は

「ただいま」

と返してくれた

第9話 大芝居と再会（後書き）

今回は大変でした、キャラが増えましたから

しかも、かなり無理やりになってしまいました

それで、最後ですが、何故孫策と主人公が知り合いなのか、など色々言いたい事もあると思いますが、それについては、過去編ではつきりさせます。

一話はさんで、その次から過去編に入りたいと思います

第10話 懐かしの（前書き）

おいてけぼりの展開はこれで最後です
呉の将がほとんどでてきます

第10話 懐かしの

side 遊梨

天幕に入ったら、いきなり抱きつかれた
相変わらずだな、こいつも

「久しぶりだな、雪蓮」

「ぶう何でそんなに冷静なのよ、遊梨」

「まあ、予想はついてたからな」

「相変わらずね」

「お前もな」

俺たちは小さく笑い合った
と、ここで

「ごほんっ」

「「あっ」」

「再会の挨拶は済んだか？」

「ああ、悪りいな冥琳、久しぶり」

「ふっそうだな、ところでこの二人は？」

あ、月と詠を忘れてた

「こいつらは…」

さて、どう説明すっかな
そう考えていると、袖を引っぱられた

「遊梨さん…」

「大丈夫だ、こいつ等は信頼出来るから」

「はい…」

「こいつらは、董卓と賈？だ」

「！！！」

「董卓は、貴方が殺したんじゃないの？」

やっぱりそうなるよな

「ああ、あれは偽物だ、本当は悪政なんてしてなかったんだよ」

「なるほど、それでこれからどうするのだ」

「二人には真名だけで生きてもらい、俺が責任をもって引き取るつもりだ、だから保護してくれないか」

「で、遊梨はどうするの？」

「建業にかえるつもりだけど」

「本当！！うちに戻ってくれるの」

「いや、悪りいんだけど、仕官は出来ねえわ」

「えっ」

「ああ、孫呉の黒狼、程普は死んだんだよ」

「そうね…」

雪蓮が悲しそうな顔をする

はあ、こういう顔されるとすげえ困るんだよね

「でも、なんでも屋、凜々の明星の遊梨として依頼なら受け付けるぜ」

「凜々の明星？」

「ああ、洛陽ではかなり人気だったんだぜ」

「ふふっ、わかったわ、よろしくね」

「で、この二人の事だが」

「そうねえ、どうする冥琳」

「まあ、今回の事で、董卓は死んだ事になっている、遊梨が面倒を

見るなら問題ないだろう」

「まあ、こんな少女が董卓だなんて誰もわからないわね、いいわ一緒に連れて行きましょう」

「あんがとな、雪蓮」

「遊梨の頼みだしね」

「ありがとうございます、え」と

「自己紹介がまだだったわね、私は孫策よ」

「私は周瑜だ」

「私は月と申します、本当にありがとうございます」

「私は詠よ、月を保護してくれてありがとう」

「うゝんこっちだけ真名で呼ぶのはなんだから、雪蓮でいいわ」

「私も冥琳で、構わない」

「はい、ありがとうございます、雪蓮様、冥琳様」

とりあえず、これでゆっくりだな

「さて、悪りいな時間とらしちまって」

「いいのよ、蓮華たちもいるから会ってきたら？」

「そうか、んじゃ行ってくるわ」

俺は天幕を出て、蓮華たちを探しに行った

side 月

遊梨さんがいない間、気になっていた事を雪蓮様に聞いてみた

「あの、遊梨さんは何者なんですか」

「それは、私も気になっていたのよ」

どうやら詠ちゃんらしい

「ああ、遊梨は呉の王になるはずだった男だ」

「「えっ」」

「ちょっと冥琳、それはないでしょ」

「正確には雪蓮の夫だな」

「「えーーーーーーー」」

「ま、事情があって旅に出たけど、そんな話もあったわね」

あの遊梨さんが……

「詳しくは本人に聞きなさい」

私たちは驚いて、言葉が出なかった

side 遊梨

俺は蓮華たちを探していた
お、あれは

「おい、祭」

「ん、誰じゃっておお、遊梨ではないか」

「おう、久しぶりだな」

彼女は黄蓋、呉の将の一人だ

「やはり、黒衣の断罪者はお主じゃったか、それで、策殿が恋しくなったのか」

「ははは、まあそういう事にしといてくれ、んで蓮華たちはどこだ」

「ああ、それじゃったらあの天幕におるぞ」

「あんがとさん、またな」

祭と別れて言われた天幕に向かった

「入るぜ」

中に入ると

「なんだ貴様！！いきなり入ってきて…って貴方は！」

「相変わらずだな思春、久しぶり、蓮華、思春」

「〔遊梨（殿）〕」

「貴方、今までどこいったのよ」

「洛陽だけど」

「じゃあまさか、黒衣の断罪者は」

「ああ、俺の事だが」

「やっぱり…それじゃあ呉に来てくれるのね」

「まあその話は後でな、そちらの二人は始めましてだな、俺は遊梨、昔呉で世話になっていた」

「貴方が遊梨さんですか、私は陸遜、字は伯言、真名は穩です」

ゆったりとした奴だな

「貴方があの…わ、私は周泰、字は幼平、真名は明命です」

なんか、撫でたくなるな

「真名までいいのか？」

「はい、あの遊梨さんですから」

あのってなんだ、あいつらなに教えた

「まあ、よろしくな」

「はい！」

「シアオはいないのか？」

「小蓮はまだ合流してないのよ」

蓮華が答える

「そうか、んじゃ挨拶は済んだし、雪蓮たちんとこ戻るわ」

「そう、またね」

「戻ったぞー」

「おかえりー、それじゃあ建業に帰りましょうか」

「そうだな」

「あ、あの遊梨さん」

「ん？どうしたんだ月」

「そ、その遊梨さんが雪蓮さんの夫というのは」

あいつ、喋ったな

俺は雪蓮を睨みつける

そしたら、笑顔で返された

「その話は、建業についてからな」

「逃げたわね」

「逃げたな」

詠と冥琳が言う

「それで、俺の家はまだあるのか」

「ええ、あるわよ、それがどうかしたの？」

「いや、店出さないといけないからな」

「店って、凛々の明星の事？」

「まあな」

「ふーん」

「そんじゃ行きますか、懐かしの建業に」

俺たちはこの後建業に向けて出発した

第10話 懐かしの（後書き）

見事においてけぼりでした、すいませんでも、次回から過去編がスタートします。

主人公の過去、孫呉との出会い、雪蓮との関係についてじっくりやっています

何話になるかは未定です

それと、尊敬している作者さんから感想をもらいました、かなりうれしいです

これからも、こんな作品をよろしくお願いします

第11話 く断罪者の過去く程普（前書き）

今回から過去編が始まります

まずは主人公の少年時代からです

第11話　く断罪者の過去く程普

side 遊梨

俺たちはあれから数日して、建業についた

「懐かしいな」

「ええ、もう何年も戻ってないものね」

雪蓮が返してくれる

「まず、俺の家行くわ」

「そう…後で城に来てちょうだい」

「りょーかい、行こうぜ、月、詠」

「はい、では失礼します、雪蓮様、冥琳様」

そうしてから、俺たちは懐かしの我が家へ向かう

お、ついたついた

「ここだ」

「へえ、割と普通なのね」

「あんまでかくても、しゃーねえしな」

そして中に入る

「割と片付いてんな、雪蓮たちか」

きれいに片付いてるから、おそらく誰かが掃除してくれたのだろう

「あの、遊梨さん」

「ん？どうした月？」

「雪蓮様たちとは、どのような関係なのですか？」

「ああ、その話か」

「で、夫ってどう言う事よ」

「んゝ長くなるぞ」

「構いません」

ま、一緒に仕事するんだからな

「じゃあ、俺の生まれから話さないとな・・・」

side out

これは十年以上前の話

ある村にまだ十歳かそこらの一人の少年がいる

彼の名は程普、真名は遊梨である

彼の両親は元武官で、彼も幼い頃から鍛練を受けていた

「ほら、もっと打ってこい」

「くそ、親父め」

「ふっ今日はここまでにするか」

「はあ、また勝てなかった」

「そう、悲観するな、その歳でそこまで出来れば十分だ」

父親は余裕そうに言う

「まったく、余裕な顔してよく言うぜ」

「では、帰るか母さんが待ってる」

「おう」

二人は並んで歩き出した

「そういえば親父、なんで鍛練なんかさせるようになったんだ？」

「嫌か？」

「んな事ねえけど、ただ気になってさ」

「そうだな、この世はいずれ乱れるだろう、その時にお前が大事な人を守るようになってほしいからだ」

「大事な人か・・・」

「そのうちわかるさ」

「そんなもんかねえ」

「そんなもんだ、ついたな、飯にしよう」

「おかえりなさい、あなた、遊梨」

「ただいま、お袋」

家に入ると、黒髪の女性が出迎えた

「ご飯できてるわよ」

「お、やりー早く食おうぜ」

「ご飯は逃げないわよーって行っちゃったか、あの子も強くなったのね」

「わかるのか？」

「母親ですもの」

「そうか」

「おーい、飯早く食おうぜ」

奥から、遊梨の声が聞こえる

「ふふふ、行きましようか」

「そうだな」

「おせーぞ、早く食おうぜ」

「はいはい、では」

「」「いただきます」「」

「いやーお袋の飯はうまいな」

「おだてても、何も出ないわよ」

しばらく家族団欒が続く

「ごちそうさま、ちょっと散歩でもしてくるわ」

「そう、いつてらっしゃい」

side 遊梨

大事な人か・・・

俺は親父に言われた事を考えていた
まだよくわからねえな

「おっ程普の坊っちゃんどうしたんだ、一人で？」

「坊っちゃん言うな、散歩だよ」

「そうか、桃一つもって行きな」

「おっ、悪いいな」

やりい、食後にちようどいいや
桃をかじりながら、歩いてると

「あ、程普、遊ぼうよ」

近所のガキ共だ

まあ、俺もまだガキなんだが

この村の子供で一番年上なのは俺だ
俺より年上なのは大人しかない

「よし、んじやなにする？」

暇だし付き合ってやりますか

ふう、かなり遊んだな

遊びすぎて何度か怒られたが・・・
そろそろ、暗くなってきたな

「おい、そろそろみんな帰るぞ」

「えー、もっと遊びたいよ」

「そうだよ」

ガキ共が騒ぐが

「駄目だ、もう暗くなってきたし、そろそろ帰んねえと、母ちゃんに怒られるぞ」

「「はい」「」」

「また、遊んでやるからよ、じゃあな」

疲れたなあ、早く帰ってお袋の飯食おう

これが彼の日常である

第11話 く断罪者の過去く程普（後書き）

今回は過去編のプロローグ的な話でした

過去編はやりたい事が結構あるので、何気に長くなりそうです

第12話　く断罪者の過去く旅立ち（前書き）

展開が急かもしれません

第12話 断罪者の過去と旅立ち

side 遊梨

俺は15歳になった

俺と親父はいつものように鍛練をしていた

「おらよっと」

「なんだ、その剣技は？」

「我流だよ、型の通りやるだけが剣じゃねえだろ？」

「確かにそうだが・・・」

俺は剣を空中で回すという、自分で考えた剣技で親父と打ち合っていた

「どうやったら、そんなに器用に出来るんだ？」

「さあ？できちまったもんはしゃあねえだろ」

「それにしても、やりにくいな」

「お、そりゃよかった」

親父の剣を弾く

「！まさか、ここまでやるとは、それはお前にあっているのかもしれない」

れないな」

「そうか？」

「ああ、実際に私より強いのだからな、もう私から教える事はない、自分の剣を極めるがいい」

「つつたって、どうすりゃいいんだ？」

「そうだな、旅に出るというのも一つの選択だ」

「旅か…」

「まあ、いますぐ決めなければならないという物でもあるまい」

「……わかった」

「では、帰るか」

旅か…確かに行きたいと思う自分がいる
だけど、決心がつかない、
俺はどうしたらいいんだ

「おかえりなさい」

考えているうちに家についたらしい

「…ただいま」

「私は少し出てくる」

親父はどこかへ行った

「遊梨、何かあった？」

「いや、別にねえよ」

「嘘ね」

「!! な、なんでだよ」

「私は貴方の母親よ、それくらいわかるわ、いいから言ってみなさい」

「実は……」

俺は親父とのやりとりをお袋に話した

「そう、あの人が……それで貴方はどうしたいの？」

「俺は…行きたいと思う気持ちもあるけど、まだ決心がつかないんだ」

「私たちは貴方が行きたいというのなら止めないわ、まだ決心がつかないならもっと悩みなさい、貴方自身の人生よ」

「そうか、そうだよな、ありがとうお袋」

「ふふ、どういたしまして」

和やかな雰囲気になるが、それを破る声がある

「賊だ！！賊が来たぞ」

「「！！」」

賊だと、

俺はすぐ剣を持ちでていった

「待ちなさい！！遊梨、遊梨！！」

家を出てしばらくすると、逃げる村の人達と、かばうように戦う親父がいた

「親父！！」

「遊梨！？なぜ来た」

「そんな事より、今はする事があるだろ」

「くっ、無理はするなよ」

親父と共に賊へ斬りかかる
ザシュッ

鮮血が飛び散る、
下を見ると、俺が斬った賊が転がっている
殺した？誰が？

「死ね！」

賊がまた襲ってくる
ザシュッ

また、斬った

「俺が殺した？」

うっ、吐き気が襲う

「おい、遊梨しっかりしろ！！」

「このガキが！！」

賊が襲ってくる

しまった、間に合わない

俺は目をつぶった

グサッ

いっこうに痛みが来ない

恐る恐る目を開けると：

俺をかばうように親父が立っていた

「ゴホッ」

「おい、親父、どうしたんだよ」

親父は返事をしない

「おいおい、冗談きついぜ？なんか喋ってくれよ」

「遊…梨」

「お、なんだよ親父？」

「無…事か？」

「あ、ああ、なんでもねえよ」

「そうか、ならばよ…かつ…た」

「おい、親父？どうしたんだよ、おい！！」

親父は何も言わない

「うそだろ、おやじい、嘘だっっていってくれよ！！」

「はっはっは、こいつ死んじまいやがったぜ」

こいつ等が親父を…

「……お前らが」

「ああん」

「お前らさえ来なければ、親父は、親父は！！」

そこから後の事は覚えていない
気が付いたら自分の部屋で寝ていた
起きて見ると、

「お袋……」

「あ、気が付いたのね」

「ぞ、賊は!？」

「落ち着きなさい、もういないわ、貴方のお陰で」

「親父は!？」

そう言うとお袋が目を伏せて首を横にふった

「そんな…俺だ、俺のせいだ、俺が無理して行ったから…」

「・・・」

「俺が行かなければ、親父は…親父は!!」

バチンッ

お袋にはたかれた

「しっかりしなさい!! 遊梨!!」

「!!!!」

「貴方が行かなくても、あの数じゃ危なかったわ」

「で、でも」

「あの人が今まで教えてきた事を忘れたの？」

「教えてきた事？」

「ええ、あの人は言っていた筈よ、その武で大事な人を守れ、と」

「・・・」

「それをあの人が最後に教えてくれたじゃない、大事な人を守って
いったのだから、あの人も悔いはない筈よ」

「でも、俺なんかが」

「そんな事言っては駄目よ、貴方は私たちの大事な息子なんだから」

「お袋：悪りい俺が馬鹿だったわ、そうだよな親父はそれを最後に
教えてくれた、それを背負って行くよ」

「それがいいわ」

「さて、んじゃあ準備しますか」

「準備って、何の？」

「旅だよ、旅」

「行くのね」

「ああ、親父の言っていた事を確かめにな」

「止めはしないわ、行って来なさい！！」

「ああ！！」

「翌日」

「本当に行っちゃうの？」

ガキ共が騒ぐ

「悪いいな、決めた事なんだ、お前達で村を守ってやれよ」

「うん、わかった」

「ありがとうなみんな、見送りにまで来てくれて」

「頑張りなさい」

「達者でな」

「気をつけて」

「しばらくしたら、帰ってこいよ」

みんなから言葉をもらう

「じゃあ、行ってくるぜ」

『いってらっしゃーい』

俺は旅立った、親父の言っていた事を確かめに

第12話　く断罪者の過去く旅立ち（後書き）

今回は少し急ぎでした

恋姫達の登場はもう少しお待ちください

第13話 く断罪者の過去く出会い（前書き）

誰と出会うのかは見てのお楽しみです

第13話 断罪者の過去と出会い

side 遊梨

俺が旅に出て数週間がたった

すでにいくつかの村や街を見てきた

活気のある街、賊に襲われた後の村など

ここまで違いがある事に俺は驚いていた

そして、今は……

「ふう、今日はあの村まで行きますか」

小さな村を見つけた

結構活気のある村だ

そこで、定食屋を見つけ中に入った

「いらっしやい」

「ラーメン一つ頼むわ」

「にいちちゃん、見ない顔だね、旅の者か？」

「まあ、そんなとこだ、にしてもいい村だな」

「そりあそうだ、この辺りは孫堅様がおさめているからな」

孫堅か：旅の中でその名は聞いていた

民の事を一番に思っていて、いい政をしているらしい

「そんなにいい太守様なら、一度お目にかかりたいもんだな」

「運が良かったなにいちゃん、もうすぐ孫堅様が視察に来るらしいぜ」

「へえ、太守自らか？」

「ああ、年に何回かは来てくれるんだ」

「じゃあ、一目見てから出発しますかね」

「それがいいや、へいラーメンお待ち」

「お、うまそうだな」

いたたきます、と言い食べようとした、その時

「賊だー、賊が来たぞー」

「「!?!」」

これは、あの時と同じだな

「おい、にいちゃん逃げるぞ」

「なあ、太守様はもうすぐ来るんだよな？」

「あ、ああそれがどうかしたのか？」

「俺が太守様が来るまで、時間を稼ぐよ」

「なっそりや危ねえよ」

「そう思ってくれんなら、早く連れてきてくれよ」

「おい、にいちゃん!!」

俺は走り出した

しばらくすると、賊が村を荒らしていた

「ちょっと待ってくんねえかな」

「なんだ、てめえは？」

「誰でもいいじゃねえか、そこでちょっと付き合ってもらうぜ」

俺は剣を抜き、賊に向かって行った

side ????

私は視察のため、この辺りの村を見て回っていた

「この辺りもだいぶ豊かになってきたな、祭」

「そうじゃのう、堅殿」

隣の祭が答えてくれる
すると、兵がやって来て

「大変です、孫堅様」

「何事だ」

「この近くの村を賊が襲っているようです」

「なに、それは本当か？」

「はい、今、その村から来た者が」

「よし、すぐに向かうぞ」

無事でいてくれ

side 遊梨

俺は数十人の賊共と戦っていた

「おらよっと」

「がはっ」

一人、また一人と倒していく

「死ねえ」

ザシュッ

また一つ命を奪った

旅の途中何度か賊を倒してきたが
この感覚にはまだ慣れない

「このガキがあ」

「くっ」

まずいな、さすがにこの数は

「ふっ、これで終わりだなあ坊主」

ちっ、やられる

その瞬間、後ろの方で、賊が宙を舞っていた
何が起こったんだ？

その方向を見てみると、

「愚かな賊共め、私の大切な呉の民達を傷付けた罪、その身をもつて償うがいい」

腰に剣を二本さしている、桃色の髪の女性が剣を手にとっていた
まさか、あれが…

それにしても、大変な呉の民か

side 孫堅

「全員、賊を一人も逃がすな」

命令をしながら、さっきまで戦っていた少年に近づく

「少年、大丈夫か？」

「あ、ああ、あんたは？」

「自己紹介は後だ、賊を片付けるが、お前は どうする？」

私は少年に聞いた

「行くぜ」

「ふっ、いい返事だ、では行くぞ」

それから、早かった

結構数はいたが、所詮は賊、被害を出さずに鎮圧できた

「ふう、怪我は無いか少年」

「ああ、おかげさまでな」

「そうか、私は孫堅、この辺りをおさめているものだ」

side 遊梨

やっぱりか

「程普だ」

「程普か、今回はお前のお陰で民を守る事ができた、礼を言わせて

もらおう」

と、頭を下げられた

「おいおい、太守様がそう簡単に頭下げんなよ」

「そうか、所で旅のものだそうだが、今日の宿は決まっているのか？」

「いや、まだだけど…」

「なら、私の城に来ないか？」

城にか、確かにいつかはいくつもりだったし、この人に興味が出たからな

「んじゃあ、お邪魔させてもらおうかな」

「そうか、そうか、なら一緒に行こうか」

と、いう時に一人の女性が近づいてきた

「おい、堅殿！」

銀髪の女性だ

「祭、どうしたの？」

「探しましたぞ、こやつは？」

「この子は程普、賊を足止めしていた子よ、城に招待しようと思うの」

「そうじゃったか、儂は黄蓋、堅殿の下で武将をしておる」

「よろしく」

「では、行くわよ」

出発しようとした時

「孫堅様、ありがとうございました」

「さすが、孫堅様だ」

村の人からたくさんの賛辞を受けた

「人望があるんだな」

「そうか？」

「ああ、旅している時もよく噂を聞いたぜ」

「私はこの地が好きなのだ」

「そうか…」

親父と似たような考えだな

「さあ、いつまでも話していないで、出発するぞ」

この人の下でなら親父の言いたかった事がわかるかもしれないな

第13話 く断罪者の過去く出会い（後書き）

孫堅との出会いでした、設定は次回にて
今更ですが、主人公は孫策と同一年です

第14話 断罪者の過去 孫呉（前書き）

お気に入り登録が100件を越えました

この小説を見てくださっている皆さんに感謝です

第14話 断罪者の過去 孫呉

side 遊梨

村を発してしばらくすると、大きな街についた
すごい活気だ

「いい街だな」

「ふっ、それはどうも」

孫堅が答える

「さあ、着いたぞ」

「ここが…」

第一印象は驚きだった

「でけえな」

「まあ、これでも太守だからな、入るぞ」

中に入ると、玉座の間のような所に通された

「少しまっっている」

孫堅はどこかへ行った

「程普よ、お主はなぜ旅をしていたのじゃ？」

黄蓋が聞いて来る

「ん？ああ、それはな……」

話そうとした時、扉が開いて

「待たせたな」

孫堅が入って来た、俺と同じくらいの年の子を連れている

「いや、全然待ってねえぜ」

「そうか…こいつは、私の娘で」

「孫策よ、貴方強いんですって、私と勝負しない？」

はあ？いきなりなに言ってるんだ？

「雪蓮、いきなりそれはないだろ、程普すまなかったな」

「別に気にしてねえよ」

「ぶう、母様ったら」

「それよりも、程普村を守ってくれた事、改めて礼を言わせてもらおう」

「いいって、礼なら散々聞いたよ」

「そうか、なら私の用事は終わりだな、雪蓮後は好きにしていーぞ
へっ？」

「さすが母様、さあ行きましょ」

「って、ちょっと待てえー」

俺の叫びも虚しく、中庭に連れて来られた

「さあ、やりましょ？」

しゃあねえ、腹くるるか

「なあ、俺の事何て聞いたんだ？」

「えっとねえ、数十人の賊を相手に一人で立ち回った、かっこいい男の子かな」

まあ、その通りだが、かっこいいは余計だろ

「もういいでしょ」

「ああ、そんじゃあ、飛ばしていきますか」

side 孫堅

私と祭は、二人の勝負を見ていた

「なあ、どっちが勝つと思う？」

「そうじゃのう、あの小僧も、なかなかの氣を持っておるが策殿ほどではないのお」

確かに、私も彼が戦っている所を見たが、雪蓮ほどではないと思っていた
だが、

「飛ばしていきますか」

ゾクッ

程普の雰囲気が変わった
なんだ、この感じは

「堅殿、これはいったい？」

どうやら、祭も氣が付いたらしい

「わからない、ただ…」

いい拾い物をしたようだ

side 遊梨

孫策が斬りかかってきた
俺は剣で受け流す

「へえ、やるじゃない」

「そりゃどうもっと」

「どうして、やり返さないのよ」

「そんなじゃ、そろそろお終いにしようぜ」

あの技試してみっかな

「行くぜ、蒼破！」

俺は氣弾を撃ち出す

「!!」

孫策が怯んだ所で、劍を弾く

「これで、終わりだな」

「そのようね、貴方って本当に強いね、こんなにあっさり負けたの、母様以来よ」

「そいつは良かった」

俺は手を差し出す

「ほら、立てるか？」

「ええ、ありがとう、それと私の事は雪蓮でいいわ」

「それって真名だろ？いいのか？」

「ええ、貴方強いし、それに…」

いきなり抱きつかれた

「貴方の事、すごく気に入ったわ♪」

「おいおい、会ってあんま経ってねえぞ」

「いいの」

「そうかよ、俺の真名は遊梨だ、よろしくな雪蓮」

「よろしく、遊梨」

「ほお、いきなり仲良くなったようだな」

孫堅達が近づいて来た

「おかげでな」

「そのまま、うちの婿になるか？」

「ああ、それがいいわ」

おいおい、いいのかよ

「まあ、冗談はおいといてだな」

「冗談だったの!？」

お前は本気だったのかよ!？

「程普、うちに仕えないか？」

やっぱりな

「なんで、俺みたいなガキを？」

「そうだな、雪蓮ではないが、お前を気に入ったからだ」

「なら、一つ聞かせてほしい、あんたにとって、大事な人とは誰だ？」

俺の旅の目的、大事な人を守れという親父の言葉を確かめるため

「そうだな：娘達や、私に仕えてくれている奴等、そして、呉の地に住む民達が大事な人であり、私の大事な人であり、家族よ」

「そいつ等が危険な目にあったら、どうする？」

「全力で守るわ」

そうか、この人なら：

「あんたのところでなら、俺の旅の目的が果たせそうだ」

「目的って？」

雪蓮が尋ねる

「大事な人を守れという親父の言葉を確かめる事だ、そして、あなたのところでならそれが出来ると思う」

「それじゃあ」

「全然礼儀とか、わかんねえけど、俺の真名は遊梨、あんたに預けるぜ」

「そうか、私の真名は桜蓮^{おうれん}だ、これからよろしく頼むぞ、遊梨」

「俺の真名は祭りゃ」

孫堅と黄蓋から真名を預けられる

「ああ、よろしく頼む」

「それじゃあ、私が城の案内をしてあげるわ」

雪蓮が言う

「そんじゃあ、頼むわ」

「ええ、いきましょ♪」

雪蓮に手を引かれる

こうして、俺は呉で、世話になる事になった

第14話 〱断罪者の過去〱孫呉（後書き）

孫堅のプロフィールです

孫堅

真名 桜蓮 （おうれん）

雪蓮や蓮華達の母親

建業をおさめる太守

呉の民達を一番に思っている

腰に二本剣をさしているが、二刀流ではない
剣については本編にて

真名については、ユーリ↓TOV↓エステル↓ハルル↓桜、といっ
たかんじで決めました
わからない方は申し訳ありません

第15話 く断罪者の過去く挨拶（前書き）

なかなか話がまとまらず、いつもより間が開いてしまいました

第15話　く断罪者の過去く挨拶

side 遊梨

俺はあの後雪蓮に連れて行かれた

「なあ、どこいくんだ？」

「まず、蓮華達に紹介しないとね♪」

ああ、そういえば姉妹だって聞いたな

「妹さんか？」

「ええ、二人いるの、あ、いたいた蓮華く」

「姉様、どうかしたのですか？」

これが雪蓮の妹か、そっくりだな

「彼が今日からうちに仕えることになったから、案内してたの」

「そうだったのですか、私は孫権よ」

「程普だ、よろしく頼む」

「ええ、よろしく」

雪蓮とは違った感じだな

「ちなみに、私と母様達は真名を交換したわよ、蓮華もしたら？」

「っておい雪蓮」

「そうなのですか？」

「まあ、そうだけど無理して預けなくてもいいから」

「そうですか、私の真名は蓮華です」

「いや、だから」

「いいんです、母様もしたというし」

いいもんかねえ

「んじゃ、俺は遊梨だ」

「これから、よろしくね」

「ああ」

「済んだようね、じゃあ次行きましょ」

また引っ張られる

「おい、ちょまてって、またな蓮華」

「で、次は？」

「そうねえ、次は」

「何をしてるんだ、雪蓮？」

後ろから話しかけられた、振り向くと、長い黒髪の女性がたっていた

「冥琳！ちようどよかったわ、彼の案内をしてたのよ」

「それで、そちらは？」

「程普だ、今日から世話になる」

「そうか、私は周瑜、字は公瑾、真名は冥琳だ」

「いや、なんで真名まで？」

「ふっ雪蓮がずいぶん仲が良さそうにしているからな」

よく考えたら、腕組んで歩いてるんだったな

「これは、雪蓮が…」

「冥琳ったら妬いてるんでしょ」

俺話してたよな

「それはどうかな？」

「あーごまかした」

「はいはい、もういいから、俺は遊梨だよろしくな冥琳」

「ああ、こちらこそ、では私は書庫に用事があるのでな」

「そう、またね冥琳♪」

「祭はあの時いたから、あとは小蓮ね」

「そいつは？」

「もう一人の妹よ、まだ子供だけどね、今は勉強してるかしら」

しばらく、行くと部屋から

「いーやーだー」

などという、声が聞こえて来た

「ここね」

と、言っつて雪蓮がその部屋に入っつていった
俺もあとに続く、中には

「小蓮様、お勉強はちゃんとしないと」

侍女らしき人と

「嫌なものは嫌なの」

駄々をこねる、雪蓮達と同じ桃色の髪をした少女がいた

「また、駄々をこねてるの、小蓮」

「あ、お姉ちゃん!! だって嫌なんだもん」

「ちゃんとしないと駄目よ」

「お姉ちゃんだって、たまに仕事抜け出すじゃない」

「うっそれは…」

「ほらね」

どうやら、蓮華と違い雪蓮ににているようだ

「それでそれで、その人は？」

「俺は程普、ここに士官する事になった」

「へえ、私は孫尚香、真名は小蓮よ、シャオってよんでね」

もう慣れたな

「俺は遊梨だ、よろしくなシャオ」

「うん！！じゃあさっそく遊びに…」

「駄目よ、行きましょ遊梨」

「んじゃ、勉強頑張れよシャオ」

「そんな」

「これで、挨拶は終わったわね」

「そうか、それにしてもなんでみんな真名をあずけるんだ？」

「それは、母様に認めたからよ」

「？どういう事だ？」

「母様が真名を預けるなんて滅多にないの、預けたという事は貴方を認めたっていう事なの」

「まだ会って間もないぞ」

「うーん、私の夫にする気だからじゃない？」

「それは無いと思うぞ」

「えーそうかな」

「ま、俺もこんな綺麗な嫁さんいたら嬉しいけどな」

「そうでしょう、ならいいじゃない」

「ふっ考えとくよ」

にしても、本当に何でなんだ

第15話 〽断罪者の過去〽挨拶（後書き）

過去編なんで、主人公達は十代、蓮華は十歳そこそこ、小蓮は十歳に満たないくらいの設定です、原作の蓮華だったら、こんなに柔らかくはないですね、思春は後ほどでてきます

第16話 く断罪者の過去く初陣（前書き）

過去編をどうまとめるか悩み中です、

第16話　く断罪者の過去く初陣

side 遊梨

呉の将達と挨拶が済んだ翌日
俺は玉座の間に呼ばれていた

「賊の討伐？」

「そうだ、雪蓮に任せようと思うのだが、少し不安だな」

桜蓮が言う

「それはいいけど、何で俺なんだ？他にもいるだろ冥琳とか」

「冥琳にも同行してもらうが、冥琳はあくまで軍師だ、お前には雪蓮の護衛をしてもらいたい」

「護衛？」

「そうだ、誰に似たのか雪蓮には突撃する癖があつてな」

「ああ、なるほどな」

確かにあの性格を見るとわからなくもない

それに、後で祭に聞いた話なんだが桜蓮もそうだったらしい

「つまり、雪蓮をあんな無駄茶させなきゃいいんだな」

「そうだ、期待してるぞ」

「まあ、やるだけやってみますか」

玉座の間を後にした俺は出陣の準備をしている、雪蓮達の元へ向かった

「おい、雪蓮」

「あら遊梨どうしたの？」

「いや、俺も同行する事になった」

「そう、でもなんで？」

「雪蓮のお守りだってさ」

「ほう、それは心強いな」

冥琳が口をはさむ、そんなに酷いのか雪蓮の癖って

「ぶう、どういう事よ冥琳」

「お前ないつも突撃ばかりだからな」

「冥琳、そんなに酷いのか？」

「酷いなんてものではないな」

「それは、怖いな」

「まあ、見ればわかるさ」

「二人で話してないで行きましょうよ」

「そうだな」

賊の規模は千人程度、俺等は五百人
勝つ気あんのか、俺は冥琳に聞いてみた

「なあ、この数で大丈夫なのか？」

「そうか、お前は始めてだったな、案ずるな見てればわかる」

？という意味だ？

考えたら、賊が野営している土地に着いたらしい
すると、雪蓮が

「冥琳、どうする？」

「そうだな、とりあえず一当てし、退却するフリをして、伏兵を潜
ませている所までいき、そこで殲滅しよう」

「わかったわ、それじゃあいって来るわね♪」

と言って雪蓮は行ってしまった

「おいちょ、待てって、あー行っちゃったな」

「いつもの事だ」

「苦労してるんだな」

「わかってくれるか」

「「はあ」」

俺たちはため息をついた

「では、私は伏兵の指揮をするから、遊梨は雪蓮を頼む」

「りょーかい」

んじゃ、姫様の護衛に行きますか

俺が行った頃にはすでに戦闘が始まっていた

「どこだ、雪蓮は？」

俺は賊を斬りながら雪蓮を探す

いた！しかし後ろから賊に狙われている
くそっ間に合うか

「蒼破！！」

「ぐはっ」

「大丈夫か？お姫様？」

「遊梨！？」

「まったく、本当に困ったもんだ」

「しょうがないじゃない」

そこで、銅鑼の音が響く

「冥琳からの合図だ、引くぞ」

「ええ、全軍引くわよ」

結果から言うと俺達の圧勝だった

冥琳の策のおかげで、無事殲滅できた

そして、城へと帰る途中

「まったく、あれはどうにかならないのか？」

「ははは」

雪蓮が乾いた笑いをするフリ

「あの時、俺が間に合わなかったらどうなったか」

「だから、謝ってるじゃない」

「今回は良くて、また同じ様な事があったらどうするんだよ」

「その時はまた遊梨が助けってくれればいいじゃない♪そうだ!!遊梨を私の専任にもらうよう母様に頼みましょう」

「はあ？」

「そうだな、それなら私も安心だ」

「冥琳まで!？」

二人はあんな事言っているが、桜蓮が許すはずがないとこの時は思っていた

しかし

「ああ、別にいいぞ」

甘かった…

「それなら、私も安心だしな」

城に帰った後で雪蓮が桜蓮にいったのだが、簡単に通されてしまった

「やった、ありがとう母様」

しやーないか

「そんじゃあ、改めてよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

頼まれたからにはしっかりしねえとな

第16話 く断罪者の過去く初陣（後書き）

この小説ってほとんど、主人公視点ばかりですね、次回から他者視点も増やしていけたらと思います

第17話 く断罪者の過去く日常 上(前書き)

おかげさまで10万PV이었습니다

ここまで見てくださった方ありがとうございます
これからよろしく願います

第17話 断罪者の過去 日常 上

小蓮

side 遊梨

俺は今小蓮を肩車しながら街を歩いている

「ねーねー、次は服屋に行きたい」

「はいはい、わかりましたよお姫様」

なぜこの様な状況になったかというところ、数刻前に遡る

俺は城の中をあるいていた

今更だが、俺は政がまったくわからない

一般常識くらいと読み書きくらいは出来るが、それだけでは文官の手伝いはできない

そして、俺は雪蓮の専任の護衛にされてしまったので、自分の隊なんてものはない

つまり仕事が無い、その事を桜蓮に相談した所、一つの仕事を任された

それが

「シャオ、入るぞ」

そう、シャオのお守りである

「え、遊梨どうしたの？まさかシャオに会いにきたの？」

「んーまあ、そうだな」

「やったー、ねえ何して遊ぶ？」

「遊んでやりたいとこだが、勉強が終わってからだな」

「えー、何ですぐ遊ぼうよ」

「今、やっといて後でゆっくり遊んだ方がいいと思わねえ？」

「でも、勉強なんてしたくないもん」

「そうか、あくあ頑張ったらなんか好きなもん買ってやろうと思ったのになあ」

「ビクッ」

お、反応した、もう一押し

「勉強したくないならしょうがないよなあ、俺は雪蓮んとかいこうかなあ」

「やるっ！！」

お、作戦成功

「やるから、待っててよね」

「おう、頑張れよ」

そう言うのと、すごい速さで問題を解いていった

しばらくして

「で、できた」

「ちゃんとできてるな、やればできるじゃねえか」

俺は頭を撫でてやる

「へへへ、それより早く行こうよ」

「よし、んじゃ行くか」

街に繰り出したら、肩車をせがまれ冒頭に至るわけだ

side 小蓮

私は今、遊梨に肩車してもらっている
とても気持ちがいい

「ねえ、遊梨早く」

「はいはい、ここでもいいのか？」

「うん!!」

ここは私のお気に入りの店だ
しばらく、店を見ていると、一つの髪飾りが気になった

「ねえ、遊梨…」

「ん？それがいいのか？」

「これがいい！！」

「わかったよ、すみませんこれください」

やった

「ほら、つけてみな」

「どう？似合うでしょ」

「おう、シャオに似合ってるぜ」

すごい笑顔で頭を撫でられた
なるほど、お姉ちゃんが惚れるわけだ

「よし、帰るか」

「うん、帰りは手繋いで行こう」

「はいはい、わかりましたよ」

遊梨がお兄ちゃんになればいいのにな
本気でお姉ちゃんとかくっつけようかな

く蓮華く

side 蓮華

私は今勉強をしている、早く民のために仕事をしたいのだけど、私の歳ではまだ任せてもらえない、せめて勉強だけでも、しっかりしないと

「蓮華、いるか」

「遊梨？ いいわよ」

何の用かしら

「邪魔するぞ、って勉強中だったか」

「別にいいわよ、それで何の用？」

「いや、一緒に飯でもと思ってな、一度も一緒した事ねえだろ？」

「そうね、じゃあ行きましようか」

と言って立った瞬間、つまづいてしまった

「おい、大丈夫か？」

転ぶ寸前の所で遊梨が支えてくれた

「ええ、ありがとう、大丈夫よ」

「大丈夫って、目に隈できてんじゃねえか、ちゃんと寝てんのか？」

「いや、勉強してたから」

「はあ、ちょっと待ってろ、何か持ってきてやつから」

と言って彼は行ってしまった

しばらく待っていると

「ほら、飯持ってきてやったから、これ食って寝ろ」

「わかった…」

一口食べると

「おいしい」

「そりゃどうも」

「これは遊梨が？」

「まあな、これでも一応旅しながら自分で飯作ったりしてたからな
そうなんだ

「それで、何でそんなになるまで勉強してたんだ？」

「自分が何もできないのが悔しくて、今勉強してれば役に立てるかなって」

side 遊梨

なるほどな、蓮華は真面目だからか

「確かに勉強してれば将来役にたつかもな、でもそれで今蓮華が倒れたらみんなに迷惑かけるだろ？」

「それは…」

「それに、子供には子供なりの役の立ち方があるもんだぜ？」

「子供なりの？」

「まあ、それは自分で考えろ、それに勉強自体は悪くねえ事なんだ、そこんとこしっかりな」

「ええ、わかったわ」

「そうか、そんじゃあな」

これでもう無茶しなきゃいいが

「俺も飯食わねえとな」

く冥琳く

side 遊梨

俺が歩いていると前から冥琳が歩いてきた、大量の書簡を持っている

「大丈夫か、手伝うぜ」

「すまないな、遊梨」

「いって、それにしてもすごい量だな」

「ああ、うちは文官が少ないからな」

「ふーん、俺も手伝えりゃいいんだけどな」

「気持ちだけ、もらっておこう」

「悪いな」

「別にいいさ、仕事をしない困った奴もいるからな」

「ははは」

雪蓮の事だな

「それにしても、こんなにしたら冥琳がたおれそうだな」

「心配してくれるのか？」

「まあな」

「お前には、お前の仕事があるそれをしっかりしてくれればいいさ」

「おう、任しとけ」

「ふっ、頼もしいな」

「冥琳も、ほどほどにな」

side 冥琳

始めてだな、遊梨のような男は

「あっ冥琳」

「どうした、雪蓮」

「遊梨知らない？」

「遊梨なら、さっきまで一緒にいて、中庭で昼寝するといっていたぞ」

「そう、ありがと♪それより、なんかあった？」

「なにがだ？」

「いや、いつもよりご機嫌だなーって」

そうか、機嫌がいい、か

「そうかもしれないな」

「? 本当になにがあったの？」

「まあ、いろいろな」

「ぶう、何よそれ」

第17話　く断罪者の過去く日常　上（後書き）

いやー、口調が全然掴めません
下は早めに投稿したいと思います

第18話　く断罪者の過去く日常　下

く祭く

side　遊梨

俺は腹が減り厨房へ向かっていた

「あー腹減ったー」

厨房に入ると、

「遊梨ではないか、どうかしたのか？」

「ん？ああ祭、いや腹減ってさ」

「そうか、どれ儂が一つ作ってやろう」

「いいのか？」

「ああ、任せておけ」

しばらく待つと美味しそうな料理が出て来た

「美味そうだな、いただきます」

一口食べると

「美味しいな」

「そうか、それはよかった」

「ああ、こんなに美味しいのは久しぶりだ、なんか礼でもさせてくれ」

「ならば、今夜でも酒盛りに付き合ってもらおうかのう」

「そんなんでいいのか？」

「ああ」

「わかった、そうじゃあ中庭でもどうだ」

「なかなか粹な事を言うのう、わかったでは今夜じゃ」

「おう」

そして、その日の夜

side 祭

「ほれ」

「お、あんがとさん」

「その歳でよくのむもんじゃ」

「まあな、なかなかいい酒だな」

儂は遊梨と酒盛りをしていた
丁度いい機会じゃったから、気になっていた事を遊梨に聞いてみる
事にした

「のう、なぜお主はあのような剣技を使うのじゃ？」

「いや、別に理由なんてねえけど、悪りいか？」

「悪くはないが、あれでは大勢を相手にする時ふりではないか？」

「まあ、確かに大勢でこられたらきついけど、俺は戦をするために
この力をつけたわけじゃねえしな」

「そうか」

「んじゃそろそろお開きにしますか」

「そうじゃの」

「また、誘ってくれよ」

「了解じゃ」

なるほど、堅殿が真名を許す理由がわかった気がするわい

く雪蓮く

side 雪蓮

「遊梨はどこかしら」

私は今遊梨を探していた理由？そんなの会いたいからに決まってるじゃない♪みんなから聞いた話によると、中庭にいるみたい

「いたいた、遊梨ー」

声をかけようとしたけど、出来なかった
なぜなら

「すーすー」

彼は寝息をたてて、気持ち良さそうに寝ていたのだから
それにしても、凛々しい顔よね

「少しくらいならいいわよね」

私は彼の顔に少しずつ顔を近づける
あと少しというところで

「何が少しくらいならいいんだ？」

遊梨が目を覚ましてしまった

「い、いつから聞いてたの？」

「ん？お前が探しに来た時から」

「もう、起きてたのって言ってくればよかったのに」

「それは、俺の勝手だろ？それで何がいいんだ？」

「それも、私の勝手よ」

「「プッ、ははははは」」

私たちは笑いあった

「それで、何か用だったか？」

「遊梨に会いたかったの」

抱きつきながら言う

「そうか」

「ちょっと、何でそんなに冷静なのよ」

「いや、これでもすごく緊張してるかもしれないぜ？」

「本当？」

「ああ」

「私を女としてみる？」

「さあな」

「ぶう、どっちなのよ」

「さあ？ 想像に任せるぜ」

side 遊梨

実際のところ俺にもわからない

確かに雪蓮の事は気になっていると言えるだろう
だが、いままで同年代の奴と接した事なんてなかったから、よくわからねえや

「まあ、ゆっくり考えていきゃあいいか」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない、それでこれからどうする？」

「うーん、特に考えてないわ」

「そんじゃ、もう一眠りしますか、一緒にどうだ？」

「たまにはいいわね」

「ってこのま寝んのか？」

雪蓮は抱きついたままである

「そうよ、駄目？」

「はあ、わかったよ」

「やった、さあ寝ましょう」

「はいはい」

そして、俺等は眠りについた

side out

遊梨達がねむった所は多くの人に見られていた

「ふっ、遊梨なら安心だな」

「そうじゃのう、堅殿」

「まったく、雪蓮ったら」

「これで、遊梨がお兄ちゃんだね」

「そ、そうね」

上から、桜蓮、祭、冥琳、小蓮、蓮華である

「本当に雪蓮の夫にしてしまおうか」

桜蓮がそう呟いたのをきっかけに、呉の民や兵達の間で、程普は孫策の夫、という噂が広まってしまう事となる

く桜蓮く

side 遊梨

俺がここに来て、もう一年が経とうとしている

「もう、一年か」

俺は今屋根の上で星を見ている、とても綺麗な空だ

「こんなところで何をしてるんだ？」

「桜蓮……、いや別に、星を見ているだけだよ」

「そうか、知っているか空を見上げる奴は心に余裕があるそうだ、お前もここに慣れて来たんじゃないか？」

「そうかもな」

俺は気になっていた事を聞いてみる事にした

「なあ、何で俺にすぐ真名を許したんだ？」

「勘だ」

「はあ？」

「だから、勘だ、お前は孫呉を支えていく器だと思ったからだ」

「それだけか？」

「ああ」

それだけだったのかよ

「その勘は当たったようだしな」

「？俺はあんまたいしたことしてねえけど」

「いや、そんな事はないお前が気づいていないだけだ」

「そうなのか」

「ああ」

「それはいいけど、俺自身の事はあんま解決してねえんだよな」

「大事な人を守るか？」

「ああ、まだ俺はそれを解決できてねえ」

「そうか、なら一つ話をしてやろう」

「話？」

「そうだ、この剣の名はわかるか？」

そう言って桜蓮はいつも使っている南海霸王ではない方の刀身が反

っている片刃の剣を見せてきた

「いや、知らねえけど」

「この剣は二番星と言ってな、一番を他の星に譲った星だ、なんでかわかるか？」

俺は首を横に振った

「それは、一番の星を護りたいと思ったからだ」

俺は黙って聞いている

「一番星には一番星の、二番星には二番星にしか、出来ない事があったんだ、それを補い合っていく事で、二つはお互いに輝き合っていたんだ、つまりお互いが大事だったんだろうな、二番星は一番になれる実力を持っていたのに、それを一番星に譲り、影から支えていく事にきめたんだ」

「その話がなんか関係あるのか？」

「昔この剣を使っていた奴は私を守って死んだんだ」

「!!!」

「彼は最後にこう言った「守れてよかった」と」

「その人は」

「ああ、私の旦那だ、今思えばあいつは私にとっての二番星だった

の दौरान」

「そうか…」

「湿っぽくなったな、お前もそろそろ寝ろよ」

「わかった」

俺は自分の部屋に行こうとしたが

「ああ、言い忘れた事があった」

「ん？なんだ？」

「その一番の星は夜を照らす月になり、二番星は凛々の明星と呼ばれるようになったそうだ」

第18話　く断罪者の過去く日常　下（後書き）

雪蓮のここではラブコメ的な感じになってしまいました

そして、二番星については自分でも良くわからなくなっていました
した、解釈については私の勝手なもので、きをつけて下さい

第19話 断罪者の過去 雪蓮

side 遊梨

カキンツカキンツ

俺は今城の中庭で、剣を打ち合っている

「ほらほら、もっと打ってこい」

「はい！はあ！！」

「やるじゃねえか、思春」

俺が今稽古をつけている相手は甘寧、字は興覇、思春というのは真名である、以前河賊の討伐に行った時に河賊を率いていたのが思春だった、俺が一騎打ちをし勝利した所、うちに降りしかも俺に武の師事を頼んできた、最初は面倒だったがなんだかんだで、稽古をつけてやっている

「よし、こんなもんだろ」

「はい！ありがとうございますました遊梨殿」

「おう、ゆっくり休めよ」

思春はいい武を持ってっからいい将になるだろ、蓮華と歳が近いからもう仲良くなったらしい、いい関係になるといいな

「お疲れ様遊梨」

「ん？ああ雪蓮か、あんがとさん」

雪蓮が水を渡してくれた

「ねえ、これから賊の討伐に行くんだけど」

「そうか、んじゃ準備してくるな」

「ええ、お願い」

「待ったか？」

「大丈夫よ、行きましょ♪」

俺達は兵を引き連れ出発した

「ねえ遊梨、貴方賊や他の人たちから何て呼ばれているか知ってる？」

「いや、しらねえけど」

「えっとねー、確か“孫呉の黒狼”だったかしら」

「？なんだそれ？」

「貴方いつも、黒い服着てるじゃない？そして変わった剣技を使い、敵の大將に一騎打ちを挑みまくってるかららしいわ」

「へえーそいつは知らなかったな」

確かに雪蓮に無茶させないように一人で大将とこ行って討ち取りまくってたな、他の奴からみれば手柄が欲しくてたまらない貪欲な狼のようにみえるんだろうか？

「まあ、別にどうでもいいや、それより今日冥琳は？」

「なんか、内政が忙しいそうよ」

「そうか」

「な〜に、私より冥琳の方が良かったの？」

「いや、軍師居なくて大丈夫かなってよ」

「ぶう、ノリ悪いわね、それと今回は小規模らしいから私たちだけで大丈夫よ」

「なら、いいや」

確かに兵もすくねえな

「あ、あそこよ先行ってるわね♪」

と言って兵達を連れて先へ行ってしまった

「おい、ちょっと待って、はあ」

俺は馬を飛ばし、雪蓮に追いついた

「あらー、速いのね」

「まあな、それよりもお出迎えのようだな」

「そのようね、なんか多くない？」

「情報が間違ってたんだろうな、はあ、骨が折れそうだな」

「いいじゃない、その方が」

「そう思ってるのは雪蓮だけだと思うぞ」

「そうかしら？」

「ああ、絶対そうだ」

「まあ、どうでもいいじゃない、それより」

「ああ」

「「飛ばしていきますか」」

「なに、俺の真似してんだよつと」

「別にいいじゃない」

お互い軽口を言い合いながら、一人また一人と賊を倒していく

「にしても、大丈夫かこの数？」

俺達は背中合わせになりながら話しかける

「そうね、あと一人増えたらあぶないかも」

「そんじゃあ、その一人は俺が倒してやるよ」

「ふふふ、頼もしいわね」

「いくぜ!!」

しばらく戦っていると、冥琳が隊を率いて来てくれたので、無事討伐する事ができた

「いやー助かったわ、あんがとな冥琳」

「いや、私の情報が間違っていたせいでこの様な事態になってしまった、すまなかったな」

「いって別に、なあ雪蓮」

「・・・」

「雪蓮？」

「（これはまさか！！）ゆ、遊梨私は城に戻るから雪蓮の事を頼んだぞ」

「は？おい冥琳！行っちゃった：何なんだ？」

「遊梨……」

「ん？どうしたんだ雪蓮」

いきなり、抱きつかれた

「いきなり、どうしたんだ？」

「体が、体があつい……」

「おい、大丈夫か？」

「お願い遊梨……」

一体何があったんだ？

「もう我慢出来ない……」

「くっ、少しばかり痛てえぞ」

「うっ」

ふう、何とか気絶はさせられたな

とりあえず、城に帰るか

side 雪蓮

目が覚めたら私の部屋だった

「目えさめたか？」

「遊梨？」

「おう、にしてもなにがあったんだ？」

「え、何の事？」

「覚えてねえのか？」

「うん、全然、何があったの？」

「ああ、賊を討伐した後なんだが……」

その後何があったのか遊梨から聞いた
あちゃーまたやっちゃったのね

「ごめんなさい」

「おいおい、どうしたんだらしくねえぜ」

「だって、貴方に迷惑を」

「別になんかされたわけでもねえよ、それにしてもあれは何だったんだ？」

「私は戦っているときに興奮しちゃうと、あんな風になっちゃうの」

「そうだったのか」

「おかしいでしょ、でもこれだけは全然治らなくて、最近はあるまじりならなかったのだけど」

「そんじゃあ、俺と一緒に戦ってたからあんなった訳だな」

「ええ、でも貴方と一緒にいられないわね」

こんな私じゃあ、一緒にいられない

「誰がんな事決めたんだよ」

「えっ」

「今度またあんなったら、俺が受け止めてやるよ」

「本当に？」

「ああ、俺に任せとけって」

「でも、貴方に迷惑が…」

「気にすんな、人の好意は受け取っておくもんだぜ」

「そうね、ありがとう遊梨♪」

「どういたしまして」

私はやっぱり遊梨の事が

「ねえ遊梨」

「ん？なんだっ」

彼がこっちを向いた瞬間
唇を重ねる

「お、おい何すんだよ」

ふふっ珍しいわあの遊梨が慌てるなんて

「べっつにー、ただのお礼よ」

「へえーんじゃ俺がこんな事してもいいのか？」

彼はいいい終わると同時に私を寝台に押し倒した

「えっちよつと遊梨」

「俺にあんな事しといて、ただで帰ると思ってんのか」

「ちよ、ちよつとまだ心の準備が」

「ぷっはははは」

「え、何よ」

「いやーそんな反応が見れるとはな」

「冗談だったの!？」

「悪い悪い」

「ぶう、意地悪だったのね」

「んじゃあ、これで許してくれよ」

と言って私に口付けた

「えっ」

「そんじゃあな、今日はとっとと寝ろよ」

行っちゃった、もう結局私の事どう思ってるのか、聞けなかったわでも、期待していいのかな
しばらく私はぼおーとしていた

第19話 く断罪者の過去く雪蓮（後書き）

いやー、ヒロインらしさを出そうと思ってこんなになってしまいました

過去編も残りわずか、今週中に終らせたいと思います

第20話　く断罪者の過去く桜蓮

side 遊梨

俺はいつかと同じ様に星空を見上げていた

「また見てるのか？」

「桜蓮：」

桜蓮が話しかけてきた

「いいのか？軍議の途中だったんだろ？」

「お前だって、出てないではないか」

最近劉表との関係が悪化してきていて、今はその事に対する軍議の途中だった

「俺は軍議なんて堅苦しいとこいたくなえんだよ、それよりあんたは王だろうが」

「私だって堅苦しいのは嫌だ」

「はあ、あんたはやっぱ雪蓮の母親だよ」

「冗談だ、軍議はもう終わったよ」

「それで、どうなったんだ？」

「向こうがそのつもりなら、こっちもそれなりの対応をするまでだ」
「つまり……」

戦か

「ああ、お前にも働いてもらうぞ？」

「りょーかい」

「それと、話は変わるが雪蓮とは最近どうなんだ？」

「どうつつたって」

「好きあっているのだろう？」

「さあそれはどうだろうな」

「ふっ、まあいい準備しておけよ」

軽く笑って桜蓮は行ってしまった

「嫌な予感がするな」

この時空の星には雲がかかっていた

そして、戦が始まった

戦況は俺達が有利、このまま行けば俺達が勝つ

「よし、このまま追撃するぞ」

「母様私も行くわ♪」

「ちょっと雪蓮、桜蓮様も……」

この二人は言っても聞かないだろ

「諦めろ冥琳、この二人は言っても聞かないだろ」

「はあ、それもそうか、遊梨、祭殿、お願いします」

「おう」

「任せておけ」

そして、追撃も成功し撤退をしている時の事だった

「余裕だったわね」

「ああ、そうだな」

しかし、何か嫌な予感がする

「っ!?! まずい、全員急げ!?!」

突然桜蓮が声を上げる、
後ろを振り返ると

「おい、なんだありゃ」

道がどんどん崩れている

「いいから、急げ!?!」

すでに兵達の多くは間に合わず悲惨な事になっている

「一体何がどうなってんだ!?!」

「きゃあ!?!」

「雪蓮!?!」

雪蓮が落馬ししまった
まずい! 俺の位置じゃあ間に合わねえ!?!

「くっ」

近くにいた桜蓮が馬から降り雪蓮の下へ行く

「桜蓮!?!」

その時崩れていた道が止まり、俺達と桜蓮達との間に大きな段差ができる

そして桜蓮が

「遊梨!!」

雪蓮を俺に向かって投げてきた
俺は雪蓮を受け止める

「策殿は」

「大丈夫、息してる」

祭の問いに答える、そして

「桜蓮!!」

side 桜蓮

この力奴等か……

「桜蓮、手伸ばせ!!」

遊梨……気持ち嬉しいが

「今助ける!!」

「無理だ置いていけ」

「うっせえ!! 手出せつつてんだよ!!」

「もう無理なんだよ」

私は足がボロボロになっている

「んなもん直せる、手出せ!!」

「遊梨」

「これじゃあ届かねえ、何か他にねえのかよ!!」

「遊梨、わかってんだろ、私はもう無理だ」

私は差してある二本の剣を抜く

「持っていけ」

そして、遊梨に投げた

「南海霸王は雪蓮に、二番星は遊梨、お前が使え」

そう、遊梨ならきつと

「祭、みんなを頼む」

「堅殿……」

「そして遊梨、お前は自分の道を行け」

「俺の、道？」

「そうだ、お前には人の命令で動くのは合っていないだろ」

「それは」

「そして、旅に出るといい」

「旅？」

「ああ、この大陸を見て、自分ですべき事を見つけるんだ」

「すべき事…」

「お前に次の課題をやろう、大事な人を守れ、というのは解決した
だろう？次は自分の正義を貫け、だ」

「自分の正義を？」

「そうだ、今の世の中を見て、自分の正義を見つけろ、それが次の
課題だ」

「わかった……」

そろそろか

「もう長くない、行け」

「堅殿：策殿の事は任せておけ」

「ああ、頼む、そして一つお願いだ」

「なんじゃ？」

「墓はあの場所にひっそりと立てておいてくれ」

「あの場所じゃな、わかった」

ここまでのようね

「どうせなら、遊梨と雪蓮の行く先を見ておきたかったけど、ここで退場のようね」

「桜蓮……」

「行け」

「堅殿、さらばじゃ」

祭は背を向けて歩き出す

「最後に一つだけ、死ぬなよ遊梨」

「ああ、じゃあな」

ふっ男のくせに泣きやがって

「ああ、気をつけてな」

「ありがとう」

嬉しいこと言ってくれるねえ

もう終わりか、どうせなら蓮華や小蓮、それに孫の顔も見たかったな
そこで私の意識は途絶えた

side 遊梨

俺と祭に残った兵達は雪蓮が目覚めるのを待っていた

「ん、あれここは？」

「目え覚めたか？」

「遊梨？」

「ああ」

「っ！！母様は！！」

雪蓮が祭の方を向くが、祭はうつむくだけである

「遊梨い」

「桜蓮、かつこよかったぜ」

言った瞬間雪蓮が抱きついてきた、どうやら泣いてるようだみんな

桜蓮、あんたは大事な人を守ったようだが、
事にしてる奴泣かしてたら、意味ねえぜ
それであんたの事を大

俺は雪蓮を抱き締めながら共に、泣いた

第20話 〱断罪者の過去〱桜蓮（後書き）

色々無理があるけど、TOVの映画を参考にしました、孫堅を死に
ついでには完全な捏造です、でも書いて後悔はしていません、過去編
も後一話明日か明後日には投稿したいとおもいます

P・S

最近返信というものがありました、感想をくださったかた、
本当にすみませんでした、次からはしっかり返信していきます

第21話 く断罪者の過去く己の道（前書き）

ついに過去編最終話ですが、あとがきにて一つお知らせがあります

第21話　く断罪者の過去く己の道

side 遊梨

桜蓮が死んだ事で俺達は勢いを無くし建業へと引いてきた知らせを聞いた民達は悲しみに満ちていた蓮華や小蓮も部屋にこもってしまった

そして、俺と雪蓮は城外の森にある川のほとりに来ていた

「ここでいいのか？」

「ええ、母様はここが好きだったから……」

桜蓮の墓を作っていたのである

「これからどうするんだ？」

「冥琳の話じゃ、袁術の客将になるしかないって、この地は太守は母様で私には受け継がれないとか言ってるね」

「そうか……」

「遊梨は……旅に出るのよね？」

「ああ、桜蓮に言われちゃったからな」

「そう……」

「悪いな、やっぱ俺はどっかの将とか似合わねえんだわ」

「いいのよ、遊梨が自分で決めた事でもあるでしょ」

しばらく沈黙が続く

「俺は帰ってくる」

「えっ」

「俺が帰る場所は二つ、お袋がいる家と、雪蓮のそこだ」

「それって」

「旅に出るからって一生の別れでもねえだろ？それに…」

「それに？」

「いや、やめておこう」

「なんでよ」

「言っちゃったら、旅に出れなくなりそうだからな」

「じゃあ、帰ってきたら聞かせてよね」

「ああ」

「そろそろ帰りましょう、私がしっかりしないと」

「そうだな」

そして、出発の日

「行くのね」

「ああ」

俺は呉の将達に見送られていた
ひとりずつに声をかけるか

「冥琳、雪蓮の事頼んだ」

「ふっ任せておけ」

「それと、俺の扱いだが」

「ああ、死亡扱いにしておく」

「ありがとな」

後は

「祭、全員を支えてやってくれ」

「達者でな」

「思春、蓮華を頼む、少し頭が固いところがあったから」

「遊梨殿、道中お氣をつけて」

「蓮華、王としての自覚を持つのは大事なことだが、自分らしくするのも大事だ、たまには我が儘の一つでもいいってやれ」

「わかったわ、本当にありがとう遊梨」

「シャオ、我が儘言っただけじゃないで、ちゃんと勉強しろよ？」

「遊梨本当に行っちゃうの？」

もう泣きそうである

「ごめんな、決めた事なんだ」

「うう、わかった元気でね」

最後は

「雪蓮、悪りいな途中で抜けちまって」

「いいのよ、それに帰ってくるんでしょ？」

「ああ」

「ならいいじゃない」

「そうだな、んじゃあそろそろ行くわ」

「それじゃあ」

そう言って唇を合わせてくる

「ほう」

「策殿をやるのう」

「えっえっ／＼／＼／」

「うわゝ大胆」

「またね♪」

「ああ、またな」

そうして、俺は旅に出た

く現代く

「と、いう訳だ」

「そんな事があつたんですか」

「あんたが孫呉の黒狼だったなんてね」

月と詠が感想を言う

「でも、あんた何でこの家があんのよ、武将なら城に住むでしょ？」

「ああ、城が何か落ち着かなくてな用意してもらったんだ」

「ふーん」

「んじゃ、そろそろ雪蓮のところ行くか」

「はい」

第21話 く断罪者の過去く己の道（後書き）

ついに過去編終わりました！！

と言いたいところですが、一つ忘れていた事が

主人公がなぜ断罪者になったかを忘れてました

そして、考えた結果……

く断罪者の過去く諸国漫遊編をいつか投稿したいとおもいます

いつかは未定ですが、今回のよりは短くしたいと思っています

そして、次回からは原作に入ります

第22話 宴会

side 遊梨

俺達は雪蓮達の下へ行った

そこでは俺達の紹介や凛々の明星についての話をした

「へえー、義を持って事を成せか、貴方らしいわね」

「まあな、だから義に反する依頼はうけねえぜ？」

「わかってるわよ、ねえ冥琳」

「ああ」

「それと、報酬はきっちりもらうからな」

「ちゃっかりしてるな」

冥琳が笑みをこぼす

「にしてもいいのか？俺らがいて、袁術に監視されてんだろ？」

「それは問題ない、連合が解散したばかりでこちらの監視が甘くなってるからな」

「そうか」

「それじゃあ、宴会しましょ♪」

『はあ？』

「だから宴会よ、遊梨が帰って来たお祝いに」

という訳で

「遊梨ももっと飲みましょうよ♪」

「そうじゃ、そうじゃノリが悪いぞ」

今は酔っ払い二人に絡まれている

「二人とも飲み過ぎなんじゃねえの？」

「そんな事無いわよ」

「こんなもん、飲んだうちに入らんわい」

「へえー言うじゃない、祭」

「策殿こそ」

結局二人で飲み比べを始めてしまった

「迷惑かけたな」

「いや、別にいいよ、にしても冥琳も今まで苦勞してたんだな」

「まったくだ、お前がいなくなってから大変だったのだぞ」

「ははは、悪りい悪りい」

「これから、頼むぞ」

「いや、俺将じゃねえんだけど」

「ふっ気にするな」

俺になにさせる気だよ

次に俺は蓮華達の下へ行く

「よっ蓮華、思春」

「ああ、遊梨、ごめんなさい姉様が迷惑かけて」

「蓮華が謝る事じゃねえよ、雪蓮のあれは俺がいた頃からだろ？」

「それもそうね、それにしても月達はいいい子ね」

「そうかそれは良かった、仲良くしてやってくれ」

「遊梨殿」

「ん？どうした思春」

「今度、手合わせをお願いしたいのですが」

「ああ、構わねえぜ、でも依頼でな」

「わかりました」

「にしても、強くなったな雰囲気わかる」

「ありがとうございます」

次は

「遊梨殿」

「ん、ああ明命だっけか」

「はい、遊梨殿はお猫様は好きですか？」

お猫様？

猫好きなのか？

「ああ、好きではあるけど」

「でしたら、今度一緒に見に行ってくださいませんか？」

「いや、別にいいけど、何で俺？」

「さつき月さんが遊梨殿は動物に好かれると言っていたので」

そういや、月とそんな話した事あったな

「んじゃあ、また今度な」

「はい！」

元気があっていいな

「遊梨さん」

こいつは

「穏だっけか」

「はい、そうですよ」

なんか調子狂うな

「遊梨さんは、本は好きですか」

「ああ、悪りいけどあんま好きじゃねえな」

「そうですか」

そこで近くにいた冥琳が耳元で

「気を付けろ、穏は本を読むと発情する癖があるんだ」

「どんな癖だよ」

「とりあえず、穏を書庫にいれるなよ」

「わかった」

気をつけねえとな

「?どうかしたんですか」

「いや、なんでもない、とりあえずよろしくな」

「はーい」

全員に挨拶は終わったな

「よし、そろそろ帰るぞ、月、詠」

「えー、もうちょっとゆっくりしてってもいいじゃない」

「いろいろやる事があんだよ、またな雪蓮」

「ぶう、じゃあ今度は私が行くわね♪」

「いや、お前は王だろ」

「気にしない、気にしない」

「ほお、そんな事言っていていいのか?」

雪蓮の後ろに怖い顔した冥琳が立っていた

「い、いやね冥琳、冗談よ」

「なら、王らしく仕事に励んでもらおうか」

「そんな」

やっぱ冥琳は苦勞してるんだな

「んじゃ、帰るわ」

「お邪魔しました」

「どうだった、呉の連中は」

「はい、みなさんとてもいい人でした」

「とても、軍師や将に見えなかったわね」

「それもそうだな」

二人とも馴染めたようで良かったな

「よし、明日からやる事があつから、とつとと寝ようぜ」

「はい」

「二人は同じ部屋でいいな」

「構わないわ」

「そんじゃおやすみ」

「おやすみなさい」

第22話 宴会（後書き）

前回原作にはいると言いましたが、よく考えたらほとんどオリジナルでしたね、今更ですけどこの小説は、原作の話をしつつ、オリジナルの話をいれていきます

第23話 独立へ向けて

side 遊梨

建業で凛々の明星を始めて数ヶ月が経った

俺の事を知ってる奴もいたのですぐに話題になり、洛陽の時と同じくらいの人気を見せている

月と詠も仕事に慣れたらしく、今までうちの看板娘だ

「遊梨さん、雪蓮様から依頼ですよ」

「お、ありがとう」

わざわざ書簡で来るって事は…
月から内容を受け取る

「やっぱりな」

へえ、時期がきたか

「どうしたの？」

詠に尋ねられる

「まあ、ちよつとな、俺は雪蓮とこ行ってくる」

さて、気合いれていきますか

side 詠

どうしたのかしらあいつ

「どうしたんだろうね」

どうやら月も同じ事を考えてたらしい

「あ、あいつこれ置いていってるじゃない」

書簡手に取り、読んでみると

“独立”と言だけ書いてあった

「ああ、なるほどね」

「詠ちゃん、わかったの？」

「うん、ほら」

中身を見せると月も納得したようだった

「戦になるのかなあ」

「そうね、でも雪蓮達はそれだけの屈辱を受けてきたから」

「うん：でも遊梨さんになんの依頼なんだろう」

それは気になっていた

凛々の明星への依頼なのか

黒衣の断罪者としてのなのか……

「まあ、遊梨なら大丈夫よ」

「そうだね」

side 遊梨

俺は城に来ていた

「来たのね」

「おう」

「丁度良かったわ、そろそろ来るから」

「来るって誰が？」

「あ、遊〜梨〜♪」

「うわっと」

突然小さなものが飛びついて来た
顔を見てみると

「お、久しぶりだなシャオ」

「うん、久しぶり遊梨♪」

「これで三姉妹揃ったわけだ」

「そうね」

「で、俺は何すんだ？」

「ちょっと待ってて、もうすぐみんな来るから」

しばらく待つと将達も全員集まって来たらん、見ない顔だな

「遊梨はまだだったわね、彼女は」

「りよ、呂蒙と申します」

「彼女は最近武官から軍師になったものだ」

冥琳から説明をうける

「そうか俺は遊梨、昔呉で世話になってな、今は街で凛々の明星を経営してる」

「あ、貴方があの…わ、私の事は亞莎とお呼びください」

「そうか、よろしく亞莎先生」

少しからかって頭を撫でる

「そ、そんな先生だなんて／＼／＼／」

「ふう、遊梨私にも」

「雪蓮はいいだろ」

「そろそろ、話を戻すぞ」

と、冥琳が言って軍議が始まる

どうやら、民達の一揆に乗じて攻め込むらしい

「ここまでいいいか？」

「ああ」

「それで、遊梨への依頼だが…
雪蓮と行動を共にする事だ」

「？それだけか？」

「ああ、基本は護衛と一緒に、だがある程度は自由にしてもらっても構わない、雪蓮から離れなければな」

なるほど、意図がわかったぜ

「わかった、受けよう」

「そうか、頼む」

「それじゃあ遊梨まず行くところあるでしょ？」

「ん？ ああ、あそこか、んじゃ行くか」

俺と雪蓮が来たのは桜蓮の墓だった

「母様、もうすぐ私たちの宿願が叶うわ」

俺は黙って見ている

「それじゃあ、もう行くわ、遊梨はいいの？」

「んじゃ俺も」

そうだな

「桜蓮、俺の正義は必ず貫く、見ていてくれ」

「よし、帰りましょう」

「そうだな、明日もあるし」

「ええ、明日は頼むわね♪」

「おう、任しとけ」

第23話 独立へ向けて（後書き）

今回はシャオとの再会、亞莎の紹介でした、先生を付けるのは亞莎と最初から決めてました、そして今回の冥琳の意図というのは対した事でもないので深く考えなくてもいいです

第24話 ついに独立へ

side 遊梨

ついに独立へ向けての戦いはじまった

やはり袁術はバカでおもしろいくらいに事がうまく進んだ

「まさか、ここまでうまくいくなんてな」

「ええ、まああの袁術ちゃんだし♪」

「それもそうだな」

戦いは俺達の優勢で進んでいる

だが、また嫌な予感がする、洛陽の時の様な…

「よし、行きましょ遊梨♪」

「ああ」

「遊梨頼んだぞ」

「冥琳、依頼の事だが少し条件守れないかもしれない」

「どういう事だ？」

「いや、ちよつとな」

「ふむ、少しだけならいいが…」

「悪いな」

「遊梨、早く行きましょ♪」

「おう」

あの時と同じならまた奴らが…

俺と雪蓮は袁術の城内にはいつていた

狙いは袁術の首だ、冥琳は黒衣の断罪者である俺が袁術の首を取る事で、袁術を悪とし、呉に大義名分が立つ事を周りに知らしめるつもりだ

「うーん、袁術ちゃんはどこかしら？」

「さあ？」

この城の気配あの時に似てるな

またあいつらが出るのではないかと思い、俺は周りを警戒する

「どうしたの遊梨？」

先を歩いていた雪蓮が後ろを振り向く
その時！！

「危ねえ！！」

「えっ、キャッ」

剣を抜き相手の攻撃を受け止める

「お前はっ!!」

「ははは、また会ったな遊梨い」

こいつは確か左慈とかいう

「なんなのこいつ、気配を感じなかった」

「どうやら、俺をご指名のようだ先行っててくれ」

「わかった、後で話してよ」

雪蓮は先へ行った

「今日は于吉とかいうのは居ねえのか？」

「そんなのはどうでもいい、俺と死合おうぜ」

ちっあいつには用があるってのに

「まあいい、行くぜ!!」

俺の二番星と奴の拳がぶつかる
くっなんて奴だ

「おいおい、そんなもんじゃないだろ」

「じゃあねえ、飛ばして行きますか!」

闘気を開放する

「いいぞ、もつとだ」

「くっ互角か」

なんて奴だ、俺も戦うのは嫌いじゃねえけどこいつだけは遠慮したいぜ

「蒼破!!」

気弾を奴に向けて打つ

「はっ」

だが奴は軽々と弾く

「なんだそりゃ!」

あれを使うか、だが隙を作らねえと

「どうした遊梨い、もう終わりか?」

「んな事あねえよ」

「ふっそうだ、そうでないとな」

しゃあねえ、もう一つ上げてくか

「行くぜ？」

これ使うと疲れんだよな
俺は闘気を全開放する

「なに！！」

「お終いにしようぜ！！」

閃け、鮮烈なる刃！」

多方向から左慈を斬りつける

「無辺の闇を鋭く斬り裂き、

仇なすモノを微塵に砕く！」

決まった！！

「漸毅狼影陣！！」

「ぐはっ」

「やったか」

「ふふふ、はははははははは」

「ちっまだ来るか」

「いいぞ、いいぞ遊梨い、もっと俺を楽しませ…」

奴が倒れた

「なんだと、体がもたないだと、ふっやはり俺が認めただけはあるな、次を楽しみにしてるぞ遊梨」

そして奴は消えて行った

「やったか、ふう疲れた、これから絡まれんのかねえ」

とりあえず今は雪蓮を追うか

俺は疲れた体で歩き出した

しばらく行くと、雪蓮が袁術ともう一人おそらく張勳らしき奴に剣を向けていた

「わ、私がかわりになりますから、どうかお嬢様だけは」

「七乃」

しばらく見てるか

「それじゃあ、仲良く逝きなさい」

「「ひー」」

雪蓮が剣を振り…降ろさなかった

「はぁ、もういいわ行きなさい」

「い、いいのか？」

「ええ、そのかわり二度とこの地を踏む事は許さないわ」

「は、はいわかりました、行きましょうお嬢様」

「待ちな」

「遊梨！！どうしたの？そんなボロボロで」

「ちょっとな、それであんたが袁術で間違いないな？」

「そ、そうじゃが、お前は誰じゃ？」

「！？お嬢様、この人黒衣の断罪者ですよ」

「誰じゃそれは？」

「ほら、連合の時、美羽様と袁紹さんを暗殺するとか言っていた…」

「そ、そんな奴が妾に何の用じゃ」

「いや、袁術さんよ、わかってんだろ？」

「ひっ」

「ちょっとはしゃぎすぎたな、そろそろ舞台から降りてくんねえかな」

俺は低い声で言う
すると

「ひゃあ〜」

袁術は気絶してしまった

「お嬢様!?!」

「ああ、ちょっと脅かしすぎたな」

「お願いです、お嬢様だけは」

「いいよ、別にもとからそんなつもり無かったし」

「へ?」

「いいから、いきな俺の気が変わらないうちにな」

そこまで言うのと、張勳は袁術を背負って走っていった

「良かったの?」

「あんなんじゃない、悪政も何もねえよ」

「それもそうね：それよりもその傷は！？」

「ああ、大丈夫だって、つばつけときゃ治る」

「へえゝつばつけとけばねえ」

と言いながら、こちらによって顔を近付ける

「やめとけ」

俺が手で制す

「ぶう、なんでよう」

「わざわざ雪蓮にやらしてもらうまでもねえよ」

「そう？せっかくの機会だったのにゝ」

「まあ、雪蓮ならいつでも歓迎だけどな」

「えっそれって…」

「よし、帰るぞ」

「ちよつとごまかさないでよ遊梨」

こうして雪蓮達の独立をかけての戦いは終わった、しかしこれから、天下を取るための諸侯たちの争いが幕を開ける

第24話 ついに独立へ（後書き）

ザギ化しちゃった左慈は何気に使いやすいです。不快に思ってる方はすいません

次回からはそれぞれの依頼にしたいと思ってます

今回遊梨が使った技はTOVの秘奥義です、私の文ではイメージがわからないと思うので、一回実物を見る事をお勧めします。カッコいいですよ

第25話 軍師達の依頼

side 遊梨

袁術との戦の翌日

俺は城で雪蓮を探していた

「おい、雪蓮」

「あら、遊梨じゃない、どうしたの？」

「いや、雪蓮を探していたな」

「えっ私を、それって」

「おう、見つけたぜ冥琳」

「すまないな、遊梨」

「げ、冥琳！」

そう、今日の依頼は政務の手伝いで月と詠は冥琳の手伝い、俺は雑用ってわけだ

「雪〱蓮〱、今が大変な時期だって事はわかっているのでしょうかね」

今独立したばかりで、内政などやる事が山積みだ

「王である貴方が目を通さないといけない書簡が山ほどあるからな」

「助けてゝ遊ゝ梨ゝ」

「ああ、悪りい依頼主は冥琳だから」

「薄情者ゝ」

そして雪蓮は連れていかれた

「頑張れよ雪蓮」

そして俺は月達のいる部屋へ戻っていった

「おーっす、はかどってるか？」

「はかどってるわけじゃないじゃない」

「おいおい、大丈夫か詠？」

「大丈夫じゃないわよ、周りを見なさい」

そう言われて、周りを見てみると
ぐったりしている、穂、亞莎、月がいた

「大丈夫ではないな」

「ええ、なんでこんなに文官が少ないのよ」

そういえば俺がいた頃からそうだったな

「本当ですよ」

さすがの穩も音をあげている

「文官の仕事がこんなに大変だなんて」

亞莎は元武官だったからな

「へう…」

「ちょっと大丈夫、月、月!？」

月が目を回して倒れてしまった

「はあ、俺が茶でもいれてきてやつから、休憩にしようぜ」

「はい〜お願いします〜」

あと、甘いもんでも作ってきてやるか

「はい、おまっ子さん」

「」「ほあゝ」「」

「遊梨さんはお茶をいれるのが上手いんですねゝ」

「まあ、月の方が上手いけどな」

穏と話していると

俺が作ってきたごま団子を亞莎がじっと見つめている

「甘いもんは好きじゃなかったか？」

「い、いえこういう物はあまり食べた事なくて…」

「そうか、疲れた時には甘いもんがいいんだぜ？とりあえず食ってみろよ」

「はい」

そして亞莎が一口食べる

「！！美味しいです」

「それは良かった」

「遊梨さんは料理が上手なのですね」

「ふっ亞莎先生のお口にあってよかったよ」

「そうなのよね、こいつ料理が上手いのよね、月ほどじゃないけど」

「確かに料理は月の方が上手いな」

「で、でも甘い物は遊梨さんの方が上手ですよ」

「そうか？」

「そうですよ、ね、詠ちゃん」

「確かに甘い物は上手よね、好きなの？」

「ん？まあ、どっちかってえと、好きかもな」

「だから作るのもお上手なんですね」

「そんじゃあ、俺は冥琳達の方にもいつてくるわ」

雪蓮がまた逃げ出してなきやいいけどな

「俺だ、入るぞ」

冥琳達が仕事してる部屋に入る

「お、ちゃんと仕事してるな」

「ぶう、遊梨後で覚えておきなさいよ」

「おお、怖い怖い」

「それで何か用だったか？」

「いや、茶いれたから差し入れにな」

「そうか、なら休憩にするか」

「本当に！ありがとう遊梨」

調子いい奴だな

「まったく雪蓮は」

「それにしてもすごい量だな、これを二人で？」

「いや、普段は雪蓮が逃げるから一人だ」

「毎日か？」

「まあそうだな」

「おいおい、休みとってんのか？」

「問題ない、気にするな」

「そうか：働き過ぎで死ぬなよ？」

俺は少しふざけて言う

「そうだな」

冥琳は仕事の山を見ながら言う

「はははっ本当に死ぬなよ」

まんざら、冗談でもなさそうで怖いな

「ちょっと、二人で話してないで休憩しましょうよ」

「雪蓮が少しでも真面目にしてくれればな」

「まったくだ」

「「はあ」」

「??:??:?」

そして、日が落ちてきた頃

「「「終わった」」「」」

「お疲れさん」

「これでやっと休めます」

「あ、月さん眠そうですね」

「まあ、洛陽の時からこんなに働いた事はなかったからね」

「月寝てもいいぞ」

「でも」

「大丈夫、俺が背負って行ってやっから」

「そう、ですか、なら、お願い、します」

と言って寝てしまった

「ふふふ、よっぽど疲れてたんですね」

「そうだな、詠は大丈夫か？」

「ええ、帰るまでは大丈夫よ」

「なら、帰りますか」

「今日はありがとうございました」

「ま、依頼だからな」

「遊梨さんらしいですね、では帰り道お気をつけて」

「ああ、またな」

「はい」

俺たちは部屋を出て行った

城の中を歩いていると

「ん？ そっちも終わったのか？」

「まあな、冥琳の方は終わったのか？」

「なんとかな」

「そうか、なら良かった」

「ああ、それと報酬の事だが」

「今日は疲れてんだろ？ 明日でいいよ」

「そうか、すまないな」

「いいって、そんなに行くわ、しっかり休めよ」

「ああ、ではな」

「おう」

凜々の明星へ帰る道のりで

「冥琳、かなり無茶してるわね」

「わかるのか？」

「ええ、時々手伝いを依頼されてたのだけど、とても一人でできる量じゃなかったわ」

「そうか：今度雪蓮に相談してみるか」

「それがいいわ」

本当に大丈夫だろうか：

第25話 軍師達の依頼（後書き）

今回の話は遊梨の甘党と軍師達の大変さでした。ユーリ＝甘党というのはやはり捨てがたいんですね、次回は祭、明命の依頼を予定しています

第26話 祭、明命の依頼

side 祭

今儂は小蓮殿とお茶をしておる

「ねーねー、祭」

「ん？なんじゃ？」

「雪蓮姉様と遊梨ってなんでくつつかないのかなあ」

「そうじゃのう、お互い思うところがあるのではないかのう」

「思うところ？」

「まあ、自分自身にしかわからんだろうかのう」

そう言ってお茶をすすする

「でも、儂も気になるのう」

「でしょー」

「これは二人に聞いてみるしかないのう、酒でも入れば素直に話すじゃろ」

さて、策殿からいってみるか

その日の夜

「策殿、儂じゃ」

「祭？いいわよ」

策殿の部屋に入る

「どうしたの？こんな夜更けに」

「いや、ちょっと酒盛りに付き合ってもらおうかと思ってる」

「酒盛り？もちろんいいわよ飲みましょ♪」

そして、酒盛りを始めてしばらく経った頃

「策殿は遊梨の事をどう思っておるのじゃ？」

「えっどうしたの急に？」

「いや、昔から恋仲であると噂されているのに、今はそんなそぶり見せないじゃろ？」

「どうって言ったって、まあ、好きだけど？」

「ほう、それで？」

「それでって、それだけだけど？」

「は？他に何かないのか、こう夫婦になりたいとか…」

「まあ、そういうものもあるけど、ちょっと色々あるのよ」

「色々？」

「実はね……………という事なの」

「本当か？彼奴ああ見えてそんな事気にするのじゃな」

「ええ、だからね……………してからにしようと思うの♪」

「ほう、それはいい考えじゃのう」

「でしょ♪」

なるほど、さて次は遊梨じゃな

俺は今、城の中庭にいる、なぜいるのかというと

「はわあゝお猫様ゝ」

この猫大好き少女の依頼である
まさか、本当に猫と会うために依頼するとは

「ほら、遊梨殿も早く」

「りょーかい」

まあ、依頼だからな

「あ、こいつどこ入ってんだ！」

猫が胸元に入ってきた

「遊梨殿羨ましいですゝ」

「いや、俺だって好きでやってるわけじゃ…っておい他の奴も入る
なって、はははっくすぐってえだろ」

「遊梨殿、どうしたらそんなにお猫様に好かれるのですか!! 胸で
すか! その胸元が開いた服装なのですか!!」

いや、それは関係ねえだろ

しばらくして

「はあ、やっと終わったか」

「遊梨殿！！その服は他にないのでですか？」

「いや、なくはないが…明命が着るのか？」

「はい！！」

「いや、大きさが合わねえし、諦めろ」

「そうですか…」

明命が落ち込んで言う

「あー、明命そんなに落ち込むな、そうだなもう少し自然体でいたらどうだ？」

「自然体ですか？」

「そうだ、明命はかしこまりすぎてっから、猫も怖がって近づかねえんじゃねえか？」

「そうですか？」

「ああ、猫が好きって気持ちをもっと正直に出せば自然とあっちからくるもんだぜ」

「ありがとうございます、遊梨殿」

「いって、んじゃ頑張れよ」

さて、依頼も終わったところで帰りますか

「遊梨」

「ん？どうした祭？」

「いや、今日ちょっと酒盛りに付き合わぬか？」

「お、いいねえ」

「そうじゃろ？今日中庭でもどうじゃ？」

「お、いつだかと同じか、いいぜそんじゃあ夜でいいか？もう一つ依頼があつてな」

「うむ、構わぬぞ」

「そんじゃあ夜にな」

たまにはいいよな

夜

俺はまた城の中庭に来た

「待たせたか？」

「いや、そうでもないぞ」

「そうか、なら飲もうぜ」

そして、星をみながら酒盛りをしていたら、唐突に祭が

「遊梨は策殿の事どう思っているのじゃ？」

「誰かの差し金か？」

「いや、単なる好奇心じゃよ」

「そうか：雪蓮は大事なお得意様だよ」

「本当にそれだけか？」

「どういう意味だ？」

「お主は策殿の事を好いていたのではなかったのか？」

「・・・」

いたいところをついてくるな

「どうなのじゃ？」

「はあ、確かにそうだったけど、俺達はもう子供じゃないんだ、雪

蓮は一国の王で、俺はただのなんでも屋だ、どうしようもねえだろ」

「お主はそれでいいのか？」

「・・・」

俺は答えない、いや答えられない

「まあ、策殿はよくないみたいだがの」

「はあ？それはどういう…」

「さて、そろそろお開きにするかの」

「おい、ちょっと待てって」

「詳しくは策殿に聞く事じゃの」

と言って祭は行ってしまった
おいおい、なに企んでんだ？

第26話 祭、明命の依頼（後書き）

今回はちよつとした伏線を残していきました、まあ少し考えればわかると思います、そして次回は蓮華、思春の依頼です
新たに逆お気に入りユーザー登録してくださいました、本当にありがとうございます

第27話 蓮華、思春の依頼

side 遊梨

俺は今思春と対峙している

「いつでもいいぜ？」

「では、いきます!!」

今日来ているのは思春との手合わせだ

「へえ、前より速くなってるじゃねえか」

「まだまだですっ」

「おっと」

こいつぁ、油断できねえな

「今度はこっちからいくぜ？」

「くっ」

今までは捌くだけだったが今度は剣を強めに弾く

「おらよっと」

そして思春の手から剣を弾く

「あっ」

「俺の勝ちだな」

「参りました、さすが遊梨殿、いまだ腕は落ちていないようですね」

「まあな、にしても思春強くなったな、もうちょい踏み込んでうつといいかもな」

「はっ、ありがとうございます」

「二人とも凄いわね」

蓮華が近づいて来た

「よお蓮華、見学か？」

「まあ、そんなところよ、お茶でもどう？思春も」

「お、いいねえ」

「私も構いません」

そして、三人でお茶を飲む

「それにしても、遊梨の剣技ってどうなってるの?」

「いや、どうって言われてもなあ」

「それもそうですね、なぜあの様に振り回すのですか？」

「特に意味はねえけど」

「普通はあんな風にはできないわよね」

「そうか？」

「「そうよ／＼そうですよ」」

いや、そろって言われてもな

「いや、出来んだろほら」

そう言って、軽く空中で回して落ちて来たところをつかむ

「ほらな」

「ほらなって普通はできないわよ」

「そんじゃあ、やってみるか？」

「では、私が」

思春が少し離れて、俺がやったようにやってみせる

「はあっ」

「お、できるじゃねえか」

「はい、でも戦闘中にはとてもできません」

「そんなもんか？」

「なんだ、できそうじゃない、それじゃあ私も」

蓮華が俺達と同じ様にやってみる
空中で回すのまではうまくいったが

「危ねえ!!」

「えっ? きゃっ!!」

蓮華がとりそこねて顔の真横に刺さる

「ふう、危なかったな蓮華」

「・・・」

返事がない

「おい、蓮華？」

ボタン

「おい蓮華!？」

「蓮華様!？」

気絶しちゃったみたいだな

「まあ、大丈夫だろ、部屋まで運ぼうぜ」

「そうですね」

蓮華の部屋にて

「んゝ、あれここは…」

「お、目覚めたか？」

「大丈夫ですか、蓮華様」

「遊梨、思春、そうだ私あの時」

「なんか、悪りいな」

「いいのよ、私が勝手にやった事だし、それにしても私は駄目ね」

「いや、あれができないくらいで」

「ううん、それだけじゃないの、私は貴方達や姉様のような武を持つている訳ではないし、冥琳達のような知を持つてゐる訳でもない、こんな私じゃ、王にはなれないわよね」

「そんな事はないんじゃないか？」

「えっ？」

「武や知があるだけじゃ、王にはなれないってわけじゃないと思うぜ、俺は今までいろんな奴を見てきたいろんなとこの太守や中には王と呼ばれる奴もいた、でもその中で一番いいと思ったのは桜蓮だ」

「母様？」

「そうだ、なんでかわかるか？」

「いえ…」

「桜蓮は呉の民の事を本当に大事に思っていた、だからいい政をしていたし、民達からもいい太守だと言われていた、蓮華は呉の民が好きか？」

「ええ、もちろんよ」

「ならそれでいいじゃねえか、なににも戦ばかりするのが王じゃねえんだ、そんな心が大事だと俺は思うぜ？」

「そうね…ありがとう遊梨」

「いいって、そんじゃあ俺は行くわ」

「ええ、本当にありがとう」

「じゃあな」

俺が部屋の外に出ると思春も出てきた

「遊梨殿、ありがとうございました」

「ん？どうしたんだ？」

「蓮華様の事です、以前から悩んでいたようなので、今回の事です
こし良くなるというのですが」

「それは蓮華自身の問題だ、後は本人が解決するしかねえよ、でも
またこんな事があったら今度は思春が支えてやれ」

「私がですか？」

「ああ、蓮華にとって思春は家族と同じくらいに大事な存在だ、そ
れに前も頼んだだら蓮華を頼むって、あいつが間違うような事があ
ったら、殴ってでも止めてやれ」

「い、いや流石にそれは…」

「はははっまあ頑張りな」

「はっ」

「そんじゃあ、またな」

「お気をつけて」

そういや、今の王は雪蓮だよな、蓮華が王になる事なんてあるんだ
ろうか

第27話 蓮華、思春の依頼（後書き）

今日は卒業式だったんですよ、明日から春休みなんです、少し更新速度が速くなると思います、次回は月、詠奮闘記です。

第28話 月、詠の奮闘記

現在凛々の明星の三人は困っていた、それは一つの依頼が舞い込んだからである

隣の街までの護衛、別段珍しい依頼でもないがただ間が悪かった、今日に限って依頼が大量にきたのである

side 月

「どうしようもねえな、護衛は俺が行くしかねえから他の依頼は頼んでもいいか？」

「はい…」

「悪いいな、できるだけ早く帰ってくつから」

「はい、お氣をつけて」

そういうと、遊梨さんは行ってしまった

「詠ちゃんどうしよう」

「うーん、しょうがないからボク達でできる事からやっていきましょ」

「そうだね」

それじゃあ最初は…

く荷物運びく

「うく」

「だ、大丈夫月？」

「え、詠ちゃんも重そうだよ」

「こんなのボクの分野じゃ…」

「すまないねえ、もうすこしだから」

もうちよつとの辛抱だよく

「そういえば、遊梨はどうしたんじゃ？」

「遊梨さんは、他の依頼で…」

「そうかい、それじゃあ今日は月ちゃん達だけかい、大変だねえく」

へうく、もうちよつと、もうちよつとなのに…

もうだめ

ボタン！

「ちよつと月！？月く！！！」

「あれ？ここは…」

「あ、気が付いたのね月、大丈夫？」

「大丈夫だよ、あれからどうなったの？」

「あの依頼はボクがやっておいたわ」

「えっ？詠ちゃんが？」

「ええ、もう腕がぼろぼろよ」

「ご、ごめんね」

「えっいや、月が謝る事じゃないよ、ほら冗談だよ」

と言って詠ちゃんは腕を回してみせる

「良かった」

「次はもっと簡単な仕事にしましょ」

「そうだね」

く犬探し

「どんな犬なんですか？」

「そうねえ、毛は茶色で赤い首輪をしているわ」

「そうですか、名前は？」

「それが特にないのよ」

「そうですか…」

「ごめんなさいね」

「いえ、仕事ですから」

「いつもは遊梨に頼むんだけど、森のほうにいるらしいわ」

「そうですか、わかりました、行こう月」

「うん」

「詠ちゃんなんか可愛いね」

「だ、大丈夫よボクがついてるから」

そう言って、手を握ってくれた

「きゃっ」

「え、ちょっと月っ」

うゝ転んじやったよゝ

「ご、ごめん詠ちゃん、大丈夫？」

「だ、大丈夫よ」

立って周りを見回すと、一つの影が見えた

「あれ、詠ちゃんあれって」

「本当だ、見つかったね月」

「良かったゝ」

「ありがとうね、二人とも」

「逃げださないように、なんかしたら？」

「そうね、かんがえておくわ」

「それじゃあ行こっ詠ちゃん」

「そうね、次は…」

「政務の手伝い」

「「はあ」」

「どうした？二人とも？」

冥琳様が尋ねる

「今日は遊梨が隣の街まで行ってるから、ボク達で他の依頼をしたのよ」

「それは大変だったな、なんなら今日はなしでもいいぞ？」

「いいわよ、体を使わないだけましよ」

「そうか、今日はそこにある分だけでいいぞ」

「わかったわ」

「頑張ろうね詠ちゃん」

「ええ、これこそボクの分野だからね」

「「終わった」」

「ふっ、ご苦労だったな二人とも、少し休んでいくといい」

「ありがとうございます」

「月、次で最後だから頑張ろう」

「うん」

く店の手伝いく

「え、詠ちゃん焦げてる、焦げてる!!」

「えっきゃっ」

「ああ、もう君は注文聞いてきて」

「うゝわかったわ」

最後は定食屋の手伝いだ

「君は上手だね、そのままうちで働かないかい？」

「い、いえ、私は…」

「ははは、冗談だよ」

その時だった

「ちょっとなにすんのよ!!！」

「詠ちゃん!？」

「月!!！」

詠ちゃんが変な男の人に捕まっていた

「へっへっへ、こいつを殺されたくなくや、金を出しな」

そんな

「え、詠ちゃんを離してください」

「月、ボクの事はいいから」

「ほ、ほら金はやるから」

店長さんがお金の入った袋を投げる

「そんじゃあ、こいつには逃げる手伝いをしてもらおうか」

「ちょっと、約束が違うわよ！」

「そんなの知ったことか」

男の人が出口に近づく

その時扉がひらいて

「あんた、うちのもんになにしてんだ？」

「はあ？ぐはっ」

男の人が殴り飛ばされた

「ふう、大丈夫か？月、詠」

「遊梨さん！」

「ちょっとあんた来るのが遅いのよ！」

「はははっ悪りい、悪りいこれでも急いで来たんだけどな」

「詠ちゃん！大丈夫だった？」

「月、大丈夫よ」

「おっさんほら、金取り返したぜ」

「流石遊梨、頼りになるねえ」

「そんじゃあ、これから凛々の明星をご贔屓にな、帰ろうぜ」

「はい」

その日の夜

「今日は大変だったね」

「そうね」

「でも、洛陽にいた時にはできない事ばかりだよね」

「月は、あの頃に戻りたいと思わないの？」

「少しはあるけど、今の生活は凄く充実してて楽しいよ、でも」

「でも？」

「前みたいに、霞さんや恋さん、華雄さんやねねさんとまた一緒に過ごしたいなあって」

「できるよ、きっと」

「詠ちゃん？」

「この世の中が終わったら、そんな風にまた過ごせるよ」

「そうだね、ありがとう詠ちゃん」

「そろそろ寝よ」

「うんおやすみ」

「おやすみ」

こうして私達の長い一日は終わりました

side 遊梨

たまたま、廊下で聞いちゃった

「みんなで、か」

霞は魏にいるが、他の三人は行方不明だ

「あの二人にはよく働いてもらってっからな」

少しは手伝ってやるか、給料代りにな

第28話 月、詠の奮闘記（後書き）

今回は月と詠の話でした、

そして次回はいよいよ雪蓮の依頼です、後シャオの依頼もあるよでは次回に

感想の制限をなしにしました、感想やアドバイスなど待ってます

第29話 シャオ、雪蓮の依頼（前書き）

20万PV突破しました!!!

今まで見てくださった方本当にありがとうございます
そして、これからもよろしく願います

第29話 シャオ、雪蓮の依頼

side 遊梨

俺はシャオと市を回って見ている

「遊梨〜こっちこっち」

「へいへい」

まったく元気があっていいこった

「ここでお昼にしましょうよ」

「りょーかい」

そして俺らは店にはいる

「シャオはどうする？」

「うーん、それじゃあラーメン」

「んじゃ俺も」

待ってる間俺はシャオに聞いてみた

「なあ、どうして今日はこんな依頼出したんだ？」

「えっ、そ、それは…ほ、ほら前にもこんな事があったでしょ」

「あー、そういやそんな事もあったな、でも休みの日に言ってくれりゃ付き合ってたのに、わざわざ少ない小遣いから出してもらわなくてもな」

「だって、遊梨のとこっぺいつも忙しいじゃない」

「まあ、それもそうか、おっ来たなまず食おうぜ」

「うん」

そして、ラーメンを、食べ終わったところに

「ねえ、遊梨」

「ん？なんだ？」

「遊梨は雪蓮姉様の事どう思ってるの？」

「またそれか」

「またって？」

「いや、前に祭からも同じ事聞かれてな」

「へえー、でどうなの？」

「祭にも言ったが雪蓮は大事なお得意様だよ」

「でも、好きなんでしょ？」

えらく直球だな

「まあ、そうだけど、いろいろあんだよ」

「それってやっぱり身分の事？」

「そうだな」

「ねえ遊梨、私ね遊梨がお兄ちゃんだったらいいなってずっと考えてたの」

「へえ、そりゃあ、初耳だな」

「私は、父様の事は全然覚えてなくてね母様もあんなだったから、全然甘えられなかったの」

俺は黙って話を聞く

「それでね、遊梨に出会ったばかりの頃、今日みたいに市に連れて来てくれた事があったでしょ、その時思ったの、父様がいたらこんな感じなのかなあって」

「おいおい、俺は今もあの時も父親って歳じゃねえぞ」

「うん、だからお兄ちゃんかなあって考えたの、丁度雪蓮姉様が遊梨の事好きだったみたいだから」

「なるほどな」

「それでね、今もその気持ちは変わらないの」

「それで俺と雪蓮をくっつけようって訳だな」

「うん」

「はあ、わざわざんな事する必要ねえよ」

「えっ」

「だから、んな事しなくても、兄ちゃんになってやるって」

「本当？」

「ああ、もうお前らは家族みてえなもんだったし第一他人が兄を名乗って悪いなんて事はないだろ？」

「うん、そうだね」

「そんじゃあ、もう俺はお前の兄貴だ」

「ありがと!!」

「おう、もう雪蓮とくっつけさせようなんて思うなよ」

「まあ、そのうちくっつくだろうけど」

「ん?なんか言ったか？」

「なんでもないよ、お兄ちゃん!!」

「そうか、んじゃ帰りますか」

「そうだね」

そして店を出た

「今日はありがとう」

「まあ、大事な妹の頼みだからな」

「あつ、忘れてた、姉様から伝言があるんだった」

「雪蓮から？」

「うん、えっとね、今日お酒でも飲みたいから一緒にどう、だって」

「そうか」

雪蓮からか

まっ俺も聞きたい事があったし

「いいぞって言っといてくれ」

「わかった、またね」

さて、なに企んでんのか聞かせてもらおうとしますか

その日の夜

「雪蓮、俺だ」

「入っていいわよ」

中に入ると雪蓮が酒瓶片手に待っていた

「よく来たわね、さあ飲みましょ♪」

「おう」

雪蓮から杯をもらい、一口飲む

「おっ、うまいな」

「ふふふっよかった」

しばらく、飲んでいると雪蓮が

「ねえ、今の世の中についてどう思う？」

「いきなりだな」

「いいから」

「そうだな、今までは各諸侯達が争う群雄割拠の時代だったけど、それも収まりつつあるな、今では大きな三つの勢力ができて来てる、魏の曹操、蜀の劉備、そして俺達って所か」

「そうね、そしてもしそれが終わったらどうなると思う？」

「争いのない、平和な世界、か？」

「そう、それが理想的ね」

「で？雪蓮はそれを作るためにどうするんだ？」

「そうね、何もしないかしら」

「へえ、てっきり天下をとるって言うと思ったけどな」

「他の人がどう思ってるかはともかく、私はそんなつもりなんてないのよ、ただ貴方達や呉の民と平和に暮らせれば」

「そうか」

「でも、天下をとるといふ人もいるわ」

「曹操か」

「ええ、彼女はでもをとるために間違いなく攻めてくるでしょうね」

「それで？どうするんだ？」

「私は守るために戦うわ」

「そうか」

「そして曹操との決着がついたら、王位を蓮華に譲ろうとおもうの」

「!？」

おいおい、それは

「自分が何を言ってるのかわかってんのか」

雪蓮を見つめる

「ええ、戦いが終われば平和な世界になる、その中で必要なのは戦いだけが強い私なんかじゃなく、蓮華のような人なのよ、蓮華は私より王に向いてるわ」

雪蓮は強い意思をもった目している

「本気、なんだな」

「ええ、でも本音を言えば貴方と一緒になりたかったの」

「・・・」

「我儘かもしれないけど、孫呉の王の孫策ではなく、一人の雪蓮として貴方のそばに居たいと思ったの」

しばらく、静寂が包む
それを破ったのは

「ぷっ、あはははは」

「ちょ、ちよっとどうしたのよいきなり」

「いや、そんな事のために王位を譲る奴が居たなんてな」

「ぶう、そんな事ってなによ、私にとっては大事な事だったんだからね」

「ああ、だがそれでこそ俺の惚れた雪蓮だな」

まったく、こいつは

「えっ、それって」

「ああ、俺はお前の事が好きだ」

「そう」

「あんま驚かねえんだな」

「ふふふつまあ、わかったもの」

「そうかよ」

「で、お前は、どうなんだ？」

「えっ？」

「まさか、俺だけに言わせて自分は言わないなんて事はないよなあ？」

「ぶう、遊梨っていじわるよね、わかってるくせに」

「はははっ、んでどうなんだ？」

「私も貴方の事好きよ」

そして、抱き付いて口付けをしてくる
俺もそれに答える

「雪蓮、いいのか？」

「えお、遊梨だもの」

「そうか、なら」

俺達は長い夜をすごした

翌日、朝帰りした所を詠に見られて説教され
城に行ったら、全員にからかわれた

第29話 シャオ、雪蓮の依頼（後書き）

やっちゃまった感が半端ないです

最後なんてもう若い私には書けませんでしたよ、まあ少しは書きましたが

そして次回はついにあの事件が：

では、感想やアドバイスまた批評などくださるとうれしいです

第30話 大事な人（前書き）

ユニークが三万突破しました！！
本当に感謝です

第30話 大事な人

Side 遊梨

「遊梨、母様の所に行くわよ」

雪蓮が突然凛々の明星に訪ねてきた

「どうしたんだ急に？」

「私達の事母様に報告しないと♪」

なるほど、そういう事か

「いいぜ、んじゃちょっと行って来るわ」

「はい、行ってらっしゃい」

「早く帰ってきなさいよ」

月と詠に見送られて俺達は桜蓮の墓の下へ向かった

Side 曹操

今日はずいぶん英傑と呼ばれる孫策との戦

「稟、準備は順調かしら？」

「滞りなく進んでいます、ただ動向が怪しいもの達がいまして」

「そう…その者達から目を離さないようにしなさい」

「御意」

「華琳様、一つお耳に入りたい事があります」

「あら、何？風」

「実は黒衣の断罪者らしきものを町で見かけたという報告があります」

「それは本当なの？」

「はい、城に出入りしているとも」

「へえ」

なるほどね、孫策の所にいたなんてね
探す手間が省けたわ

必ず手に入れるわ、黒衣の断罪者…

side 遊梨

雪蓮と共に桜蓮の墓を掃除する

「おし、こんなもんか」

「ええ」

ずいぶん綺麗になったな

「母様、私ね遊梨とやっと結ばれたの、結局母様の言うとおりにな
っちゃったわね」

「そういや、最初は桜蓮が言い出したんだったな」

「そしてね、この戦乱が終わったら王位を蓮華に譲ろうと思うの、
蓮華の方が王に向いてると思うし、なにより遊梨が私が王だとダメ
って言うから…」

「ちょっと待て、んな事言ってるぞ」

「そうだったかしら？」

「そうだよ」

「まあ、それはともかく母様、もう少し見守っていてね」

「そんじゃあ帰るか」

「ええそうね」

帰ろうと雪蓮が立ち上がった瞬間
茂みの奥に弓を構えた奴が見えた
狙いは雪蓮か!!
くそっ!!

雪蓮は気付いてねえ

「雪蓮!!!」

「えっ？」

間に合え!!

俺は雪蓮を抱き寄せて庇った

グサッ

痛ってえな

「遊梨!？」

「雪：蓮、怪我ねえか？」

「ええ、私は大丈夫よ」

「無事：なら、いいや」

「それより貴方よ!! 大丈夫!!」

ただの矢じゃねえな、毒か

「ちよつとまずいかもな」

side 雪蓮

「まずいってすぐに医者に！」

「姉様！大変です、曹操が攻めてきて：って遊梨！？」

蓮華と思春が走って来た

「話は走りながら聞くわ、暗殺者よ遊梨が私を庇ってこんな事に、思春はこの辺りを探り暗殺者を捕らえなさい！！」

「はっ！！」

「蓮華、行くわよ」

曹操、こんな事をしてただですむとは思わない事ね

side 蓮華

姉様は軍を率いて曹操の下へ行った、あそこまで怒った姉様を見たのは初めてだ

「遊梨の容体は？」

「非常に危ない状態です、処置が早く、今はかろうじて意識がありますが、いつまでもつか…」

「そんな…」

「「遊梨／遊梨さん！！」」

月と詠が入ってきた

「蓮華様、遊梨さんは！？」

「今はかろうじて意識があるけど、もう…」

「遊梨さん…」

「ちよっとどうにかなんないの！！」

詠が医者に掴みかかっている

「月、詠…」

「遊梨さん、喋らないで！！」

「悪い：な、最後：まで、面倒：見れなくて」

「喋るなって言ってるでしょ！！馬鹿！！」

「蓮華：二人の：事、頼んでも：いいか？」

「そんな事言わないで！！姉様の事だってあるでしょ！！」

「雪：蓮か、それ：も謝っというて：く：れ」

そこまで言って遊梨は何も言わなくなってしまった

「そんな、遊梨さん！！」

「ちょっと、目開けなさいよ！！」

そんな中私は姉様の下へ向かった、
頬をつたう涙はとめられなかった

side 雪蓮

曹操の軍の前へ歩き出す

「ようやく出てきたわね、さあ同じ英傑と言われるものどうし、楽

「しみましよう」

「楽しましよう？」

「よくそんな口が聞けたものね」

私は持っていた“モノ”を曹操に向かって投げる

「それは!？」

そう、私を狙ってきた奴の死体だ

「こんな事しておいて、よく霸道なんて事言えたわね、おかげで私の大事な人が傷付いたわ」

「大事な人？」

「そうね、この名前だったら知ってるでしょ、黒衣の断罪者」

「っ!？」

「もう言う事はないわ、生きてこの地から出れると思わない事ね」

そこまで言うと、私は自陣へ戻った、奴らを殲滅するために
絶対に許さないわ

第30話 大事な人（後書き）

やっぱり、恋姫視点は難しいですね、特に曹操サイドはあまりやっ
た事ないので苦労しました

感想やアドバイスなど、お待ちしております

第31話 遊梨と明星と二番星

side 遊梨

気が付いたら何もない真っ白な空間にいた
ここは…？

俺は確か雪蓮を庇って…

ああ、そうか、ここは

「地獄、か」

俺が天国なんかいける訳ねえしな

「それは違うぞ」

突然俺以外の声が響いた

「あんたは！？」

side 曹操

「誰だ！！誰がこんな事を！！」

英傑同士の戦いにこんな：

しかも、黒衣の断罪者が倒れたなんて

「全軍撤退するわ！！」

「しかし、華琳様」

「反論は許さないわ、このような戦いに意味はないわ」

「華琳様、私が殿を」

「ええ、お願い春蘭」

私の覇道にこのような汚点をつける訳にはいかないわ

S i d e 遊梨

「あんたは！？」

そこには、俺のよく知る顔があった

「桜…蓮？」

「そうだ久しぶりだな遊梨」

「なんであんたが、それにここは？」

「私の事はともかく、ここは明星が作り出した精神世界といった所かしら」

「精神世界？俺は死んだ筈じゃあ」

「ええ、貴方は死んだわ」

「そうなのか…」

「でも、生き返りたくはないか？」

「できるのか？」

「貴方と二番星があればね」

「俺と二番星が？」

何時の間にか俺の手には二番星が握られていた

「この剣は何なんだ、普通じゃねえってのはわかるが」

「それを説明するのは長くなるが」

「別に構わねえよ」

「そうか、なら話すでしょう」

その剣はな、私の夫が打ったものだ、あいつは外史の管理者と呼ばれていた」

「左慈や、于吉とか言う奴と同じ」

「すでに接触していたか、そうだ、そしてこの剣には特別な力がある」

「力？」

「今、お前らがいる外史には他にはない性能がある、異端者が出た場合外史を消滅させる、星蝕^{ほしは}みと呼ばれるものだ」

「外史を消滅するって事は」

「そうだ、全ての命がなくなるだろうな」

俺は驚きを隠せない

「話を戻そう、その星蝕みに対抗するために作られたのがその剣だ」

「通りでなんか強い訳だ」

「そして、この剣の力を使えばお前の命を再構成する事ができる」

「なあ、なんで俺なんだ」

「それは私にもわからないが、ただお前を初めて見た時、この剣が反応したのは確かだ」

「そうか」

「それで、どうする？」

「まあ、できるんならやりてえな、まだやり残した事もあるしな」

「ふっそうか、だが一つ気を付けなければならない事がある」

「なんだ？」

「お前の命はその剣によって繋ぎ止められている状態だ、しかも再構成した事でその剣に残されている力は少ない、あまり力を使うな、わかったか？」

「りょーかい、でもあいつらを守るためだったら、容赦なく使うぜ」
「？」

「ふっ、好きにしろ」

「そんじゃあ、行くか」

「遊梨」

「ん？」

「雪蓮達を頼んだぞ」

「おう、任しとけ」

そして、俺の体は光に包まれていった

「はあゝあ、ここは…」

どうやら、城の部屋のようだ
そして、扉を開く音が聞こえた

「遊：梨？」

「おう、雪蓮っておわっ」

雪蓮が飛びついてきた

「遊梨よね！ちゃんと生きてるわよね！！」

「悪いな、心配かけて」

「私…貴方がもう死んだと思って…」

そこまで言うのと、俺は雪蓮を抱きしめる

「あ…」

「ちゃんと生きてんだろ？」

「ええ…」

しばらく、このままでいると

「雪蓮様、どうかしたんですかって遊梨さん!？」

「おお、月」

「み、みなさん、大変です、遊梨さんが、遊梨さんが!!!」

行っちゃった

「雪蓮、ほらみんな来るだろうから、一回離れようぜ？」

「いや…」

「いやってお前」

「もう離さないわよ遊梨♪」

「まったく、困ったお姫様だな」

まあ、いいかとそのままでしたら

「「「「遊梨!!」「」「」「」「遊梨さん!!」「」「遊梨殿
!!」「」」

将達や月達が一斉に入ってきた

「おお、みんなお揃いでどうしたんだ?」

「どうしたんだって、貴方が生き返ったって月が」

蓮華が尋ねてくる

「まあ、そこは色々あったって事で」

「色々って、貴方ねえ」

「それよりも、いつまでそうしているつもりだ?」

今度は冥琳が低い声で言ってきた

「いや、これは雪蓮がだな」

「ほう、儂らが悲しんでいる時に策殿とお主はそんな事をしておったのか」

皆がこちらへ歩み寄ってくる

「いや、ちょっと待て祭、俺の話を、ほら雪蓮も離れろって」

「いやだ♪」

結局その後雪蓮がようやく離れて、全員から説教を受けた

第31話 遊梨と明星と二番星（後書き）

今回は結構無理やりでしたね

後、星蝕みとかはまあ頭の隅にでも置いてください

感想やアドバイスお待ちしております

第32話 友のため（前書き）

あの地震から約二週間が経ちました

私は東北地方でも被害が少かったので良かったのですが、隣の県ではすごい被害でしたし、今でも避難生活を送っている人もいます一刻も早い復興を願ってます

第32話 友のため

side 遊梨

あの騒動の後、俺はいつも通りに凛々の明星を経営している
それで今は恒例になってる政務の手伝いだ、俺は何もしてないが

「遊梨さん、これを冥琳様の所に運んでもらえますか」

「ん？ ああ、別にいいぜ」

穩に頼まれた、まあ雑用が仕事だからな

「冥琳、入るぜ」

「遊梨か、いいぞ」

中に入ると、冥琳がいつもの量の仕事をこなしていた

「相変わらず、すごい量だな、ここ置いとくぜ」

「ああ、すまないな」

「にしても雪蓮はまた逃げ出したか、俺が捕まえて来るよ」

「頼む、ゴホッゴホッ」

「おいおい、大丈夫かよちゃんと休んで…」

俺が冥琳の方を振り返ったときに驚愕した
なぜなら

「おい、それ血じゃねえか!?!」

冥琳が吐血していたのだ

「大丈夫だ…」

「んな訳あるか! いったいどうしたんだ?」

「私は不治の病でな、医者にも見放されたよ」

「そんな…」

「この事は雪蓮達には黙っておいてくれ」

「それでいいのか?」

「もう、どうしようもないさ、雪蓮にはお前がいるからな」

その後俺は黙って部屋を出た

「遊梨…」

「どうした? 雪蓮」

「冥琳はどうだった」

部屋を出た後雪蓮が話しかけてきた
その声は真剣なものだった

「知ってたのか？」

「何年一緒にいると思ってるのよ、すぐに気付いたわ」

「そうか…不治の病でもう長くないらしい」

「そう…」

「どっかに腕のいい医者でもいれば…!？」

「どうしたの？」

「いや、ちょっとな、先帰ってるって二人に言っといてくれ」

「そういや、町に腕のいい旅の医者が来てるって、近所の爺さんが言
ってたな」

「ちょっと、遊梨!!」

「まだ行りゃいいが」

俺は今、例の医者が診察していると聞いた所へ来ていた

「ちょっといいか？」

「ん？いいぞ、どこが悪いのだ？」

「いや、俺じゃなくてな」

「？」

そして、俺は事情を説明した

「なるほど、不治の病か」

「どうだ？」

「診てみないとわからないな、明日城に行ってみるとしよう」

「そうか、なら俺の所へ来てくれ、俺は遊梨ここで凜々の明星をや
つてるもんだ」

「お主があのだ：俺は華佗旅の医者をしている、お主の事はここの皆
が言っていたぞ」

「はははっ俺も有名になったもんだな、そんじゃ明日凜々の明星ま
で来てくれ、俺がいれば城に入れっから」

「了解だ」

「治ったのか？」

俺は華佗に尋ねる

「ああ、これで病魔は完全に滅したはず……なっ!？」

「どうした!？」

「病魔が消えていない…」

「なにっ!?! どういう事だ!?!」

「いや、これは病魔ではない、なんなんだこれは」

華佗が驚愕の表情をしている

冥琳は気絶してしまった

「すまない、病魔は完全に滅したんだが、これはどうしようも」

「んな事あつかよ」

俺は怒りを隠しきれない

俺にも冥琳から黒い何かが出ているのがわかる

くそっなんとかなんねえのかよ

握る拳に力が入る、すると俺はある事に気付く

俺が持っているもの、二番星だ

桜蓮の話ではこの剣にはすごい力があるらしい

俺は二番星を冥琳にかざす

「おい、遊梨殿何を…」

華佗が何かを言いかけたが
二番星が光を放った

「なっ！？これは？」

どンドン冥琳の体を巢食っている黒いものが消えて行き、完全に消滅した

「ふう」

「遊梨殿、いったい何をしたんだ？」

「さあ？でもやるだけやってみるもんだな、んじゃ俺は行くから後は任せたぜ」

「あ、ああ」

そして俺は部屋から出ると同時に膝をついた

「ちっ、桜蓮が言ってたのはこういう事かよ」

全身に激痛が走る

手を見ると透けてるように見えた

「こいつあ、無闇に力使えねえな」

「遊梨？どうしたの？」

雪蓮だ、間が悪いぜ

「いや、なんでもねえよ、それよりも冥琳よくなったぜ」

「本当に!？」

「ああ、今は寝てっけどその内起きんだろ」

「これは、遊梨が？」

「いや、中にいる華佗って医者だ、後で恩賞でも与えてやれ」

「そうね、でも遊梨のおかげよ、ありがとう♪」

「おう、んじゃ俺は帰るわ」

そして俺は凛々の明星へと帰った

その日の夜、俺がくつろいでると

「遊梨さん、お客様ですよ」

客？誰だ

入り口まで行くと、華佗が立っていた

「華佗どうしたんだ？」

「いや、もうすぐ旅立つから一応な」

「それはどうも、冥琳はどうだ？」

「公瑾殿はもう大丈夫だろう」

「そうか、いろいろあんがとな」

「いや、俺よりも遊梨殿のほうが」

「謙遜すんなって」

「後、俺の連れが話があるそうだが」

「連れ？」

「ああ、ここではちょっと狭いから外でいいか？」

「別に構わねえけど」

狭いってどういう…
外に出ると

「むっふうううん」

この声は…

「久しぶりね、遊梨ちゅわーん？」

「げっ、貂？」

こいつは、洛陽にいた時のちょっとした変態だしりあい

「貂？、卑弥呼はどうしたのだ？」

「ちょっと、用事があるらしいわ」

華佗の連れってこいつかよ

「んで、俺に何か用かよ」

「ええ、その剣の事だけど」

「っ！？何か知ってんのか」

「私も外史の管理者だもの」

「あの二人と同じ！？」

俺は剣に手をかける

「待って、左慈や于吉とは違うわ」

「本当か？」

「ええ、そして今日来たのは忠告よ」

「忠告？」

「今日その剣を使ったでしょ」

「ああ」

「そのまま使い続けると死ぬわよ」

「やっぱりな」

「知ってたのね」

「まあな」

「貴方は星蝕みに対抗できる唯一人なのだから」

「なあ、星蝕みってなんなんだ、外史が消滅すると聞いたが」

「その通りよ、でもその詳細は誰にもわからないわ、前に起こったのは大昔だもの」

「そうか」

「では行きましょ」

「あ、ああ」

そして貂？は話について来てなかった華佗を連れて行ってしまった

「使い続けると死ぬ、か」

だが桜蓮にも言ったが、俺は…

翌日には冥琳がすっかり元気になり、今までの分雪蓮に政務をさせていた

第32話 友のため（後書き）

今回は少し間が空いてしまいました
だいたいの構想はあるのですが、細かいところができなくてですね
次回は長期の依頼が入ります

第33話 蜀へ、出発前日

Side 遊梨

「はぁ？蜀だと」

冥琳から依頼があると聞いて城に来たのだが

「そうだ、そしてこの書状をとどけてもらう」

「いや、将の誰かに頼めよ」

「うちに文官が少ないのは知っているだろ、それに興覇や幼平には魏の監視をしてもらっているのぞな」

「そうか、確か蜀って劉備って奴がおさめてんだよね？」

「そうだが？それが何か？」

「いや、別になんでもねえが」

あん時ちよつとやり過ぎちまったからな

「それで、受けてくれるか？」

「蜀までとなるとかなり距離があるだろ、その間凜々の明星は月と詠だけになっちゃうからな」

「遊梨さん私たちは大丈夫ですから」

隣にいた月が言う

「月…」

「最近経営がきついよね、誰かさんがこの前余計な出費を出すから」

「うっ、詠それは…」

俺が強盗相手にちよっとはしゃぎすぎちまってな

「だから、大きい仕事しないとやっていけないの、わかる遊梨？」

「はぁ、わーったよ、いきゃいいんだろ」

「それでいいのよ」

「話は終わったか？」

「ああ、それで書状ってのは？」

「これだ、同盟に関するものだからくれぐれも慎重にな」

と言って二つの書状を出した

「これを劉備に、そしてもう一つを軍師の諸葛亮に渡してくれ」

「りょーかい、んじゃ明日の朝出発ていいな？」

「ああ、問題ない」

「俺がいない間、この二人の事見てやってくれ」

「ふっ、わかった、では頼んだぞ」

そして部屋をでた

「俺はちよつと用事あつから、先帰つててくれ」

「わかりました」

さて、旅立つ前にあいつの顔見てくか

「あら、遊梨どうしたの？」

雪蓮は中庭で酒を飲んでいた

「相変わらず酒ばっか飲んでんな、雪蓮の顔見に来たんだよ」

「ふふっ、嬉しいこと言ってくれるわね、どうしたの」

「いや、依頼で蜀に行く事になったからな」

「そう、やっぱり受けたのね」

「知ってたのか？」

「これでも王様よ、当たり前じゃない」

「それもそうだな」

二人で笑い合う

この顔が当分見れないなんてな

「でも、私個人としては、行ってほしくないけどね」

「へえ？何でだ？」

「もう、わかってるでしょ♪」

俺たちは木陰ね寄り添うように座る

「遊梨も飲みなさい、ほら」

「お、悪いな」

雪蓮から杯をもらう

しばらく他愛のない話をしたりした

「なあ雪蓮、蜀と同盟を組むって事はやっぱ魏と戦になるんだよな」

「そうね、彼女は覇道を行くって聞かないだろうから、みんなを守るためにもそろそろ決着をつけなきゃね」

「そうか、まあ別に俺がどうこう言う事じゃねえからな」

「それで、遊梨はいつ行くの？」

「明日の朝には旅立つつもりだ」

「そう：ねえ、遊梨」

抱きつかれた

「しばらく会えないなら、いいわよね♪」

「おいおい、真っ昼間からこんなところでか？」

「私は遊梨がいいなら、いいわよ？」

「はぁ!？」

「ふふふっ冗談よ」

へえ、俺を嵌めるとはいい度胸じゃねえか

「えっ!？ちょ、ちよつと遊梨／／／／／」

「俺さえいいなら、いいんだろ？」

「いや、だから冗談だって／／／／／」

「俺はそう思わねえけど？それとも俺とは嫌になったか？」

「そ、それはほらっ、い、嫌ってわけじゃないのよ／／／／／こんな
とこ誰かに見られたら…」

「ぷっははは、いい反応してくれるねえ」

「なっ！？あなたまさか！！」

「ああ、悪い悪い、ついな」

「ついて何よ、びっくりしたじゃない」

「悪い悪い、そんなじゃあ今夜部屋に行くから、許してくれよ」

「そうね、それならいいわ♪」

「そんなじゃあ、それまで仕事がんばれよ」

「えっ？それはどういう…」

雪蓮が後ろを振り向くと

「ずいぶんお楽しみだったようだな雪蓮？」

冥琳が立っていた

「はははっ冥琳…」

「さて、夜まで仕事が終わるといいな雪蓮？」

「そんなあゝ」

雪蓮は冥琳に連れていかれた
さて、俺も帰るか

その日の夜にあった事はお察し下さいってかb y遊梨

そして翌朝

「そんじゃあ、遊梨しっかりね♪」

「お前もちゃんと仕事しろよ？」

「ぶう、遊梨までそんな事言うし」

「問題を起こすなよ」

冥琳がまじめな顔で行って来た

「できればな」

「お前は昔からなにかと巻き込まれるからな」

「確かにそうだな」

「本当に気をつけろよ？」

「遊梨さんお気をつけて」

「ちゃんと帰ってきなさいよ」

「いない間、凛々の明星を頼んだぜ二人とも？」

「はい／ええ」

「んじゃ、行って来るぜ」

また何か嫌な予感がすんだよな

第33話 蜀へ、出発前日（後書き）

遊梨と雪蓮とでは遊梨が一枚上手です、むしろ勝てる人いるかもわかりません

そして次回は蜀に到着します

第34話 蜀へ、人の話を聞け（前書き）

早めの更新が売りだったのに、突然一週間以上も更新しなくて本当にすいませんでした、理由はあとがきにて

第34話 蜀へ、人の話を聞け

side 遊梨

俺は現在成都にきている

「へえ、なかなか活気があるじゃねえか」

あの嬢ちゃん達もいい政してんだな
さて、とつとと終わらせて帰るか
城はこっちだな

「ちょっといいか？」

門番に話しかける

「何か用か？」

「俺は呉からの使者なんだが、劉備に合わせてもらえるか？」

「なに？わかった、待っている」

と言って、門番は行ってしまった

面倒ごとは避けたいからな、おとなしく待つとしますか
が、天は俺が嫌いらしい

「ん？なあ、愛紗あれって…」

「どうかしたのですかご主人様…貴様は!？」

俺が後ろを振り向くと

天の御使いと関羽が立っていた

「おう、久しぶりだなんてうわ!？」

関羽が偃月刀で斬りかかってきた

「貴様、何しにきた!!」

「いや、俺は劉備に会いに…」

「何!?! 貴様桃香様が目的か!?!」

「目的つつうか、俺は呉の…」

それでも関羽は斬りかかってくる
ちっ、やるしかねえか

俺は二番星に手をかけるが踏みとどまる
こんなところで使う訳にはいかねえな

「お待たせ致しました、劉備様がお会いになるそうですって何してるんですか？」

「ちょっと剣借りるぜ？」

「えっ? ちょっと!？」

兵から剣を借り、関羽と打ち合う

「貴様、何故桃香様を狙う？」

「だから、人の話聞けて」

しばらく、打ち合うと
パキンッ!!

剣が折れちまった、やっぱこれじゃねえと…

「ここまでのようだな」

どうする…

ここはいっぺん捕まっとくか

玉座の間にて

なんか将全員いるし
知ってる顔もあるな

「あ、貴方は!？」

「よっ久しぶりだな、劉備」

「だ、断罪者さん、どうしてここに?」

「桃香様、こいつは桃香様の命を狙ってきたのです」

「えー!? そうなんですか?」

「いや、違うぞ?」

『は?』

「き、貴様、そんな戯言が通用すると思ってるのか!!」

「俺、劉備を暗殺するなんて一言も言ってねえし」

「なっ!？」

「第一俺は呉からの使者だって門番に言っただろが？」

『え?』

「そういえば、門番の人がそんな事言っていましたね」

劉備の隣に控えるちっちゃい奴が言う

「で、では」

関羽が震えている

「あゝあ、俺は大事な書状を持ってきたのに、死んじまったらどうするつもりだったんだろうな？」

「ビクッ」

「俺は呉王の孫策と仲いいからな、あいつ俺が死んだらどうするだろうな? 怒り狂って蜀を潰しにくるかもな?」

『ビクッ!!』

「さて、そろそろ縄をほどいてもらおうと嬉しいんだが？」

「あ、愛紗ちゃんすぐにほどいて!!」

「は、はい!!」

やっとか

「本題に入るぞ？劉備にはこれを、諸葛亮ってのは？」

「は、はい、わ、私でしゅ」

「ほらっ」

投げ渡すと

「はわわ、はわわ」

何がしたいんだ？

「なるほど、これは私たちにも利のある同盟のようですね」

読み終わったのか、諸葛亮が口を開く

「返事は後日でいい、俺は宿にいるからな」

「えっ？城に部屋を用意しますよ」

「俺は城は落ちつかねえんだよ」

「では、お名前をうかがってもいいですか？」

「遊梨だ」

「私は劉備、字は玄德です」

「いや、知ってっけど」

「改めて自己紹介をと思って」

「それじゃあ、俺は本郷一刀、一応天の御使いと名乗ってる」

「では私も、私は関羽、字は雲長だ、先ほどは本当に済まなかった」

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ」

「久しぶりですな、遊梨殿」

こいつは確か旅してる時に

「ん？ああ確か趙雲だったか？」

「星ちゃん、知り合い？」

「主を探す旅の時に知り合ってた、でもやはり黒衣の断罪者は遊梨殿でしたか」

「まあ、その話はいいいじゃねえか」

「ふっそうすな」

その後も自己紹介は続いた

馬超に黄忠、嚴顔、魏延、馬岱

軍師である諸葛亮に？統

全員の自己紹介が終わったと思ったら突然扉が開き

「……遊梨」

「ん？恋じゃねえか」

「ねねもいるのですぞ」

「私もいるぞ」

そこにいたのは、恋にねね、そして華雄だった

「お前ら劉備んとこにいたのか」

「ああ、成り行きでな、それで月様は！！」

「落ちて着けて、大丈夫だ、俺がちゃんと面倒見てるよ」

「そうか、ならよかった」

「あのーちよつといいですか？」

「ん？どうした劉備？」

「董卓さんは遊梨さんが殺しちゃったんですよね、なんで恋ちゃん

達と仲いいんですか？」

「ああ、それはな」

どうする話していいのか

「遊梨よ、大丈夫だこいつらはお人好しだからな」

華雄が言うなら大丈夫か

「まあ、もともと話すと董卓は悪政なんかしてなかったんだ」

『えっ？』

「そこで、あんたらが攻めてくるから、俺が護衛を依頼されて、連合のまえで芝居をうって、董卓達を逃がしたんだ」

「そんな、それじゃああの連合は」

「俺らにとってはそっちが悪だったな」

「そんな…」

「だから、俺はあの時言っただろ？」

「はい…、その事なんです、私考えたんです、私の答えを聞いてもらえますか？」

劉備は真剣な表情で見つめてくる
なるほど、いい目になったな

「いや、遠慮しとくよ、自分の事だろ？」

「はい」

「さて、俺は宿にいるからな、返事が決まったら連絡くれよ」

「あの、宿はもう決まってるんですか？」

「いや、これからだが」

「だったら、城に泊まってください」

「いや、さっきのきいてたのか？」

「はい、でも失礼な事をしてしまったので…」

「はあ、わかった、なら世話になる」

こうして蜀での生活が始まった

第34話 蜀へ、人の話を聞け（後書き）

更新できなかったのはたいした理由ではないのですが、4月になり私も新しい生活が始まるので、その準備でこの様な事になってしまいました。ですが途中でやめる様な事はしないので、最後までこの小説をどうかよろしくお願いします

第35話 蜀へ、遊梨の二つ名

Side 遊梨

「そんじゃあ部屋はどこだ？もう休みたいんだが」

「あ、ちょっと待ってください」

突然御使いが声をあげる

「俺、疲れてんだけど」

関羽の方を見ながら答える

関羽はあからさまに目をそらした

「やっぱりさっき失礼な事をしてしまったので、しっかりおもてなしさせて貰いたいんだけど」

「つまり、何がしたいんだ？」

「いや、今夜宴会でもどうかなくて」

「わあ、ご主人様私も賛成」

劉備も声をあげる

「あー、別に気いつかわなくてもいいぞ」

騒がしくなる気がするからな

「気をつかつてる訳ではなく、これは俺たちの気持ちです」

とは言ってもな

「遊梨殿、ひとの好意を受けとらないのは失礼ではないか？」

今度は趙雲だ

「はあ、わかったよ勝手にしてくれ」

適当に過ごすか

そして夜

『乾杯!!』

「はい、遊梨さんもどうぞ」

劉備から杯をもらう

今は劉備、諸葛亮、？統、そして御使いの所で飲んでいる

「あの遊梨さんはいつから呉軍にいるんですか？」

諸葛亮が聞いてくる

「ん？俺は別に軍にいる訳じゃないぞ」

『はい？』

「いや、だから俺は將軍とかじゃねえって」

「でも、呉からの使者って」

「俺は凛々の明星つつうなんでも屋をやっててな、雪蓮…孫策達はお得意様なんだよ」

「へえーそうなんですか」

「凛々の明星なら聞いた事があります、旅の行商の人がはなしてました」

「あいつら俺に依頼しなくてもいいよな」

「（王をあいつだなんて、何者なんだこの人）」

「ご主人様？」

「いや、何でもない」

「にしても、騒がしいな」

「ははは、うちはいつもこんなだよ」

御使いが苦笑する

「あんたも大変だな、天の御使いだなんて祭り上げられたんだろ？」

「遊梨さんだって黒衣の断罪者じゃないですか」

「違えねえな」

「そういえば、なんでそんな風に呼ばれるようになったんですか？」

「あ、私も気になる」

「わ、私も」

「ただ、許せねえ奴をこの手で殺めていっただけだよ」

「？」

「前に言ったら、世の中には死ぬまで人に迷惑をかけつづける悪党がいるって」

「で、でも軍を頼ったりは？」

「今はあんたらや、雪蓮、曹操がいるからいいが昔はひどかったんだよ、んで官軍が小さな村のためにわざわざ動くと思うか？」

「・・・」

四人ともだまってしまった

「まあ、さっきも言ったがあんたらのお陰で今はそんな奴は少なく

なってきたからな、俺がわざわざやる必要はもうねえよ」

「そう、なんですか」

「ああ、だから自分達のやってきた事に自信もってもいいぜ？」

「はい！」

「さて、俺はもう休むわ」

「えっ？ まだ始まったばかりですよ？」

「俺は騒がしいのは好きじゃねえんだよ、あとは自分達で楽しみな」

俺は立ち上がり、部屋に戻ろうとするが

ガシッ

不意に腕を掴まれた

振り向くと、趙雲がいた

「遊梨殿、ちょっとよろしいかな？」

「いや、よくねえっておい！」

断るが無理矢理連れてこられた

連れてこられた先には武官達が全員武器を持って立っていた

「あー、趙雲これはどういうことだ？」

「いや、みんなで飲んでいたら、黒衣の断罪者である遊梨殿と手合せしようと言う事になってな」

「そうか、でもおれは関羽に捕まったじゃねえか、所詮その程度だよ」

これで逃げれ：なかった

「いや、先ほどは自分の得物を抜いていなかったのにな」

「：前、遊梨恋に勝った」

関羽と恋が言う

「だ、そうだが？」

はあ、正直に言うか

「俺はもうこいつを極力抜かねえようにしてんだ」

「？それはどういう？」

「理由はいえねえが、こいつを抜くときはあいつらを守る時だけだ、もういいか？俺は帰るぜ」

趙雲の手を振り払い、部屋へともどる

やっぱこんなところで使う訳にはいかねえよな

side out

「行ってしまったな、どういう事なのだろうか、剣を抜かないなんて」

趙雲みんなに尋ねる

「連合の時には普通に使っていたが、昼に対峙した時は兵の剣を借りていたぞ」

関羽が連合の時と先程あった時の事を話す

「ふむ、恋や華雄は何か知らぬか？」

「：知らない」

「私もだ、実は遊梨は昔孫呉の黒狼と呼ばれていてな、その時は普通の剣だった、洛陽で会った時にはあの剣をもっていたがな」

『孫呉の黒狼！？』

ほぼ全員が声をあげる

「ってなんなのだ？」

「蒲公英も知らない」

張飛と馬岱は知らないようだ

「孫呉の黒狼って言うのはね、昔孫堅の軍にいた將軍の事で、黒い服と、敵の大将を瞬殺して行った事からついた名前よ」

黄忠が二人に説明する

「「へえ」」

「孫堅とともに戦死したと聞いたんじやが、まさかあの小僧がのう」

厳顔が続く

「でも、あいつが剣を抜かない理由って結局何なんだ？」

馬超がみんなに問う

『うゝん』

「まあ、悩んでも仕方がない、滞在している間に親交を深めれば教えてくれるかもしれんしな」

「星の言うとおりだな、とりあえず今日の所は解散しよう」

最後に関羽がまとめて、それぞれの部屋へと帰った

side 遊梨

なんとかごまかせたな
にしても

「黒衣の断罪者か…」

いつの間にんな大層な名前つけられたんだか

死なないとわからない悪党

そんな奴を初めて手をかけたのは呉の地から旅立った後、桜蓮に言われた自分の正義を探す旅の途中での出来事だった

第35話 蜀へ、遊梨の二つ名（後書き）

と言う訳で次回からまさかの過去編Part2に入ります
三話程度を予定しています

第36話　く断罪者の誕生く　旅は道連れ（前書き）

過去編Part2スタートです

第36話　く断罪者の誕生く　旅は道連れ

遊梨が建業をたって、数カ月が経過していた頃の話である

「ふう、今日はもう遅いから、ここで野宿か…」

遊梨は溜息をはき、木陰に腰掛ける

「そろそろ出てきたらどうなんだ？」

草むらに向かって声をかける
すると

「へっへっへ、にいちちゃん痛い目にあいたくなかったら、金目のも
ん置いてきな」

中から四、五人の男達が出て来た

「最近の賊はそれしか言えねえのか？」

「んな事はどうでもいい、とつとと金目のもん出しな」

「わりいんだけど、俺はしがない旅人だからな、金目のもんは持つ
てねえよ」

「なら、その珍しい剣でいいから置いてきな」

男達は遊梨の二番星を要求してきた

「ほらよっ」

遊梨は自分の前に投げる

「素直でいいじゃねえか」

男の一人が二番星を拾おうとした時

「誰がやるつつったよ」

遊梨の蹴りが炸裂した

「ぐはっ」

「てめえ、何しやがる!!」

他の男達が襲ってくるが

バコッボキグチャガキポキッ

見事にやられ山のように重ねられた

遊梨はパンパンと手を叩き

「そんなに金が欲しかったら、自分で稼いでくれ」

side 遊梨

こいつらがいるんじゃない場所変えねえとな
つとその前に

「あんたはどうする？」

後ろに木に向かって話しかける

「ほお、気付いておられたか」

木の影から白い服の女の子が出てきた手には槍を持ってる

「覗き見とはいい趣味してんじゃねえか」

「失礼、手を貸そうと思ったのだが、その必要はないように見えたのでな」

「ふっ、そうかよ、なら場所を変えるがあんたはどうする？」

「なら、ご一緒させてもらいますかな」

そして少し離れた所で落ち着いた

「さて、自己紹介がまだでしたな私は趙雲、字は子龍という、貴殿は？」

「遊梨だ」

「遊梨殿ですか、遊梨殿もやはり旅の途中で？」

「まあな、そういうあんたもか？」

「ええ、私は主を探し旅の途中でしてな」

「そうか」

「遊梨殿は何か目的が？」

「ん？ いやそんな大層なもんはねえよ」

「ほお、遊梨殿ほどの武をお持ちなら、どこかの軍に士官すれば將軍にでもなれるでしょうに」

「俺はあんま興味ねえな」

「そうですか」

「今日はもう遅い、俺が見張りしてっから先に寝てろ」

「遊梨殿はどうするのですか？」

「適当なところで起きて代わってもらっから、心配すんな」

「では、お願いします」

そして趙雲は眠りについた

俺の目には燃え盛る焚き火の炎が写っている

「さてと…」

遊梨殿と出会った次の日

私はいつもより気持ちの良い朝を迎えた

「いつもより目覚めが良いな」

独り言のようにつぶやくと

「そうか、そいつぁ良かったな」

「遊梨殿早いですな」

「ん？まあな」

はて？何か忘れておるような…
はっ！？

「遊梨殿！！なぜ起こして下さいさらなかったのですか！！」

「ん？ああ、別に気にすんな」

「でも遊梨殿はまったく寝てないではないか」

「いや、隙みて寝てたから大丈夫だよ」

「ですが…」

「本人が気にすんなってんだからよ」

「うむ…わかった」

遊梨殿に借りができてしまったようだ

「さて、俺はそろそろ行くがどうする？」

「遊梨殿はどこを目指しておるのですか」

「とりあえずは洛陽だな」

「ならば途中まではご一緒ですな」

「なら、一緒に行くか？」

「そうですな、お願いします」

旅の途中に借りを返さねばな

第36話　く断罪者の誕生く　旅は道連れ（後書き）

星は好きなキャラです

今回の過去編では重要なポジションに！？（未定）

第37話　く断罪者の誕生く　世は情け（前書き）

更新が遅れてしまって申し訳ないです理由はあとがきで

第37話 断罪者の誕生 世は情け

side 遊梨

趙雲と旅を初めて数日後

「遊梨殿、今日はあの街まで行きましょう」

「そうだな」

一つの大きめの街に行く事になった

「さて、どうする？」

「そうですね、路銀を稼ぐためにもここはいったん別れませぬか？」

「そうだな、そんじゃ夜に宿でな」

そして趙雲と別れた俺は仕事を探して歩いていた

「なんかいい仕事がありゃ、いいんだが…」

俺がふらついていると

「おっと」

坊主がぶつかってきた

「ごめんなさい」

謝って去ろうとする坊主の腕をつかむ

「待ちな、なかなかいい腕してっけど、まだまだだな」

「くっ！」

坊主の手には俺の財布が握られていた

「つたく、最近のガキは」

財布を取り返しagara手を離す

「なんで、こんな事したんだ？親はどうした？」

「いないよ…あいつらに連れてかれたんだ」

「あいつら？」

「お兄さん知らないの？」

「ああ」

「ふうん、んじゃついて来てよ」

そう言って歩き出した

俺も興味があったのでついて行くことにした
路地裏に入りしばらく歩くと

「ここは…」

そこには街にあったような立派な家はなく繋ぎ合わせたようなボロボロの家が多くあった

「じいちゃん」

坊主が声をかけた先には一人の老人がいた

「どうしたのじゃ、ん？そちらの御仁は？」

「俺は遊梨、旅のもんだ」

「そうじゃったか、じゃがすぐ旅立った方がいい」

「なんか、訳ありみてえだな、詳しく聞かせてくれねえか？」

「ふむ、まあいいじゃろ、立ち話もなんじゃとりあえず上がりなさい」

そう言って家の中へ入って行った

俺と坊主も後から続く

「その辺にかけてくだされ」

「さて、話を聞かせてもらえるか？ここの事、こいつの親の事」

「この街も以前は活気のあるいい街じゃったんじゃ、じゃが新しい県令がきてからは勝手に重税をかけて、払えないものは労働させるために何処かへ連れていかれた、じゃからここには子供と農らのような老人しかいなくなっただんじゃ、街の方に住んでいるのは金持ち

ばかりじゃよ」

「そうだったのか」

そんな奴がいるなんてな

「さて、話は終わりじゃ、早くここから旅立つといい」

「なあ、俺をここに置いてくれないか？」

「なんじゃと？」

「もちろんただじゃないぜ？俺は腕もたつし、今まで旅してきたから、食いものの調達だってできるぜ？」

「うむ：そこまで言うなら置いてやらん事もないが、奴らには氣をつけるのじゃぞ」

「ありがとな、ちょっと用事を済ましてくる」

さて、趙雲になんて言うかな

side 趙雲

仕事も見つかり、宿の前で遊梨殿を待っていたのだが、なかなか来ない

しばらく待つと遊梨殿が歩いてきた

「む、遊梨殿遅かったではないか」

「悪い、悪い、仕事は見つかったか？」

「うむなんとか、遊梨殿は？」

「あー、俺はなかなか見つなくてな、お前が稼いだ金で泊まんのもなんだから、野宿するわ、んじゃあな」

それだけ言うと言梨殿はいってしまった

「ちょっと、遊梨殿そんなに遠慮しなくても…」

もう見えなくなってしまった

折角あの時の借りがかえせそうだったのだが

side 遊梨

俺が住み着くようになって数日がたった生活にも慣れ、ここのがキ達ともうまくやっている

「遊梨、今日はどうするの？」

「そうだな、川にでも行くか」

「うん！」

今日もガキ達を連れ、食糧をとり川へ向かった

だがこの日にあんな悲劇的が起こるとは俺はまだ知らなかった

第37話　く断罪者の誕生く　世は情け（後書き）

実は学校が始まったんですよ、なので週一更新になってしまいうかも
しません

第38話　く断罪者の誕生く　正義とは（前書き）

一ヶ月も投稿できなくて本当にすいません理由と言う名の言い訳はあとかきで

あと今回はちよつとというかなかなり意味不明な感じですのでだいたいで理解して下さい幸いです

第38話 断罪者の誕生 正義とは

side 遊梨

街が夜の闇に包まれた頃、俺はひと気のない街を一人歩いていた

「ここか…」

そして一つの屋敷の前で止まる
俺は奴を許せない

それは昼間の事だった
俺がガキ共と一緒に帰ると

村が賊に襲われていた

「おい、どうなってんだ」

「遊梨い…」

ガキ共は怯えている

「ちょっと隠れてろ」

俺の声に自然と怒気が含まれた
そして賊に近づく

「おい」

「ああ？なんだてめえ、死にてえのか？」

近づいてくる賊を切り捨てる

「お、おい何しやがる！！」

「それはお前らが言えた事か？」

一人、また一人と賊達を切り捨てる
そして最後の一人になった

「お前」

「ひっ！？な、なんだよ」

「何故こんな事をした」

「そ、それは、ここの県令に雇われて…」

「なるほどな」

ここまで腐ってやがるとはな

「た、頼むから命だけは助けてくれ」

「お前はその言葉をさっき聞かなかったのか？」

俺は剣を振り下ろした

「ふう、にしても」

辺りを見回す

ひどい有様だ、ボロボロだったがみんなで支えあってきたものがすべて壊された

「くそっ!!」

「ゆ、遊梨？」

ガキ共が出てきた

「悪い、俺は行くところできた、お前らは隠れてろ」

そして冒頭へと続く

「行くか」

奴の屋敷の前に俺は気合いを入れる
その時

「待たれよ」

聞き覚えのある声が門の中から聞こえてきた

「遊梨殿ではないか、この屋敷に何か用がおありで？」

「趙雲か、なにちよつとした野暮用だよ」

「ほう、そんな物騒な物を持ってですかな？」

俺の手には二番星が握られている

「そういうあんたも同じ様なもん持ってんじゃねえか」

「私はここの門番をやっておりますてな、随分給料がいいのですよ」

「へえ、ならその給料ももうもらえねえな！」

俺は闘気を解放する

「な！？これは、本気なのですね？」

「ああ、行くぜ！」

俺は駆け出して剣を振るう

趙雲は槍でそれを受ける

やっぱ賊と同じ様にはいかねえか

「遊梨殿は、何故この様な事をつ！？」

「話す必要はねえなつと」

剣と槍の打ち合いは続くが…

「そろそろ決めさせてもらうぜ？ 蒼破！！」

気弾を趙雲に向けて放つ

趙雲が槍で受け止めた所で後ろに回り込み

「なっ！？」

手刀で気絶させた

「おっと、悪りいな」

倒れる趙雲を受け止める

そして中へと足を進めた

「ふはははは、やっと目障りな奴らを消す事ができた」

「賊達も使い様って訳ですな」

「まったくだ、ボクの言う事の聞けない奴らなんていなくなればいいんだ、そうすればボクの評判は上がり続け、太守や官僚になるのもそう遠くはないな、はっはっは、それに朝廷には知り合いもいるしな」

ある部屋からこんなのが聞こえてきた
ここか…

なるほど、地位欲しさにねえ

「邪魔するぜ」

「な、なんだ貴様は!？」

「まさか、今の話を…」

「ああ、しっかり聞かせてもらった」

「くっ、誰かいなのか、こいつを捕らえろ!!」

「おっと、あんたのお仲間さんは今頃お寝んねしてるだろうよ」

「なんだと!？」

「さて、あんたの番だぜ？」

俺は奴の手下を斬った

「なっ!？お、お前ボクに手を出していいと思ってるのか、だ、第一ボクには朝廷に知り合いが何人かいるんだぞ!!」

「へえ、それで今までやってきた事を揉み消してもらってた訳だ」

「そ、それがどうした、この街の権力者はボクだ、ボクが正義なんだ」

「そうかよ、だがもしも朝廷や皇帝がお前を許しても、俺はお前を許さねえ」

あいつらとの時間は数日と短かったがそれでも俺にとっては大切なものとなるには十分だった

「失せな」

そして俺は……

side 趙雲

うゝん

はっ!?!?ここは

私は遊梨殿と……

「目え覚めたようだな」

「遊梨殿……」

「あの県令は俺が殺した」

「な!?!?何故この様な事を?」

そして私は遊梨殿からあいつがしてきた事を聞いた

「まあ、あの金持ち達が住んでる所だけにいたんじゃ気づかないよな」

「でも、殺す事なんて、官軍に報告して、しかるべき罰を与えたほ

うが…」

「お前は官軍がこんなところまで、くると思うか？」

「それは…」

「それに奴は仮にも地位をもった人間だ、なんの地位もない俺らの言葉なんてたかがしれてる」

「そんな事は…」

「あるんだよ、現に奴のやってきた事は朝廷の奴らに揉み消されたよ、いつだってそういうのは権力を握る奴の味方じゃねえか」

「でも、個人の主観だけで人を裁くというのは、いい事なのだろうか」

「いい事にしろ、悪い事にしろ、あいつらがいま死んで救われた奴がいるのも事実だ、お前は助かった命に向かって、いつか官軍が助けにくるから今は我慢して死ねって言うのか？」

もう私は押し黙るしかなかった

しばらく沈黙が流れる

「なあ、正義ってなんだと思う？」

「えっ？」

「いや、忘れてくれ、さて騒ぎになる前に俺は行くとしますか」

「もう行かれるのですな」

「ああ、お前ともお別れだな」

「遊梨殿」

「ん？なんだ？」

「私には遊梨殿がした事がいい事なのかわかりません、ですが次に会う時にまで、答えを出しましょう」

「そうかよ、まっ会う機会があればな」

そんじゃあな、と言って遊梨殿は行ってしまった

side 遊梨

「正義、か」

自分の正義を貫け、

桜蓮が残していった課題

「はあ、難しいもんだな」

そして俺は次の目的地へと足を進めた

（現代）

「遊梨殿」

「ん？趙雲かどうした？手合わせならしないぞ」

「いえ、別れの時に言った私の答えの事だが」

趙雲はそこで一呼吸おいて

「私は遊梨殿の事を否定する訳ではないが、やはり罪人には相応の罰が必要だと思う、個人の主観ではなく、そういった世の中を作るためにも私はご主人様や桃香様のもとへときた」

「それで？」

「遊梨殿はどうなのだ？先程も申したいように、もう遊梨殿が手を下すような悪人などいないと、なら我々と一緒にその様な世の中を作ろうではないか？」

「いや、遠慮しとくよ」

「それは何故？」

「そういうのはしようにあわねえからな、やる事がないなら仕事を

続けるなり、旅に出るなりするよ」

「そうですか…」

「そんじゃあ、俺は寝るぜ」

そう言って部屋へと戻った

第38話　く断罪者の誕生く　正義とは（後書き）

いやゝ学校がめっちゃくちゃ忙しくて、あと他のアニメにもはまっちゃったりしちゃいまして、この様な事になってしまいました、本当にすいません

でも授業中とかにこれからの構成を考えたりしてたのでこれからは頑張ります

この小説を少しでも楽しみにしてくれていたみなさん本当にすいませんでした

第39話 災厄（前書き）

ザ・急展開です

第39話 災厄

side 遊梨

蜀に滞在してから数日が経った

武将達が度々手合わせを仕掛けてきたが適当にかわして過ごしていたがある日

「遊梨さん」

「ん？どうした御使いさま？」

天の御使いである本郷一刀に話しかけられた

「そんな他人行儀じゃなく、一刀って呼んでください」

「そうか、んで？なんか用だったか？」

「いや、俺は今日非番なんだ、だから遊梨さんと話でもって」

「ふうん、まあいいぜ」

「そんじゃあ、俺の部屋でいいか？茶でもだすよ」

そして俺は一刀の部屋へときた

そして一刀の話を聞いた

劉備達との出会いや、もといいた世界の事

「へえ、それが天の国か」

「あれ、反応薄いですね」

「まあ、俺が行く訳でもないしな」

「そうですか、それで遊梨さんに聞きたい事があるんです」

「なんだ？」

「あなたは何者なんですか？」

「・・・」

「俺の知る歴史では黒衣の断罪者なんて人はいなかったし、董卓は本当に悪政をして殺されるはずだった、でもそれを貴方は覆した、貴方は本当に何者なんですか？」

さてどうしたものか、桜蓮や于吉は言っていた、俺やこいつはこの外史という世界では異端者であると、詳しい事は俺も知らないが、こいつに話してもいいのだろうか

「何か話せない事情でもあるんですか？」

「はあ、わかったよ俺にわかる限りの事を話そう」

そして俺は話した二番星の事、桜蓮の事、そして左慈や于吉といった外史の管理者達の事

「そんなとこだ、確かに成り行きでこんな事になっちまったが、紛れもなく俺は普通の人間だ」

「そうだったんですか」

「一刀も管理者には気をつけろよ」

「はい、わかりました」

それじゃあ、と言って一刀は手を差し出してきた

「これから同盟仲間としてやっていくので」

「ふっ、俺は將軍なんかじゃないんだがな」

一刀の手を握る

その時だった

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

「な、なんだ!?!」

「地震か!?!」

おさまったか?

それと同時に部屋に關羽が入ってきて

「ご主人様!! 大変です、外を!?!」

そう言われ俺と一刀が外に出てみると

「な、なんだあれは!?!」

空は昼間だというのに、暗くなっており、天に一個の星が浮かんでおり、その周りには幾何学めいた網目模様が空を覆っていた。そして網目模様の一部が砕け落ち、それが山にあたりその山が消しとんだ

あれはまさか!?

「星喰か!？」

頭の中で桜蓮の言葉が思い出される

「今、お前らがいる外史には他にはない性能がある、異端者が出た場合外史を消滅させる、星喰みと呼ばれるものだ」

「外史を消滅するって事は」

「そうだ、全ての命がなくなるだろうな」

あれが本当に星喰みだったとしたら

「まじいな」

俺と一刀、二人の異端者が接触したせいで、起こっちゃったのか

「遊梨さんあれが何か知ってるのですか？」

一刀が訪ねてくる

そうか星喰みの事は言っただけだったか

「あれは星喰みつつてな、簡単に言えば俺とあんたが生み出しちまった様なもんだよ」

「えっ？」

「さて、呉への返事はできてんだよね？」

「あ、ああ」

「早く用意してくれ、俺はすぐにもどらなきゃなんねえ」

「は、はい、愛紗、朱里に同盟の返事を貰ってきてくれ」

「わ、わかりました」

「遊梨さん、俺達が生み出したってのは…」

「それについては、国同士集まった時にでも話すよ」

俺は空を眺める

手の二番星が何か反応しているのを感じながら

第39話 災厄（後書き）

星喰みの描写については小説のTOVを参考にしています
物語もついに最終章に入ります

第40話 帰る場所

side 遊梨

星喰みが現れてから

俺は馬を飛ばし、呉への道のりを急いでいた
そして城までやって来た

「雪蓮!!」

「遊梨!?! 蜀に行ってたんじゃない」

「返事はちゃんと貰ってきたよ、それより空のアレについて話がある」

「アレが何か知ってるの?」

「だいたいはな、みんなを集めてくれ」

そして玉座の間に将や軍師が全員集まり、俺は一刀にしたのと同じ
話をみんなにした

「なるほど、星喰みか…まさに災厄だな」

冥琳が話をまとめる

「それでアレはどうすればいいの?」

蓮華が尋ねる

「まあ、手っ取り早いのは俺と一刀を消す事だな」

「駄目よ!!!」

『!?!』

雪蓮が声を荒げる

「遊梨は私の…いえ私達の家族よ、そんな事は許されないわ!!!」

「雪蓮…」

まったく嬉しいこと言ってくれんじゃねえか

「ふう、まったく我儘な王だな、それでこそ雪蓮なんだが」

冥琳が溜息をつく

「まあ、姉様ですからね」

「遊梨がいなくなるなんて嫌だし」

蓮華とシャオも納得した様だ

「蓮華様が言うのなら私に異存はありません、それに遊梨殿にはまだ稽古をつけてもらわねば」

「わ、私も遊梨殿が居なくなるのは嫌です」

「遊梨殿にはお猫様と仲良くなる秘訣を教えてくださいわねば」

「そうですね、遊梨さんには何度もお世話になりましたからね」

「そうじゃのう、これからもこき使ってやらねば」

お人好しだな

だが、それでこそ俺の…

「つたく、お前らは」

「もう離さないって言ったでしょ」

雪蓮が微笑む

「わかったよ、二度とあんな事は言わねえよ」

「ふふっ、よろしい」

「でも、お前らどうするんだ？アレを」

『あっ…』

「はあ、とりあえず、三国で一回話し合った方がいいんじゃないか？」

「そうだな、曹操も今回ばかりは軽視できないだろうからな」

「そうね、でも遊梨はなんであんな事知ってたの？」

「ん？桜蓮が教えてくれたんだよ」

「えっ？」

「さて、俺は帰るぜ、曹操の嬢ちゃんの事はそっちでなんとかしてくれ」

「ちょっと、遊梨」

俺も動くか

あいつらには二番星の事を話していない
星喰みを消すほどの力を使えば俺は：

「戻ったぞ」

家に戻ると

「「遊梨／遊梨さん！！」」

月と詠が出迎えてくれた

「俺がいない間大丈夫だったか？」

「はい、大丈夫でしたよ」

「あんたの方はどうだったのよ？」

「ん？まあ滞りなくできたな」

「そう、これからはここでちゃんと仕事してもらわないと」

「あゝ悪りいんだけど、また行かなくちゃなんねえんだ」

「はぁ！？なによそれ」

「また依頼ですか？」

「まあ、そんなとこだ」

「ふゝん、まあ今回の報酬が結構あったから当分は大丈夫だけど」

「あのゝ遊梨さん、本当に依頼なんですか？」

変なところで勘がいいな月は

「ああ、また他の所にいく事になってな、まあ心配すんな」

「そう…ですか」

「なんかあったら雪蓮達を頼れ、俺から頼んであつから」

「わかったわ、いつ行くの？」

「今すぐだ」

「「えっ!？」」

「ちょっと訳ありでな」

「何もこんな夜中に…まああんたなら大丈夫だろうけどね」

「凛々の明星の事は任せてください」

「おう、頼んだぜ」

そして俺は店を出た

そのまま街の出口へと向かう
出る所で一つの人影を感じた

「はぁ、お前の勘を侮ってたぜ」

「ふふふっ、母様譲りの勘だしね♪」

雪蓮が出口の所に立っていた

「何処に行くの？」

「・・・」

「やっぱりアレに関係あるのね」

空を見上げながら言う

「なぁ、雪蓮…」

「ねぇ遊梨、前に言ったわよね、俺の帰る場所は私のところだって」

俺が旅立つときに言った奴か

「ああ、そうだな」

「それは今も続いているのかしら？」

「ふっそんな事聞く必要あんのか？」

んなもん決まってる

「たりめえだろ？俺は何があってもお前の元に帰るぜ」

「そう、なら心配いらないわね♪」

雪蓮が一步こちらに近づく

「遊梨…」

「雪蓮…」

そして俺達の影は繋がった

「それじゃ、行くぜ」

「ええ、行ってらっしゃい」

そして俺は歩き出した

第40話 帰る場所（後書き）

なんか最終回っぽいノリですけど続きますよ
でも遊梨視点でいくか雪蓮達視点でいくか迷ってんですよ

第41話 開戦（前書き）

展開が急です

第41話 開戦

―赤壁―

ここ赤壁の地にて

魏軍と蜀、呉連合軍が展開している
そして王である三人が舌戦を始める

「曹操さん、考え直してくれませんか？」

劉備が曹操に尋ねる

「今空にあんなものがあるのに私達が戦ってる場合じゃないと思うんです」

「ふーん、ならとっとと御使いと断罪者を差し出しなさい」

「えっ？」

「あの二人を消せばあれは消えるのでしょ？」

「それは…」

災厄を消すには天の御使いと黒衣の断罪者の命を捧げろ

最近噂になっている占いだ

「天の御使いが来ると占った管路が言っていたのだから、正しいのじゃないかしら？」

「うっ……」

そうこの占いをしたのは天の御使いが来る事を占った管路なのだ
現に一刀と共に行動してきた劉備は言葉に詰まってしまった

「それに黒衣の断罪者も毒矢をくらって生きていたのだから、ただ
の人間なのか怪しいわね」

次に孫策を挑発するように言う

「あら、あの時ただの人間だったら、どうするつもりだったのかし
ら」

ここで孫策が始めて口を開いた
そして両者が睨み合う

「ところで提案なのだけれど、貴方の言う断罪者があれを消す方法
を知ってるらしいから、それまで待ってくれないかしら？」

「それにしても断罪者の姿が見えないようだけど？」

「彼は準備があるみたいですここには居ないわ」

「ここにいない人間の事を信じろというのは無理な話ね」

「そう、ならしょうがないわね」

「私はもともとそのつもりだったから、どうなろうと構わないけど
ね」

そして三人は己の陣へと戻って行った

side 雪蓮

あの占いが噂されるようになったのは遊梨が行ってからしばらく経ってからだった

天の御使いは民にも慕われてるみたいだったから、殺されるようなことはなかったけど、遊梨は別だ、断罪者の風貌が知られてないから大丈夫だとは思うけど…

「…蓮、雪蓮!!」

「はっ!?! な、何?」

冥琳に声をかけられた

「戦場だというのに、ほろけていたからな」

「そう…ごめんなさい」

「遊梨の事か?」

「ええ、見送る時はあんな事言っちゃったけど、まさかこんな事になるなんてね」

「そうだな…」

それにあの占いのせいで魏とも戦う事になっちゃったしね、はあ、これじゃ遊梨にあわす顔がないわね

「遊梨なら大丈夫だろう、なにせあの遊梨だからな」

「そうね、それじゃあ行きましようか♪」

「まあ、お前は前線には立てないがな」

「ぶうー、冥琳のケチ」

そして私達は指揮をしている劉備達の所へ向かう

「あ、孫策さん」

「戦況はどう？」

「少し押され気味ですね」

「少しまずいな、諸葛亮は何処に？」

「朱里ちゃんはいまお祈りに」

「お祈り？ ああ、祈祷か」

その時風向きが変わった

「どうやら成功したようだな、後は…」

「祭ね…」

祭には苦肉の策を使って魏へと渡ってもらった

「無事でいるといいけど…」

そして魏の船から火が出るのにそう時間はかからなかった

side 祭

どうやらここまでのようじゃな

船同士を繋ぎ、風向きが変わると同時に火を放ったんじゃが、魏の将に囲まれてしまった

「どうせなら、策殿と遊梨のこれからも見ておきたかったのう」

夏侯淵が矢を放つ

儂は死を覚悟し、目を閉じたが、一向に痛みは来なかった目を開けると

「そんな事言っただけで、見てりゃいいじゃねえか」

長い黒髪をなびかせて、愛刀の片刃の剣をその手に持った男が立っていた

「お主は！！」

第41話 開戦（後書き）

最後の奴は皆さんの想像通りだと思いますよ
次回は遊梨視点です

第42話 愛する人のため（前書き）

遅れて申し訳ありません

第42話 愛する人のため

「遊梨!!」

「おう、久しぶりだな祭」

儂を助けたのは魏の兵の鎧を纏った遊梨じゃった

「どうしてここに？」

「ちょっと近くによったら、随分楽しそうな事してんなと思ってな、にしても魏は兵が多くて楽だったぜ」

そういつてきていた鎧を脱ぎ、いつもの黒い服になった

「祭は雪蓮達んとこ戻ってな」

「お主はどうするんじゃ？」

「あの嬢ちゃんを黙らせてくる、すぐ戻っから雪蓮に伝えといてくれ」

「わかった、気をつけるんじゃぞ」

Side 遊梨

「はっ!! 誰に向かって言ってるんだ、行け」

「待ちなさい!!」

曹操が後を追わせようとするが、俺が立ちふさがる

「おっと嬢ちゃん待ってもらおうか」

「くっ、久しぶりね断罪者」

「そうだな、連合の時以来か？」

「そうね、それと呉侵攻の時は、兵の不手際で申し訳ない事をしたわ」

「いいよ今更」

「そう、それで私を黙らせるとか言っていたけど？私を殺すのかしら？」

「貴様…」

曹操が言った瞬間魏の将達から殺気が感じられた

「そういう訳じゃねえよ、ただ大人しくしてくれればいい、今は兵を引いてくれねえか？」

「あら、貴方も劉備のような甘い思想を持っているのかしら、断罪者が聞いて呆れるわね」

「違えよ、別に戦い（コレ）を否定してる訳じゃねえよ、ただ”今

は”大人しくしてくれつつってんだよ」

「それは孫策が言っていたアレに関係してるのかしら？」

曹操が空を指す

「まあな、それでどうだ？」

「無理ね、第一貴方の力でアレがどうにかなるとは思えないわ」

強情だな

「話はそれだけかしら？」

「じゃあねえな、こいつで語るしかねえな」

俺は二番星を見せる

「話し合いがダメならこいつしかねえよな」

「へえ、貴方も一人で私達全員に勝てるっても？」

「やってみなきゃわかんねえだろ？」

「そう、なら…」

はっ！！

この感じは！！

「伏せろ！！」

俺は曹操に向けて気弾を放つ

「な！？貴様華琳様に何を！？」

「大丈夫よ、春蘭」

曹操は無事だ

そしてそこには

「ハハハ、ヤット見ツケタゾユーリい」

「てめえも、いいかげんにしろよ左慈！」

そこには禍々しい気を放っている左慈がいた

「ユーリい、オレと昇リツメヨウゼエエエエ！！ヒャーハッハッハッハッハ」

「なんなのこいつは？」

「貴様が華琳様を！！」

曹操が声をあげると同時に、夏侯惇が左慈に斬りかかった

「やめろ！！」

俺が止める前に

「ジャマダ」

「なに！？ぐはっ」

「春蘭！？」

左慈の蹴りが夏侯惇に決まる

「ザコハイイ、ユーリダ、ユーリイイイイ」

「あんたらは下がってろ、こいつは俺がやんねえといけねえようだ」

「貴方…大丈夫なの？」

「問題ねえよ」

さて、久しぶりに

「飛ばしていきますか！！！！」

side 曹操

彼が戦っている

春蘭を一撃で気絶させた相手とだ

武はとても綺麗と言えるものではなく、両者とも荒々しいものだったが、私にはかろうじて見えるものだった

「秋蘭、風あれをどう思う？」

「もはや人間技とは思えません、あれを射るのは恐らく無理でしょう」

「風はどう思うかしら？」

「は、はい、あの気の量といい、先程の気弾といい、私にはできませんね…」

「そう…」

私はあんなのを欲していたのね…

side 遊梨

ちっ、こいつはキツイな

「イイぞ、イイぞ、ユーリイイイイ」

「円閃牙!!」

剣を回し奴に斬撃を与えるが、奴はひるまない
一気に決めるしか

「蒼破、蒼破追蓮、戦迅狼破！」

気弾三発に加え、狼の闘気を奴にぶつける
やったか？

「ハハハハハ、モットダモットダ、ユーリイイイ」

ちっ、ダメか

「行クゼエエエエ、ユーリイイイイ」

奴の拳や蹴りが襲う

なんて速さしてやがんだよ

防ぐのが精一杯だ

「ホラホラホラホラ、ドウシタユーリ」

「がはっ」

奴の蹴りで吹き飛ばされ、水中に投げ出される

「はぁ、はぁ」

なんとか船上に戻るが体を動かすので精一杯だ…

「オイオイオイオイ、モウ終ワリカアアアア？」

「なに言ってんだ？んな訳ねえだろ」

口では軽口を言うが

体が動かねえな

もう一度奴を見据えると奥には呉の船団が見える

雪蓮も居るんだろうな…

ふっやっぱここで終われねえよな

二番星と俺がいれば、世界を救える…か、

世界を救うなんて俺のガラじゃねえけど、ここには雪蓮や呉の連中

がいる

世界のためなんかじゃねえ

友のため…

家族のため…

何より惚れた女のために俺は…

「おい」

「ナンダアア？」

「腹括れよ!!」

全力で奴との距離をつめ…

「牙狼撃!」

「ガハッ」

奴の腹に拳を打ち込む

「蒼破、蒼破追蓮、円閃牙、幻狼斬、爪竜連牙斬!!」

そして奴にできうる限りの攻撃を仕掛ける

「くらいな、天狼滅牙!!」

さらに神速の斬撃をくらわせ

「これで決める!!」

閃け、鮮烈なる刃

?? ? 無辺の闇を鋭く切り裂き

?? ? ? 仇名す者を微塵に砕く」

以前使った時よりも多くの斬撃を浴びせ

「漸毅狼影陣!!!」

?? ? はああああ!!

?? ? ? とどめだあ!!!」

切り抜けた後飛び上がり、とどめの気弾を打ち込む

「観念しな左慈」

「マダダ、マダヤルゾ、ユーリイ」

奴の体はボロボロだが
立ち上がった

「オイオイ、コレデ終ワリナシテ、言ウンジャナイダロウナ」

口ではそう言っているが、奴の体は消えかかっている

「モット、楽シモウゼ」

俺は奴に近づき

ザシュッ

二番星で一閃した

「地獄でやってろ」

「ガハッ…」

そして奴の体は完全に消えた

ふう、にしても疲れたな…

「遊梨!!」

はあ、雪蓮の声がしやがる
そして俺は意識を手放した

第42話 愛する人のため（後書き）

テイルズ技連発しちゃいました

秘奥義については前回と同じですがわかる人にはわかりますよね？
ではまた次回に

第43話 選択

side 遊梨

「…ん？ここは…」

目が覚めると

以前にも来た真っ白な空間にいた

「また会ったな遊梨」

「桜蓮…」

「まあ、呼び出したのは私だがな」

桜蓮は小さく笑った

「そんで？俺はまた死にかけたのか？」

「いや、前回ほど重傷ではない現実の世界でもすぐ目覚めるだろう」

「んじゃあ、なんで？」

「お前の事は二番星を通して見ていた、貂？と卑弥呼に会い、左慈を倒したようだな」

「ああ」

そう俺は雪蓮達と別れた後、貂？達を尋ねた、この剣と管理者達の

ことを聞きに

「ここに呼んだのは、一つ話しておかなければならない事があってな」

「そんで？」

「ああ、お前とその剣に残されている力はもう僅かだ」

「…やっぱりな」

「驚かないんだな、あいつとやり合ったときちょっと使い過ぎたかな」

「だが、あれくらいやらねば、奴を倒す事は出来なかっただろう」

「そうか…」

「話をもどそう、お前はその剣で星蝕みを倒そうと思っているようだが、残った力を全て使わねば消滅させる事は出来ないだろう」

「つつう事は…」

「ああ、お前の体も消滅してしまうだろう」

「なるほどな」

「お前はどうするんだ？」

「・・・」

「お前一人命を投げ出すくらいなら、いっそ全員星蝕みに吞まれようとは思わないのか？」

「ふん、あんたならおれのやる事くらいわかってんだろ？」

「そうか…」

「さて、そろそろもどりたいんだけど」

「そうか、最後に一つだけ、本当にその選択を選ぶのだな」

「選ぶんじゃない、もう選んだんだよ」

そして俺の視界は暗くなった

side out

「行ったか…」

残った桜蓮は一人つぶやく

「もう選んだ…か、ふっ私も覚悟を決めねばな」

side 遊梨

「ふう、ここは天幕か？」

あの後どうなったんだ
さて、そろそろ起きるか

「ん？この重みは…」

雪蓮が添い寝していた

「雪蓮…」

付いていてくれたんだな
しばらく雪蓮の髪を撫でていると

「うーん、あれ？遊梨起きたのね、おはよう」

「ああおはよう、それであれからどうなったんだ？」

「貴方が倒れた後、曹操から休戦の話があってね、それで貴方が起きるのを待ってたのよ」

「へえー曹操の嬢ちゃんがねえ」

どんな風の吹き回しなんだか

「それにしても、驚いたわよ、祭から、遊梨が来たって聞いて行ってみれば、貴方がボロボロで倒れてるんだから」

「はっはっは、悪い悪い、それで、間違えて曹操に斬りかけたり

しなかっただろうな」

「えっ！？、ははは、そ、そんな訳ないじゃない、ははは」

凶星だったのか

「そ、それはともかく貴方が無事で良かったわ」

「また、心配かけちまったか？」

「当然よ」

雪蓮が抱きついて来る

「もうしないでって言っても無理なんでしょうね」

「悪いな、俺はこんなだから」

「ううん、いいのよそれでこそ遊梨でしょ？」

「そっか、ありがとな」

そして、顔を近づける

「はわぁー、お二人はそんな関係だったんですね」

「ちよっ桃香、空気読もうって」

「ふーん、なるほどね」

扉の方を見ると、劉備に一刀、それに曹操がいた

「へえーお前ら、覗き見とはいいい趣味してるじゃねえか」

「ぶう、せつかくいいとこだったのに」

「いや、別に覗き見とかじゃなくてですね、単に入るタイミングと
言うかその…」

必死で言い訳をする一刀
つーかたいみんぐってなんだよ

「まあいい、休戦協定も結んでるようだし、準備手伝ってもらおう
かな」

「準備？なんのよ」

曹操が尋ねてくる

「そりゃあ、もちろん

星蝕みを倒しに行くんだよ」

第43話 選択（後書き）

このペースでの更新が当たり前のようになって申し訳ないです
この物語もクライマックス、どうか最後まで読んでやってください

第44話 前夜 (前書き)

二ヶ月ちかくの放置本当にすみませんでした!!

第44話 前夜

side 遊梨

「明日…か」

明日の会議を終えみんなが寝静まったところ、俺は草原に寝転んでいた

「くっ」

ふと手を見ると軽く透けて見えた

「もってくれよ…」

明日俺がする事は皆に話したけど、俺の体の事は言っていない、余計な事だからな

「凛々の明星…か」

空には星蝕みのせいで不気味な模様が描かれているが、ただ一点、凛々の明星だけは輝いていた

「綺麗なもんだな」

「あら？それは私に言ってくれてるのかしら？」

独り言が返ってきた方を向くと雪蓮がいた

「お前の事じゃねえよ」

「ふーん、妬けちゃうわね」

「星相手に何いってんだか」

軽口を言い合うけど、やっぱりいいもんだな

「隣、いいかしら？」

「ああ…」

雪蓮が隣に座る

それに合わせて俺も上半身を起こす

「……」

しばらく静寂が辺りを包む

それを破ったのは雪蓮だった

「ねえ、遊梨」

「ん？なんだ？」

「明日の事なのだけど…」

明日…

「とりあえず、あれの事は俺に任せといて、他の奴らは手を出すな」

会議の時、俺が言った一言目はこれだ
会議に参加しているのは各国の代表と軍師だ

『はあ？』

当然の反応だろう
手伝って欲しいと言ってあったからな

「それはどういう事かしら？」

最初に声を上げたのは曹操だった

「そのままの意味だけど？」

「そのままの意味って貴方ねえ、華淋様に向かって、なんて口のきかたするのよ！」

曹操の隣に控えていた軍師の奴が言う

「桂花、今はそれどころじゃないわ、断罪者：遊梨でいいのかしら？つまりアレは貴方でなければ対処出来ない」と

「そういうこった、そんであんたにも頼みたい事がある」

「頼みたい事、ですか？」

劉備が聞き返してくる

「そうだ、この作戦を邪魔しようとする奴らが出てくるかもしれない、その警戒をしてもらいたい」

「邪魔ですか…」

「そうだ、何がくるかわかんねえけど、頼む」

俺は頭を下げる

「わかりました、いいよね朱里ちゃん」

「はい、遊梨さんにはお世話になりましたし、蜀は手伝います」

「魏も協力するわ」

「なっ!?! 華淋様、こんな男のいう事など」

「桂花、今は彼の事を信じるしかないわ、それとも貴女には他に策があるの?」

「ぐっいえ…」

「なら決まりね」

あとは…

「うちもちろんいいわよね、冥淋」

「ふっ、そうだな」

聞くまでもなかったか

「ありがとな、それじゃ明日は何が起こるかわかんねえから、もうお開きにしようぜ」

こうして会議は終わった

「遊梨、貴方は大丈夫なのよね？」

雪蓮が尋ねてくる
そんな顔するなよ

「どうしてそんな事聞くんのだ？」

「勘…かしら」

「勘か、お前の勘はよく当たるからな」

「ええ、だから…」

「なあ雪蓮、俺さ旅してて思った事があるんだ」

「え…？」

急な話題の変換に戸惑っているが俺は続ける

「旅してっとき、なんか楽しくてさ、性に合ってるのかもしんねえな」

「そう…なの？」

「ああ、でも一つ悩みがあつてな」

「悩み？」

「早く帰りてえーって思つちまうんだよ、旅は楽しいんだけどさ、
なんでかわかるか？」

雪蓮は首を横に振る

「やっぱ、雪蓮といたいんだよな」

「え…」

「言つたら俺の帰る場所は雪蓮のそこだって、早く帰りたいってのは
そういうこつた、だからさ」

少し間を開けて

「今度はお前も連れてつちまおうと思つてんだ」

「私も？」

「ああ、そうすりゃ問題ないだろ？まあ、俺のわがままだけどな」

「ふふっ、そうね」

「嫌がつてもお前を奪つていくからな、もう王様じゃねえなら容赦
なくできるからな」

「あら、怖いわね」

「それに…」

「それに？」

「お前を奪いに行くって事を思えば、明日意地でも生き残らなきゃいけねえからな」

「遊梨…」

「ほら、明日は忙しいんだ、もう寝ようぜ」

「ええ」ガシッ

腕に抱きついて来やがった

「あー雪蓮、早く天幕行こうぜ」

「嫌よ♪」

「嫌って風邪ひいちまうぞ？」

「あったかいから大丈夫よ」

はあしょうがねえか

「まったく、風邪ひいて明日失敗しても知らねえぞ？」

「遊梨なら大丈夫よ」

そうかい…

「昔こういう風に中庭で寝た事もあったわね」

「そうだな、あの後噂が広がっちゃって大変だったな」

「そう？ 私は嬉しかったわよ？」

「俺は桜蓮やら、祭やらにからかわれて大変だったよ」

「でも私を奪いに来るんでしょ？」

「そうだな…」

「楽しみにしてるわよ？」

この時の雪蓮の顔はとても美しかった
凛々の明星に負けないくらいに…

第44話 前夜（後書き）

八月中には完結させたい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5588q/>

真恋姫無双～黒衣の断罪者～

2011年8月20日04時23分発行